

1993

大正十三年一月二十九日第三種郵便物認可  
昭和二年二月一日發行(每月一回一日發行)

永樂町人 編輯



【號六十九第】

二  
月  
號

# 金物類

京城府本町三丁目

近藤安吉商店

電話本局 一五六二番  
三六一二番

# 第三版

井上收著

半島に聽く

(定價一冊金參圓五十錢)

京城黃金町二ノ一四八

發行所

炎車洞

茶屋 賣品 庫

# 頭の先より足の先まで

と云ふ趣意にて洋装に必要な附属雑貨部を開設致しました、實用向から高級品迄ズット取揃へ、確かな品を極めて薄利で御便利に御提供申します、何卒『丁子屋の洋服』同様御評判の程御願申上げます。

## ▲雑貨部品目

帽子、ワイシャツ、カラー、ネクタイ、ボタン類  
メリヤス、セーター、沓下、手袋、首巻、ズボン  
ツリ、ハンカチーフ、小供セータ、下着類

## 毛布新着

有名なロシア毛布各種、旅行用として最も妙  
日本毛織特製茶毛布各種、寝具用として必需品

京城南大門通り

# 丁子屋洋服店

電話本局  
三六四二二  
三九二二二  
七二〇九〇三  
番

休日無し毎日夜九時迄營業  
御用の際は店内雑貨部御呼出被下度  
市内は御一報次第現品持参貴覽に供し申候

内地への御土産  
お手近の御贈答品  
日常の御使用品には

鮮内産品使用御奨励の

御思召を以て

三和高麗焼  
漢陽高麗焼  
三和編  
製造元

富田商會へ

御下命願上げます

京城南大門通三丁目

電本三三〇九

同 本町二丁目

電本五五四



# 均質牛乳

牛乳界の大革命

日本最初の試み

均質牛乳の特徴は

脂肪を粉碎して居ります故に消化が宜しく風味の佳良と獣臭のない事は一度召上った方には直覺せられます長らく腐敗しませぬから小兒や病人の方々にはこの均質牛乳に限ります品質本位でありますから値段の競争をせないのは弊場の主義生命であります。

朝鮮總督府病院特定御用

陸軍衛戍病院御用

京城府各病院御用

## 平山牧場

電話光化門一三三番  
京城東小門外

◎銘仙と

毛糸◎

秩  
ち  
ぬ  
也

堀内満輔

電話本局  
八五五  
九〇〇  
〇六五  
番番番

◎多少に拘はらず御用命

の程を願ひ上げます

# 二 月 號 目 次

愛識	忘れられた日鮮關係	解脫上人	病兒の枕頭に黙座して	何を以て第一とする	南滿洲素通りの記	葉隠れの中から	秋十句	クニといふ語の意味	不眠症	渡鮮前の一週間	藤井先生	動物學上の兎	財產差押を喰ふの記	牧民心書と獨乙憲法	閑談語	佐渡の「鈍馬人形」	大正から昭和へ	部の誘惑	芝居今昔話	漢詩一つ	をり	ラヂオ泣言二つ	法廷隨筆「微苦笑」	五人の生命を失はんとせし話	讀んだものから	靈	森有禮劇の上演	郷里の風味	帝展一瞥	大善大惡の中間	若返法を提唱す	振替貯金の話	歌舞伎座を觀るの記	麻雀禮讚	京城つれづれ	妙な挨拶	京城を去らうとして	兎合戦	ヨボと坊主	裁	北京の晚餐會	薩			
京城築業會社	朝鮮鐵道協會	中樞醫院	佛教慈濟會	京城新聞社	基督教青年會	京南鐵道會社	鐵道局	法學專門學校	元町小學校	總督府財務局	中樞醫院	總督府殖産局	京城婦人病院	法學專門學校	法學專門學校	東拓京城支店	東京鐵會社	朝鮮佛教團	忠北道廳	朝鮮圖書印刷	京城覆審法院	鍾路警察署	東拓京城支店	新町病院	植村外科病院	總督府遞信局	赤十字本部	京城府廳	京城日報社	遞信局	李王職	京畿道評議員	殖産銀行	不二興業會社	總督府殖産局	「心の友」社主	辯護士	京城日報社	倣新學校						
鈴木文助氏	岩本善孝氏	中村榮二氏	小水眞郎氏	平野俊郎氏	丹羽清次郎氏	井上賢太郎氏	木塚常三氏	新田留吉氏	佐藤七太郎氏	片岡喜三郎氏	山岡善槌氏	江原善槌氏	吉田雄次郎氏	工藤武城氏	園部敏氏	井上收氏	柄澤四郎氏	堀邊得司郎氏	堀一知郎氏	小林藤右衛門氏	前田昇氏	堂本貞一氏	川上喜久子氏	龜田正氏	伊藤憲朗氏	森六治氏	松本光氏	渡邊完治氏	植村俊二氏	津田常男氏	佐々木正太氏	早田伊三氏	鮫島宗也氏	浦原久四郎氏	篠田治策氏	足立丈次郎氏	守屋徳夫氏	飯泉幹太氏	南部とも子氏	鈴木竹麿氏	大浦貫道氏	宮崎毅氏	伊集院兼雄氏	廣江澤次郎氏	濱口良光氏

# 蔭口

濱口良光

腹がたつと怒鳴りたくなる。そんな時思ふさま怒鳴つてしまふと胸がスーとして、自分の感情は満足する。しかしその爲、相手方は平靜な心を攪きまはされ、感情を蹂躪されることとなる。——吾々は他人の感情も尊重してやらなければならぬ——それでは吾々は腹がたつても、じつと感情を抑へつけて黙つてゐるか、それもあまりに不愉快なことである。それではどうしたらいいか、私はこの陰性な感情が昂騰し、或は積聚したら、徐々に安全に發散させたいと思ふ。——その具體的良方法は蔭口である——吾々が筋の通らないことで長上から叱られたとする。腹がたつ。だがその時爆發させてしまへばたゞでは納らぬ。そこでその場はそのまゝ引退つて、蔭で思ふさま不平をならべる。さうすると、その中に極端に撓められた感情が、徐々に復舊して何でもないやうになり、却つてあの時云はなくてよかつたとさへ思ふやうになる。これは長上に對してばかりでなく、對等のものにも、又は夫婦間でもみなさうである。しかし、たまにはその蔭口が洩れて却つて直接に爆發させたより以上の憤怒を買ふこともある。けれどそれは爆發の必然的であるに對して、偶然的であり、百に一、二の出來事である。こんな理由から、私は蔭口にも或る價值を認めてやり度いと思ふのである。即ち爆發

しやうとする陰性な感情の安全網として、又思ふこと云はねば、腹ふくる、心地のする凡夫の充足機關として、相對的な價值を認めてやりたいと思ふのである。と云つても何も獎勵するものではない。從來『男らしくない』としてたゞ冷遇されて來た蔭口に一臂の力をそへてやるに過ぎないのである。

北京の

## 晚餐會

廣江澤次郎

### 亡友を欽慕

大正十三年の夏と記憶する、時の朝鮮總督府内務局長大塚常三郎さんは、滿蒙と北支那視察に出張された、丁度私は奉天に居たので歡談の機會は多かつた、視察完了夜行での歸るさ、奉天驛頭で大塚さん曰

『廣江君、明朝五龍背溫泉へ着きあそこで安東の西澤領事や、平北知事の生田君と會合する、どうだ君も來ないか、一ト風呂浴びて俗塵を落とそうや』

突然の動員令？に少々面喰つたが、鳳凰城に用件もあつたので一議に及ばず賛成同行した、五龍背溫泉で半日清遊を恣まにし私は北に、大塚さん一行は南に袂を別つた、星移り物變り大塚さんは其後内大臣秘書官長に榮轉し、二十年間苦勞せし愛着の朝鮮に別れを惜みて、雲上人となられたが不幸宿痾再發し、天壽を全ふせずして逝かれた、私は豪快精勵の大塚さんの英姿をモウ一度此世で見たい！

ブツキラ坊の様で非常に友情に厚く、大マカの様で仲々緻密、而も直情徑行堂々社會を闊歩した大塚さんは、矢張り偉大な人傑であつた、回顧し私は欽慕に堪えぬ。

### 公使の寵招

大塚さんの後任生田新局長は『朝鮮統治の重任に當る者、接壤地帯の滿蒙と支那本土の實情に通ぜざる可らず』と十月下旬旅路につかれた、十一月末私は奉天に居た大連經由青島行の用件もあつたので旅程變更し、鐵路天津北京を経て南下に決定生田局長一行に加はつた、北京で滿鐵の高柳中將と生田さんを主賓とし、公使館の本庄少將や滿鐵公所長古仁所さんや私共陪賓仰せ附かり、公使館で晚餐を頂戴仕つた。

才氣煥發豪宕不羈の名將軍、玲瓏玉の如き人格と聰明無比の良局長、ゴ主人公は人も知る木堂先生の愛婿、名公使として國際的に令聞噴々たる芳澤さん。宴會場は莊重優雅なる公使館の大ホール、酒は特製櫻正宗でゴ主人ゴ自慢の逸物、奇抜なる諧謔輕妙なる警句口を衝いて續出し、笑聲堂を揺がし交民巷街の靜寂を破り、戒嚴令下の北京とは思へなかつた、主客十二分の歡を盡して扶桑館に歸つたのは十一時過ぎであつた、生田さんのお蔭で其席に列する光榮に浴した事を感謝して置く。

井上收氏著

### 半島に聽く

お取次 雜筆社

あつた、私はいふ歌だと思つた、

歌らしい歌を詠んだことがない、



り度いと思ふのである。即ち爆發

かれた。私は豪快精厲の太場さん  
の英姿をモウ一度此世で見たい！

# 愛吟の歌

伊集院兼雄

私には數首の愛吟の歌がある、  
嬉しい時、悲しい時、寂しい時な  
ど感情の動搖につれてつい唇から  
ほとばしつて出るのがこれらの歌  
である、歌をつくつてみたい、そ  
の時の氣持にびつたりと合つた歌  
を詠んでみたい、さういふ歌心が  
湧いて感情の切なるとき、これら  
の歌が口に出て私は心ゆくまで愛  
吟して止まないのである。

玉の如き命だきしめしみるゝと  
大地の上に生きんとぞ思ふ

この歌の作者が誰であるか知ら  
ない、けれどもこの歌の境地に似  
たものが常に私の心にもさまよふ  
てゐるのである。

いく山河越へさり行かばさびし  
さのはてなん國ぞ今日も旅行く  
牧水のふるい歌集のなかにあつ  
たやうに思ふ、私はこの歌にある  
やうな情操に襲はれてつい臉を熱  
くすることがある、寂しいやるせ  
ない氣持が胸一杯にひろがつてす  
つかりセンチメンタルになつたと  
きなど、この歌が如何に貴く如何  
にたのもしいかといふやうな感じ  
がする。

磯山のがけに咲きたるしやくな  
げを捨てかね持ちて東京へ還る  
之は友人篠崎潮二の作である、  
ロイド眼鏡の底にうるんだ眸をぢ  
つと見すえながら彼はこの歌をよ  
くうたつた、カフエーなどのかへ  
り道すがら深更の閑寂な空氣をふ  
るはして彼はほがらかに、しかし  
哀調をふくんだ聲で朗吟するので

あつた、私はいゝ歌だと思つた、  
たゞ自分自身がその境地を踏んで  
ゐないことが何となく物足りなさ  
を感じたのであつた、がこの頃の  
やうに東京を戀ふる心で一杯にな  
つてゐる際は眞に迫るやうな心に  
なつてしみるゝとこの潮二の歌を  
愛吟して止まないのである。

母と子がまずしき世帯ちげに乗  
せ移り行く夜を遠煙花鳴る  
歌友橋君が詠草したものである  
ことを記憶してゐる、之なども實  
にいゝ歌だと思つて何時も愛誦し  
てゐる、歌はあながち大家の作な  
らずともかうした貴重な實感によ  
つて人を感動せしめるかくれた歌  
人の名歌があることをおろそかに  
してはならないと思ふ。  
さういふ私はかつてまだ一度も

## 京大風聞記

吉田 莊 一

○京大文科漢文學の人々が、支  
那を視察したのは、昨年のもので  
あつた。

○支那文學史を受持つてゐる兒  
島老教授が團長、たしか支那哲學  
を受持つてゐる高田助教授が幹事  
長といふやうなことで、方々を押  
廻つた。

○北京に着いて、或る塔を見物  
する時、一行は人數だけの觀覽料  
を拂ひ、中に這入つて、寶物を見  
る、一同流石に支那ですなど、舌  
を巻いたり、涎をたらしたり。

○斯くて、塔外に出で、人數を  
點檢して、將さに、行進を始めん  
とすると、これはおかしい、一名  
不足！而かも高田助教授が見へな  
さ。

歌らしい歌を詠んだことがない、  
歌を詠みそしてその時の高潮した  
感情をそれによつて慰めまた轉換  
せしめやうと努力することはあつ  
ても何時も徒勞に終つてしまふの  
である、そのときの淋しさはまた  
たへがたいものがある、別個の立  
場に別個の哀愁が切々として胸を  
うつて來るのである、近頃は歌を  
詠みたいといふ希望さへはるかな  
るものとなつてしまつた、本當に  
寂しくてならない、醒めながら巷  
を彷徨することはあつても歌心を  
呼びさまさうとする氣持になれな  
いのはどうしたものか、しかし愛  
吟の歌だけは忘れることが出來な  
い、歌心は湧かなくても愛する歌  
の朗吟だけははかない氣持でうた  
つてゐるのである。

○先生紛失、先生紛失、一體ど  
うした譯だと、念のためもう一遍  
塔を開かせ（一行は、こゝで二度  
目の開扉料を拂ふ）よく／＼中を  
調べて見ると、居るわ／＼一名の  
哲人がまッ暗い中で、凝然として  
或る朔像と對立してゐる。高田先  
生／＼と呼ぶが、先生も現代を  
超越してしまつて、返答がない。  
そこでこれは非常手段に限ると、  
五六人がかりで、ワツショ／＼、  
とう／＼塔外へかつぎ出す。

○歸來、教授室で、團長兒島教  
授の報告談の一部に『どうも我高  
田先生は、團體旅行には適しませ  
んな、開扉料の二度拂は構ひませ  
んが、例のワツショ／＼の、特別  
勞力が必要なんだ、頗る骨が折れ  
ましてな』。

○因みにいふ、高田先生は、先  
秦文學に通曉し、その作るどころ  
の絶句の如きは格律森嚴、秦漢諸  
家に迫出すると稱されてゐる。

# 裁判

宮崎 毅

正月のある日外に遊んで居た十歳の女の子と八歳の男の子が面膨らしてやつて来た、男の子は手に破れた繪本を持つてゐる、そして云ふ「僕がこの本を見て居たら姉ちゃんが見せと云つたけれど僕が未だ見て仕舞はないから後で貸すと云ふのに無理に取ろうとしてこんな破つてしまつた」女の子は云ふ「昇さんは繪本を買ふときに一時間で見て仕舞ふから見て仕舞へば直ぐ貸すと云つたから一時間目に借りに行つたのに貸してくれないから昇さんが悪いわ」男の子「僕は一時間で見て仕舞ふつもりだつたのに茂君が遊びに来て一時間で見て仕舞へなかつたからも少し待つて頂戴と云ふのに待つて呉れないから姉ちゃんが無理だ」と斯う云ふ事案だ。

「それは、お前達二人共に好くないね、約束通り貸して上げないものもわるいし、未だ見て仕舞はないものを無理に借りようとした者もよくない、だから両方からあやまつて仲直りしなさい」と僕はとりあへず調停を試みた、と「姉ちゃんは何時も無理を云つて僕をいぢめる、昨日も幸ちゃんとかへ僕と一緒に遊びに行くと言つて置いて一人で待つてしまつた、だから今日は承知しない、姉ちゃんのお金で別の本を買つて返して貰ふ」と態度中々強硬だ、蓋し此の紛糾一日の故にあらず矣。「そんな事を云ふものぢやない、學校でも兄

弟は仲好くせよと教へられたらうに」でも姉は弟をいづくしむものだと云ふのに内の姉ちゃんは少しも僕をいづくしまない「昇さんだつて少しも私の云ふことをきかない」と雙方中々僕の仲裁には悦服しない、事茲に至つては仕方がないから「それでは姉ちゃんの本を買つて昇に返しなさい、そして破れた繪本を貰ひなさい、本を買ふお金は父さんが上げます」男の子「父さんが、お金を上げちゃあ何にもならない、姉ちゃんのお金で買つて返して頂戴、でなければ僕にも同じほどのお金を頂戴」と云ふこふ云ふ場合には屢々遭遇する、子供でも中々権利の上に眠らないと同時に機會均等を主張することとを忘れない、辯護士の子供だからどうかしら? 「よし」それでは

## 強盗と語る

平田久雄

○ 去年晩秋の或る夜、兇器を持つた一賊が、竹添町の山縣悌三郎氏邸に忍び込んだ。

○ 併し主人は、少しもアワテない例に依つて閑々悠々たるものだ。賊のひそんでゐる所へ行つて「まあ、こつちへ來給へ、自分も閑だから、しばらく話さうぢやないか」啞然としてゐる泥棒氏を、さあ、遠慮は入らぬと、とう／＼書齋へ引いて、香茶なんか振舞つて、のび／＼と二時間ばかり閑談したものだ。

○ ところが、これを誰が知らせたか、侍従武官になつてゐる令息の武雄さんが、大に驚いて書を寄せ

淑子が破つたのだから淑子のお金で買つて返しなさい」「そりや無理だわ、淑子のお金で買ふと淑子のお金が昇さんのより少くなるから」と、蓋し二人共同額の小遣を貰つて所持して居るのだ、彼等は假りに他の方より劣る事を肯じない、僕が死んだ後の遺産争が思ひやられる、尤も争ふ程の遺産は出来そうもないが、「いけませんお前のお金で買つて返しなさい」際限がないので第一審の判決を下した「いやよ／＼父さんは男だから昇さんのひいきばかりしてゐる淑子は母さんに聞いて貰ふからい」とう／＼判事の忌避をやらした。判事更迭の上再審理をして漸やく本を買ふ金の半額を國庫より補給し破れた本は淑子の所得として和解が成立した。

て「お父様、あなたは強盗をつかまへたとの評判がありますが、ホントですか。どうぞお願です、そんな危ない仕事はなさらないやうに。これから賊が這入つたら、何も彼も皆んなやつて下さい。私達は、遠方でどんなにあなたの御日常を心配してゐますか」この誤報、誤傳、誤誠告に、老山縣さん「イヤ、これは飛んだことになつたワイ」。

○ すると、一日おいて、令弟山縣五十雄氏から亦た一信。そして曰く「兄さんが泥棒をつかまへたとの評判あり、併し弟は信する能はざるなり。世如何に無力の泥棒あればとて、マサカ兄さんに取つて押へられるほどの弱虫ありとは、信する能はず、従つて弟は、その賊といふのは、多分隣家の黒猫のことだらうと、大に安心してゐるところです」山縣さん、これを讀んで「フム、少々人を馬鹿にした處もあるが、その洞察力は徹底してゐる……」。

るが、悲しいかな現實的の心理はまさしく侮蔑の裏面である

深い同情と理解を有するものであ。そして強和問題を考察する時



一日の故にあらす矣。「そんな事を云ふものじやない、學校でも兄

か、侍従武官になつてゐる令息の武雄さんが、大に驚いて書を寄せ

處もあるが、その洞察力は徹底してゐる……』。

# ヨボと坊主

大浦貫道

日本人が朝鮮人を呼ぶにヨボといふ。近來、この語に對する反感と反省の聲を聞くようになったのは、うれしいことである。しかしまだ大體に於て呼ぶ人も呼ばれる人も無反省である。呼んで何等の抗議も抵抗もないから、反省しないと云ふことは、大なる錯誤である。平氣で呼ばれて居る者の心の底には、必ず深刻な憤りが流れてゐることは事實である。

さる朝鮮人の大官が騷擾鎮撫の講演に出かける途中、このヨボの語を以つて取扱はれ、ふん然として踵を後にして歸つたといふ話を聞いた。或る日本人の大官が鮮人青年を愛育すること多年、しかるにたま／＼その妻君より、この一言を聞いて悲しい排日の心を培はれた由は本誌で讀んだ。かゝる例はいくらもある。

これと同じき意味に於て、僧侶を指して坊主といふ語を以つてする者が多い。相當教養ある紳士の家庭に於て、對話の中に於て、坊主呼ばりをよく聞く、特に芝居に於ては坊主役と云へば、皮肉な役として人の嘲笑を招くように作られてゐる。

ヨボと云ひ、坊主と云ひ、本來の語義に於ては賤稱でも輕蔑の意味でもないことは勿論承知してゐるが、悲しいかな現實的心理はまさしく侮蔑であり賤稱であることは掩ふべからざる事實である。

内鮮融和と呼んでも、この言葉日本人の口から除かなくしてどうして出来ようか、四十萬の在鮮日本人の中で、この語を使はぬ人が何人あるうか、國民道德の振興だと論じたところで、小學校の先生ないし教養ある士が、靈界の偉人、弘法大師、日蓮上人を坊主呼はりして何んの効果があるうか。

他人を賤視し、他人を蹂りんすることによつて、決して自己は高められない、聲たからかに他を賤稱する傲然たる人を見て、私は、張り倒してやりたいと云ふより、情ないあさましい感に打たれてならない。日本人は一般におそるべき自尊心をもつてゐる國民である。ヨボ、坊主、ケトウ、チャンコロ、ロスケといふやうな輕薄なゲビタ言語を使用して大得意である。

たとへ悪意がないにしろ、愛嬌にしろ、戯談にしろ、うくる者にそうした感を與えんとすれば、まさしく人間冒瀆であり刑冠である乞ふ、試みに地位を轉じて見よ、オイ新聞屋サン、オイ腰辨サン、オイ彼は屋サン、オイ巡的サン、と呼ばわれ、我が輩日東國民也とそりを打たせてゴ活歩の折から、ジャツブさん、スケベーさんと招かれて、感果して如何に。人間は人間として禮讃したい。

私はヨボと同一に坊主と敬愛なる紳士淑女諸賢よりかたづけらるゝ僧侶である。よつて今鮮人諸君がヨボの呼稱に對する、抗議と反感の心理に對しては、何人よりも

深い同情と理解を有するものである。そして融和問題を考察する時單なるヨボの二字が如何に重大なる結果をもたらすかについて、深く憂ふるものである。同時に坊主といふ語に對しても、心ある士の反省を求めてやまぬ。

かつて洛西峽は臨川寺といふ禪房に客たる時、飄然として訪れた小倉袴の粗野朴訥の好漢があつた、むくつけなる筆者に慇懃に私は明石元次郎といふ者です、老師はお出でになりますか、——世にときめく陸軍大將明石柏蔭居士が明日臺灣總督として赴任する前日、寸暇を偷んで恩師、間宮英宗禪師を訪ねたのであつた。

山中別に別事なく麥飯に荀子汁で、將軍惜別の饗應することになり、私はお盆をかゝえて給仕を仕ろうとすると、將軍は固辭して、私はお坊さんから給仕に預る程の者ぢやありませんと、たつて自ら麥飯をよそわれた、翌日、京都驛で下村民政長官以下雲の如き送迎者を一睨し一等車に這入つた將軍が、名もなき雲水に對する愛語の供養は、破戒の雲水に深刻な教訓を與へたことを附記する。

## 大和町から

廣江澤次郎

松原純一氏のおことづけ  
『……京城雜筆は、益々熾んじやネー、結構な事だ。僕は毎號記事全部愛讀は勿論、廣告迄一字一句漏れなく讀んでゐるよ、松本さんによろしく。そしてこの事を傳へてくれ給へ……』  
右相違なく御報告申上候也。

# 兎合戦

鈴木竹麿

兎年の正月ですから、兎の堅い話しを書かうと思ふたが果さなかつた。それで本號には兎合戦と題して柔かいものを御覽に入る。

物語りは私の小學校時代に溯る郷里は今でこそ、大學を始め凡ゆる學校が揃ふて居るが、其當時は僅かに中學と師範學校より外なくそれが最高學府の如き觀であつた何んでも今から考ふると、その生徒達は二十前後の天下の志士氣取りのものが多いやふだつた。或る冬に此の二つの學校が協同して兎狩を擧行したのだから無事に收まる筈はないのです。何んでも師範學校の方が二つ程獲つて、中學の方は一つも獲れなかつたと記憶する。師範の方は二つの兎を一つ宛長い竹竿の先きに結び付け、是を先頭に隊伍を組んで、續々と市中に入り込んで来て、大道狭しと、町なかを練り廻はるので、獲られぬ中學の方は、何か文句をつけねば此場合收まらぬのです、獲つたからと云ふて何もそんなに意張るに及ばない、武士は相見お互でないか、そんなら此方にも相當覺悟があると云ふので、二校の生徒が衝突を始めた、そこが私の門の前であつたので、此騒動が小學生徒時代の私にはあり／＼と記憶に残つて居りました。何んでも自差す敵は兎なりと、兎の争奪戦が初まる、やるまい、取ろうと、兎を結んだ竹竿に攻め寄せたので、竹竿が無暗に空中に振り廻ぼさるゝ、兎角する内に一羽の兎は、竹竿に

結んだ繩を残した儘何處かへケン飛んで仕舞ふた。そんなことは合戦最中の生徒達には無論氣が付く筈がない。その内巡査や學校の先生方が集まつて、引分戦となり、師範側は大意張りで引上げた。私の家族は皆んな門前に立つて兎合戦の見物をして居つたので無論兎の行衛などの詮議處でない。處が下女が兎の耳をつかんでぶら下げながら、お庭に兎が落ちて居ました！、兎の處置に就ては横取したとあつてはカチ／＼山の狸よりも狡猾なことになるので、當時師範學校附屬小學校生徒である私は、翌日私の先生であり且つ前日兎合戦を敢行された師範生徒である先生様に空から降つた兎を御届けに及んだものだ。勇敢なる先生眼をパチクリ／＼、是れが兎の年の思ひ出話しに一つ。

## 京城を

去らう  
としらう

南部とも子

京城を去る日が来た。  
生れて育つた私の故郷を近日去らうとしてゐる。豫期しない事でもなく、又京城に永住しようと思つてゐたでもないけれど、いよいよかう確定してみると、何だか信じられなくて、ひとごとの様ばかり思へる。  
此處での生活もかなり長いものだつた。

寒空に白衣をまとつてゐる鮮人を見ようと、異様な姿のチゲの群船の様な履物、長煙管等々々にも

何等奇異の感を抱かせられない程私は京城に馴れ、京城に浸りきつてゐた。

下の關から東海道線を走り、或は門司から九州各地を廻る時の方が、遙かに不思議な物を見、珍しい風物に出逢ふ。

私どもの心ついてからの京城とこの頃の京城とはすつかり變つて來てゐる。文化の力がグン／＼迫つて來て、朝鮮神宮の石段の偉大さや、總督府の壯麗さにはたゞ驚嘆の他はない。けれど、日毎に失はれてゆく高麗の都のおもかげを何處かに少しは残しておきたい願ひがしきりに湧く。

破れた城壁からむだつたかすらの火の様に燃えてゐる美しさや其の下に匂ふ水色の野菊の寂しさ北漢山に群れ咲く野生のアネモネ名もない丘、小さなせうらぎ、さうした凡ゆるものに、私は限りもなく思出や夢が残されてゐる。それ等の總べてに充分の愛着を感じてゐる。

まして、父が逝つたあとの淋しい一人ぼつちの母の事を思ふと堪えがたい氣がする。  
が、然し今は未だ見ぬ異國の衝に對する、好奇と憧憬とがより多く私の心を奪つてゐることを否むことは出来ない。

では、京城よ、京城の人々よ、どうかとしえに健かに。そして、再び私に京城を訪れる機が與へられるならば、私の夢を生むだ、いろ／＼の姿が何處かに止められてゐることを切に／＼祈つてゐる。

## 謝年頭缺禮

朝鮮鑛業會

徳野眞士

依るが平生の精神修養が一番大切である。又借り上手と云ふ事もあツマリお互の立場を考へ、誠意を以て話を進めれば大した間違はない。

# 妙な挨拶

飯泉幹太

丁度十月半ばの或る夕方、例のネコゼを一層丸くして、會社から家路を急いでみると、「ヤ、お歸り、今度は金借りですな」と出し抜けて聲を懸けた者があつた。吃驚して見ると、鮮銀の老課長だつた。流石の私も何んと應答してよいか狼狽して只「ハ、よろしく」と言つたきりで二の句が出なかつた。ドンナ考でコンナ事を言つたのかサツパリ判らないが、實に妙な挨拶をする變な男だと思つた。

世の中に金借り商賣など云ふ者はないのである。普通金借り屋と云ふ銀行ブローカーだつて、借りる反面には必ず又之を借りる相手がある。而かも其の相手は銀行が多いのである。事業家が其資金を借りる事のあるのは當然過ぎる程、明かの事で、ソコデ銀行もあるのである。コンナ變な先生が誤つて營業でも廻つたら、ソレコソ大變、始終顧客をオコラすばかりで、顧客が假りに止むを得ず金を借りたにしても快く之を返す氣にはトテモなれぬだらうと感じた。所謂貸し上手、斷はり上手と云ふ事が銀行家の秘訣である。氣持よく貸して而かも一厘一毛も損をせぬばかりか、顧客をして常に其の意氣に感じて此の金ばかりはドウしても返さねばならぬと云ふ心持にさす事が必要である。又斷はつても別に怒りもせず却て其の理のある所に悦服して歸さすと云ふコソが必要である。之れは一ツは經驗にも

依るが平生の精神修養が一番大切である。又借り上手と云ふ事もあるが嘘をツクのが上手と云ふ譯ではない、常に誠實であると云ふ事である。確實なる事業で、極めて精確なる計畫の下に、經驗ある人格者が之を經營する場合に、其の資金を借りる事は大體サマデ六ヶ敷い事ではない。只銀行家とて全智全能の神でないから、一寸の説明、應接位で、各般の専門的事業や、經營者の人物を直ぐ見わけける事が困難で、十分調査する必要があるのである。ソコデ一行主義で永く取引すると云ふ事が自他共に利益となるのである。幸に銀行家と顧客との氣合がシツクリ合へば別に議論はないが、ソウうまく問屋で卸さぬ場合が多いのである。

## △江湖見聞記

吉田莊一

東拓の松本光さんといへば、アノ短軀精悍の、キビ／＼したやり手かと誰でも肯く。

ところが、この松本さんは、誰あらず明治法學界の權威故梅謙二郎博士の、わすれがたみとは、恐らく知る人はあるまい。

松本さんは、故博士の一番末の男の子で、それこそ故博士が、目に入れても痛くないほどにして育てたものだと聞いてゐる。

片岡喜三郎氏、元町小學校の校長としてよりも、隨筆道の達人として、一部の人に知られてゐる。

この片岡さんの兄さんが、遞信

ツマリお互の立場を考へ、誠意を以て話を進めれば大した間違はないのである。多數の得意の中には随分ヒドイ先生もあらう。然し之れあるが爲めに、銀行家は味増も糞も一緒に取扱ふ事は出来ないものである。只心の鏡に一切の事が直ぐ映る様に修養しておく事が必要である。同じ事を言つても其の人又は言ひ振りによつて馬鹿に癪に障る事もあるがソウでない場合もある。之れは其の人の徳、不徳と云ふが結局誠意の有無によつて別れるのである。ソウして此の誠意の發露は實に平生の修養にあるのである。チョツトの挨拶でも馬鹿に出来ないものである。注意せねばならないのである。

(十二月十五日稿)

局にゐる、文書課主任の片岡達之助氏がそれだ。至つて體の小さい人で、昔役人が劍を吊つた時代、ぞろ／＼とサーベルを引摺つて歩いたことで有名。亦た湯の中で、『あゝ結構な湯だ』と、首だけ出して感歎してゐるので、友人が『フンさうか』といきなり飛込むと、何んのことだ湯量が少くて、臍までしかない。とう／＼風邪を引いて『オイ片岡君、お蔭でひどい目に逢つたぜ』。

話はそれツ切りでない。この小男が、實に柔道二段の猛者、一たび寢業となると、どんな巨漢でもブン／＼手玉にとるんだから、實にモノ凄。

も一つ、筆蹟の秀拔なこと、實に水際立つたものだ。これだけは『朝鮮一』と、公然僚友が自慢にしてゐる。



# 京つれ 城つれ草

## 守屋三葉

○暮れ行くまゝに慌ただしき哉何とて暮は慌立たしきや、日はうららかに輝けども長閑けき心地とてなく押し詰まるまゝに吹く風のみ徒らに身に浸むべし、人の世の約束事とは知れど、さてもうらめしきは師走なる哉。

○罪なくて配所の月を見んなど宜給へける人あり、負ひたる債務もなく果すべき義理だになく一切の結縛を離れていとも靜かに暮れ行く年を鑑まほし。

○暮れ行くまゝに眼に入るもの一つとして嬉しきはなし、障子の破れたる、墨の古びたる、女房子の着物に迄つくづく見入るも暮故なるべし、都の大路小路色とりどりの旗立て並べつ、格安販賣、割引安賣、福引景品付などさまざまき看板を見るも年の瀬の荒さが故なるべし。

○きこゆるものなべて味氣なきも暮故なるべし、本町通りの人口三越支店の軒下など襪襪を纏へる貧兒の脛もあらはに物乞ふ聲など師走なれば殊更哀れ深かるべし。自轉車の輪など常にもなくけた、ましく、自動車、のラツパにも一段の怒氣を宿せり、行き交ふ人々安らげき氣配を宿さず、唯わけもなく先をこそ急がめ。女房の風呂敷

下げつゝ小きさみに急げる、音譜に寫さばそは「ソプラノ」なるべし。

○賞與金など貰ふ日は悲しからずや、何處にいくら彼處にいくらなど勘定するに、早や幾何も残らず、幾度支拂科目を更正するも、結局不足を感じる時など哀れは一しほ増され、結局貰はぬものと想へば夫迄なれど、そは凡人の及ぶべき心術にはあらず。子供に館を與ふれば喜ぶべし、まだ嘗めやらぬに奪はゞ泣き出すべし。泣く子をとらへて最初から貰はぬものと思へと諭したりといかで甲斐あるべき。

○忘年会など長閑に催したきもの哉、心會へる友どち打集ひつ、残るところなく酌み交しうたひつくしたる心行く業なるべし、御世話になりたれば一献。關係淺からねば一席など繰返しもて行くまゝに毎夜打續きて唯慌たゞしく年は逝くべし。忘るゝにあらす忘れしめらるゝなり、さてもうるさき年の暮哉。

○内地人など足も空に狂ひ走るに朝鮮人などいとも長閑に悠々たる京城の暮なる哉。本町界限など燈しびきらめき互り鼎の湧き立ちたらんばかりなるに鐘路など黒く塗りたるセメント樽の二列に並びてケロリ閑たる朝鮮ならでは見られぬ年の暮なるべし。

○さはれこの一年が程に京城など見違ふる程仕上げたる哉。總督府の巍然と其の勇姿をあらはしたる、京城府廳の楚々として端正なる、東亞日報、朝鮮日報、光化門

郵便局など相繼いで其の巨體を横ひたる、大小擧げて數ふべからず就中鐵塔高く天空を凌げる放送局など京城には目新しき景趣なるべし、雜筆社の新築などたとひ輪奐の壯美はなくとも町人畢生の偉業として永く京城同人の誇なるべし。

○聖上病み給へて今日此頃は一しほ寂し、憂鬱の間に年はいぬべし、痛ましき極みにこそ。

### △ 自慢ばなし

#### 山口のぼる

○中樞院の中村榮孝君、總督府稅務課の山口泉君などと來ると、まだ白面の、わかい法學士さんである。

○中村氏がゴ自慢といふのは、僕の村は元來百姓村で、昔から農業者の外には、何物もぬなかつたのに、こゝに僕といふ法學士……大學出身者が出たんだから、村に歸ると、僕もエライもんだよと、あごを撫でると。

○山口泉さん、ウフンと鼻で笑つて『僕が一高を出たのは、驚く勿れ七十七番といふピリから數へる方が遙に早い成績だつたが、それでも大學に這入り、それを終へ、將來は課長さんにでも、ならうといふ野心満々だ……どうだ七十七番には驚いたらう、ウフン』

○若い人の正月は、罪がない、斯うしてゴ兩人は、互に玉杯を、けて『オイ、しつかり遣れよ』

○佐藤法專校長『僕の八字髯は人がヒツ張るから切つたんぢやないよ、自分でウルサイから始末したんだ、事ほど左様に、繁茂してね』と、校長マダ未練満々。

時に勝つたためしが無い、氣持よ

らげき氣配を宿さず、唯わけもな  
く先をこそ急がめ。女房の風呂敷

る、京城府廳の楚々として端正な  
る、東亞日報、朝鮮日報、光化門

たんだ、事ほど左様に、繁茂して  
ね」と、校長マダ未練満々。

# 麻雀禮讚

足立丈次郎

△ 東京では勿論、京城でも、己に時代後れの感はあるが、麻雀と云ふ支那の遊戯は、實に面白いものである。

△ 西洋人などは、室の構造も裝飾も、且つはテーブル椅子等に至るまで、總て支那風とし、支那服に着換へて此遊戯をやるものがある。と云ふ事程左様に趣味多き遊戯である。

△ それほど此遊戯は悠長で、古雅で、上品で、且つ複雑で、算數的家庭的遊戯である。

△ 道具其物が己に雅味たつぷりで牌や出來役の名稱を支那語でやる處に、一段の雅味と悠長さが加はる。

△ 此頃京城の料亭でも、麻雀の組位備へない處はない、藝妓など麻雀を知らねば賣れぬと云ふ有様。

△ 藝妓中でも有名なのは大和屋の福千代、出來役の勘定の早いこと數學の先生も三舍を避ける程だ。

△ 其他三孝、秀千代などの麻雀好と來ては話にならぬ。光菊の如きも仲々上手だ、おたみ老に至つては下手の横好か。

△ 希望の牌を自摸したとき、三元牌を二枚以上有つ時、或は面白き組合せの牌を得たとき、和了(上る)した時などの快味は實に何とも云へぬ。

△ 満積をしたときの心持は一層愉快だが、僕が偶然五筒開花をした時は飛び上るほど嬉しかった。五筒開花は期待して殆んど出來難い珍役だ。

△ 中待でも片待でも或は兩待でも今に和了せんとするときは翠丸が上つたり下つたり、胸には動悸が浪打つ。

△ 之に反して面白き大役を作らんとして、今に出來上りそうな時に相手の人に和了せられた時程残念な事はない。

△ 麻雀の勝負は一は運命である、手がつく時は盛んにつき、ドシドシ和了して勝つが、つかぬ時はドウしてもつかず、大敗を招くことがある。

△ 麻雀は虚心坦懐で之を遊び、何でも早く和了する様心懸くるが、一番好い様だとは、麻雀を遊ぶ人の常に云ふ處だ。

△ 麻雀は少し上手になれば、點數多き良役を作らんとして失敗するものが多い、持牌が宜しかつたら兎も角、牌相當の計劃で進行するが良いと思ふ。

△ 麻雀は意氣込が大切で、何か氣懸りがあつたり、或は負はせぬかと初よりビク／＼で懸つたりした

時に勝つたためしがない、氣持よく邁進した時は多くは勝である。

△ 麻雀の道具は始めはドンナものでも良かったが、段々ヤレばヤレほど上等の道具が欲しくなり、面白さも多くなるのは、他の遊戯と同様のやうだ。

## いろいろ帖

平田久雄

○ 技藝女學校の井上校長、生徒の答案用紙をしらべて、少し紙が贅澤だと、當の生徒を呼んで「△△さん、もつと悪い紙が結構ですな」。

○ 龍山署の吉田警部、義太夫がうまい。而かも即席即興、その場で作つてやるのがうまい。信田署長感歎して「こんな立派な發聲器に、サーベルをさげさせておくのは惜しい」。

○ 佛教慈善會の小水さん、井上收さんの愛讀者で、記者に語つて曰く「私は井上さんが、福岡に行かなかつた事に満足してゐます」。

○ 京日支配人の鮫島さん、若返り法の實行者「十歳ぐらゐ若返るのは、何んでもありませんよ、死んだ大隈侯は百二十五歳、私は百五十歳を提唱します」。

○ 大浦貫道さん、地所を見るとスグ鉛筆で家屋設計圖を書く。一分一厘の隙もない。棟梁感心して「あなたはエライですね」大浦さん昂然として「棟梁、二十年このかた、毎日設計してゐる、上手な筈だ、但し俺のうちはいつ建つことやら」棟梁嗟嘆して「御同感です、私も一生他人の家ばかり建てゝゐます」。

# 東京の

## 歌舞伎座

### を観るの記

篠田治策

世間は不景氣だといふ、然も東京の芝居は毎に大入りだ。都人士の藝術趣味が發達したにもよるたろうが、見物人を見渡せば、吾等の如き田舎者(?)が其半ばを占めて居る。東京以外殊に鮮滿樺太等に在る者が、上京の機會を利用して、一流の藝術に接觸するの樂みは、吾れも人も皆同じと見ゆる。滯京二週間に歌舞伎座と新橋歌舞場を見たが、演舞場の菊五郎の高時、め組の辰五郎よりも、歌舞伎座の方が今回は殊に面白かつた。

歌舞伎座の出し物は一番目『森有禮』中幕『夕霧伊左衛門』二番目『延命院』等であつた。幕間に喫煙室にて好劇家らしき人々の話を立ち聴きして見た。

老人……舊俳優が新派劇を中々良く演りますね。

年増の美人……何んと謂つても舊俳優は踊りの素養がありますから、體のこなしがよいので、何を演じても相當に出来ます。殊に左團次と來たら、斯の途に熱心ですから新派物でも新俳優より餘程良く演ります。

文學士らしき人……劇は總て筋書もよく、役者も巧妙でなければ見られません。此筋書は小内山薫氏が、明治の大先覺者森有禮が誤解の爲に暗殺されたのを遺憾とし、其真相を傳へん爲めに

書き卸したもので、筋書としては史實に立脚し、明治時代を生み出したる偉人を彷彿せしむる傑作です。されども時代が新しく、故人を知つて居る人もあるので、役者が其人に扮するに困難です。左團次なればこそ、あの位に演ります。此筋書の如きは、單に歴史小説として讀む丈けでも、感慨無量です。

和服を着たる軍人らしき人……我輩は屢々乃木大將の芝居を觀たが、本物の大將を知つて居るので、どうしても役者の大將は乃木大將とは思はれぬ。此芝居も矢張り左團次です、然し五十年百年後に、此型を保存して演じたなら必ず面白いだらう。

學生……左團次の森有禮は巧いが他の役者が少し落ちるので、森有禮が引立たないやうな氣がする。然し書生連の自炊生活の場は中々巧いなあ。

政治家らしき男……森有禮が明治二年に、當時の官民より非國民の如き惡罵を受けながら、斷乎として廢刀論を唱へ、西洋の文明を輸入して大に國運の發展を圖らんとしたるが如き、明治十九年に既に男女平等論を唱へたるが如き、確かに當時の大先覺者であつた。遭難の十數日前、文部大臣として直轄學校長會議に臨み、忠君愛國の大雄辯を振つた如き、決して滔々たるハイカラ者流では無かつたことが判る。只伊勢大廟に於て、西洋式の單純なる動作が、敬神家の誤解を招いたのは、誠に氣の毒である。西野文太郎も直情徑行の敬神家であつた。憲法發布式の大典に、斯る不敬漢を參列せしむるは、神州の汚辱なりと信じ

て其朝之を斃したのだが、世には往々斯る誤解がある。朝鮮を文化に導いた伊藤公を朝鮮人が暗殺したなども、大方此の類だ。兎角世の先覺者は誤解され易いものだ。

スポーツマンらしき紳士……僕は此芝居を見て藝の巧拙などは、どうでもよいと思ふ、當年の事實を追懐し、森でも西野でも共に國家を思ふ彼等の心事に想到すれば涙が出て仕方がない。斯ふいふ芝居が僕は大好きだ。折しも開幕のベルが頻りに鳴る。觀客はドーアーを排して座列に吸ひ込まれ行く。今度は中幕で筋は斯ふだ。延寶年間に平岡左近といふ武士があつた。新町に通ふて、夕霧といふ太夫に馴染んで居つた。

奥方に子無き故、夕霧の生んだ子を引取つて之を育てた、奥方お雪は賢夫人であつて、能く此兒を鍾愛した。遂に生母たる夕霧を自ら落籍して乳母として家に入る、事となつた。夕霧には二世の契を交はした、藤屋伊左衛門といふ情夫がある。此兒は實は伊左衛門の種である。伊左衛門は我が子見たさに、夕霧の駕籠かきとなつて左近の宅へ行く、左近夫婦が奥に入りたる間に、實父母は其子を中に愛着の情に耽る。小供は最初は駕籠屋風情が武士の倅に何事ぞと怒つて居る。然し其内にだん／＼實父母なるを知つて慕ひ出した。止むを得ず左近夫婦は夕霧を歸へす。小供は慕つて之を歸さぬといふのである。

左團次の平岡左近、秀調の奥方お雪、羽左衛門の伊左衛門、松島夕霧何れも筋り役だ、流石は近松の作で人情劇として最も面白い秀調は先代秀調に決して劣らぬ。

羽左衛門が上方の金持の若旦那と

を性慾の犠牲とし、後に發覺して

る。此意味に於て左團次の曉星右衛門、羽左衛門の美僧日潤、猿之



憾とし、其真相を傳へん爲めに

むるは、神州の汚辱なりと信じ

秀調は先代秀調に決して劣らぬ。

羽左衛門が上方の金持の若旦那として、夕霧の情夫として義理人情に引かざる性格を表はすあたりは最も巧妙だ。松蔭の夕霧に至つては美にして且つ艶、然も上方の上品なる太夫としての品格を失はず、養子にやつた我子に對する母性愛を巧に表はして居つた。此芝居一幕にても歌舞伎座見物の價値は充分にあると思つた。

二番目の「延命院」は享和年間に上野延命院の住持日道が美貌を種に、悪坊主柳全を使つて、性に餓へたる奥女中、後家、良家の娘等

を性慾の犠牲とし、後に發覺して處刑された事件を、河竹默阿彌が脚色したのである。  
三幕七場の長幕であつたが、其時代の人情風俗を見たことの無き吾等には、場面の展開し行くに連れて、其時代が眼前にありありと見へてくる。之れが芝居見物の面白味のあるところである。名優は其時代の人物になる。故園十郎の家康でも、清正でも、觀て居る内に、知らず知らず、吾も亦三百餘年前の人となつて、其人々に接するが如き感を抱くに至つたのである。

# 振替貯金の話

蒲原久四郎

○振替貯金制度を最初に施行したのは、墺地利で、それが我明治十六年、次が瑞西で、第三番目が日本で明治三十九年の創設である。

○振替貯金といふのは、口座の上で金銭の貸借關係を決済する制度で、或人が振替貯金は良い計算手を雇つて置く様なものであると云つたことがあるよふに、加入者にとつては忠實なる計算手である、振替振込は必ずしも現金でなくともよい、現金に代るものとして、郵便爲替證書又は振替貯金拂出證書でもよい、而して加入者が何れにか送金の必要があれば自己の口座より拂出して、口座所管廳より先方に拂出證書を送り届ける、その拂出證書には、簡單なる用向も記載することが出来る、若し加入

者相互間に金銭の取引があらば、口座のみで受拂が出来る、そして加入者に對しては現金受拂の都度があるので非常に便利である、又急に現金を拂戻す必要が出来た時は豫め指定したる郵便局で電報拂戻も出来るので、殆んど手許に現金を置くのも同様である、而して口座預金には年三分五厘の利子を付けるので、此の制度は郵便貯金制度に郵便爲替制度を加へて、之れを二つに割つた様なもので、金銭取引上至つて便利で且つ確實なものである。  
○朝鮮に於ける現在の加入者は一萬五千人、口座現在高は約二百萬圓であるが、一箇月間に於ける平均取引高は實に千九百萬圓乃至二千萬圓の巨額に上つて居る。

る。此意味に於て左團次の曉星右衛門、羽左衛門の美僧日潤、猿之助の悪坊主柳全等は多く其人になつて居つた。其他家柄の女太夫おまち、福助の娘おころ等も確かに乃父の跡目が繼げる様に見へた。由來名俳優の子は多くは名俳優になる。英雄の子は英雄にならぬ。役人の子が役人にならぬ者多きは何故だろふとも考へたりして宿に歸つた。  
(一五、二二、一〇稿)

## 無駄ばなし

吉田莊一

○裁判所の脇鉄一判事は、今年マダ三十一歳だ。

○中學の時分から、可なりふけてゐて、同級生から『おぢさん』と呼ばれてゐた。一ツは親分肌で何かといふと、物事を引受けて、解決して見やうといふ肌合があつたからだ。

○ところで最近その脇さんが、學友二三人と三田村判事を訪ねると、そのうちの一人が、そつと脇さんに囁いたものだ。『アレ(三田村判事)は君の叔父さんかい』——そこで、脇さん急に肩身が廣い。曰く『どうだい、三田村さんと僕は、タイして歳も違はんのに、叔父甥と見られる處を見ると、僕もさう捨てたもんぢやないよ』。  
○因みに、脇さんはスバラしく頭がいい、これは所内の定評だ。即ち役所の方でも、今におぢさんになる時が来る。おぢさんなるかな。

○山口(信正)判事、諺の妙手である。曰く『雜筆社は、新しい座敷が出来た相だね、一ツ其新しい所で喰るかな』と、……歡迎々々。

# 若返り法

を提唱したい

鮫島宗也

## 若返り法

私の若返り法は何等の準備を要せず、即刻至極簡単に行ふことが出来るのであります。

この若返り法によれば貴下の氣の若い丈けそれ丈け若返ることが出来るのであるからこの若返り法を實行する前に先づ考へねばならぬことは自分が今幾歳の氣分であるかをハッキリと意識することであり、ツマリ幾歳まで若返るべきかを定めるのであります。例へば七十歳の人ならば五十歳、六十歳の人ならば四十歳、四十歳の人ならば二十五歳とか自分が幾歳まで若返りたいと言ふその年齢を定むることが必要であります。そして年齢が極まつたら即座にその瞬間からその歳まで若返つたと言ふことにして了ふのであります。その時から自分は實際四十歳である、二十五歳であると思ひ込むのであります。そして何事をするにも若くなつた心持ちでするのであります。

そしていよいよ若返り法の實行に取り掛つたらその喜ぶべき出来ことを深刻に感受し、且つ記念する爲めに、黄道吉日を選んで祝宴を開くこととあります。これは各自の生活程度に準じて家族だけでしとやかに内宴を張るもよし、又は友人等を招いて大に祝するもよし、要するに此日、此瞬間から自己の心機一轉を明劃するに足る何

事かをすればそれでよいのであります。

夫れから後は若返つた本人は凡ての機會に自分が現實に若返つたものであると言ふことを意識することが必要であります。服装を若々しくして、氣分を若々しくして凡て十何年の昔の時代に立ち返つた氣分になることを努むることが必要です。

毎年舊曆の節分に年増の女などが髪を島田に結び着物も派手なのを着て娘氣分になつて飛び廻ることがあります。ツマリあの若々しき氣分に始終なつて居ればよいのであります。そして絶へず自分は若い、若くなつたと言ふ事を意識するのであります。凡て人間には悪い事や、貧乏になる様な事は想像することすらイヤなものであります。

そんな想像が頭に浮んで来たときにはそれを頭から追拂つてやりたいのが人情であります。それと反對に嬉しき事や、金持ちになる様な事は想像して見るさへ中々愉快であります。年が若くなるのは金を儲けるよりも何よりもモット嬉しきことであると信じます。随つて若くなつたと言ふ事の想像は中々やめられない、何時までも想像の連續を希望する様になります。ましてこの想像はやがては現實となる可能性があるのです。りますから努めて若くなつた氣分になることを努むることが必要であります。

佛國などで病人を自己暗示法で治療する時の如く、夜寝る時及び朝起きる時に床の中で「自分は若くなつた、あゝ嬉しい」といふ様な文句を十回乃至二十回繰返して唱へることなどもよい方法であり

ます。要するに若返つた當時は始終自分が若くなつたと云ふことを念頭から離さず、絶へず記憶から呼び起す事が必要であります。又周囲の人も本人を若者扱にする必要があります。今までおちいさんと呼んでゐたのをおちいさんと呼んでゐたのをおちいさんと呼んでゐたのをおちいさんと呼んでゐたのを一寸滑稽な事の様ですが、冗談半分にでもよいから是非實行して貰ひたいのです。凡て本人に若々しい氣分を持たせることが必要であります。

仕事をすることも今までと異つた緊張した氣分で若者同様に身輕に立ち振舞ふことにするのです。又實際その氣分になれるから不思議です。

## 實驗談

私の經驗を申し上げますれば、私はいよいよ若返ることに決した朝はいつも二杯しか食べない御飯を三杯おいしく食べました。それから新聞社の事務を執るにも兼ねての三割以上の能率を擧げたにも拘らず前日の様な疲勞を感じませんでした。夕食には妻が御祝のツモリで鯛のお頭附を食卓の中央に備へて呉れましたのでスツカリ御祝氣分になり益々眞實三十歳に若返つたとの感じを深くするのでした。翌朝はいつもより一時間も早く起き出で活氣横溢せる氣分を以てその日の活動を始めました。

私が若返り法を實行し始めてから一箇月程立ちますと私は若返り法の効果が精神上にも又肉體上にも充分顯はれて来たことを確認する様になりました。仕事の能率が驚くべく増進し、そして少しも疲勞を覺へぬ様になりました。驚く

べきは今までだん／＼殖へつゝあつた頭の白髪が減つたことです。

煩はしいから止します。要するに私はこの若返り法實行以來精神は

窺つてゐます。今度こそは過去の失敗と苦き經驗に鑑み、過ちを再

己の心機一轉を明劃するに足る何

唱へることなどもよい方法であり

勞を覺へぬ様になりました。驚く

べきは今までだん／＼殖へつゝあつた頭の白髪が減つたことです。今では殆んど數へる程しかありません。モ一つ若返り法實行の効果として擧げなければならぬのは駈けたりなどした時に胸の動悸がせなくなつたことです。以前は少し急いで歩いたりなどすると呼吸が迫つて苦しくなつたものですが只今では若いものと競争しても滅多に負けない程強くなりました。驛などで汽車の發車間に駈け付けた時橋を渡つて行かなければならないことなどありますがさういふ場合に決して人に負けません。そして少しも息の切れることがありません。かく數へて見れば若返り法實行の効果はまだ外に澤山あります。それを一々擧げることは

煩はしいが止しませぬ。要するに私はこの若返り法實行以來精神は今までに知らざりし程爽快となり又肉體は仕事をしても疲勞を覺へず若々しき血潮の漲るのを覺ゆるのであります。私はこの状態で十箇年を過すことが出来たらば更にモ一度十年若返つてもモ一度三十三歳になつて見たいと思ひます。かくイツモ自分の氣の若い丈けの歳で居ることにすれば(何回でも若返り法を繰返すことによりて)容易に不老長生の目的を達することが出来るのみならず、經驗ある人々の活動期間を延長するところが出来、國家社會の爲め誠に祝福すべき事と思ふのであります。かくして私は今や着々出動の準備を備へ、捲土重來の機會を窺かに

窺つてゐます。今度こそは過去の失敗と苦き經驗に鑑み、過ちを再びせざる様充分の注意と用意を怠らざる覺悟であります。どうか皆さんも一日も早く私の若返り法を實行せられ、私と同様前途の光明と歡喜を獲られんことを祈るのであります。

### 世間ばなし

山口のぼる

○ 信田龍山署長の令息は、一人は京城大學へ、今一人は内地の中學へ行つてゐる。我雜筆は、京大生の長男の人が、先づ讀み、それから署長、次ぎに内地の次男の人が讀む。ところで、三人とも各寄稿家の寄稿に對し、それ／＼欄外へ讀後所感を記す。それを最後に、ゆつくりと讀むのが、夫人の役目だといふ話。

## 大善大惡の

# 中間を彷徨する人

早田伊三

自ら既往二十年間の行跡を顧みるに愧世の情に堪えざる事多くして冷汗背を流るゝ感轉た痛切なるものあり、其原因の主なるものは自ら聖人達士たる事能はず、且自ら惡人の態度に出づる事能はざりし事なり、少年時代故原抱一庵譯の『聖人か盜賊か』の小説を讀みし事あるが其主人公の行爲は殆んど善なるも嘗て殺人罪を犯したる事あり、惡に強き者は善にも強しとは蓋し此類の人ならん、西郷南洲、明智光秀、大鹽平八郎等の逆行行爲を反面より考察すれば大惡人た

る事能はざる者は大善人たる事能はざる證となす事を得べし。従て大惡人たる事能はざる多數の人は大善人たる事能はず、此善惡兩者の中間を彷徨し居るもの、如し、我に惡人たるの度胸も膽略もなくさりとて大善行をなすの器量なく常に昨非今是に始終す。將來は大善行をなす事能はずんば寧ろ大惡人たらん位の理想を以て向上の一路を邁進せん、過去は過去として總てを葬らしめよ、依然異下の舊阿蒙たることは吾人の屑とせざる所なり。

○ 大浦貫道さんを攻め立て、即席に原稿を書かせる。奥さんが傍に来て、字引を引いてあげられる。大浦さんの筆の早いこと／＼、瞬間に一枚、二枚、三枚。稿了つて、大浦さん悠然記者を顧みて『君、おやちは原稿を書く、婢はソバで字引を引く。こんな家庭が外にあるかね』



# 帝展一瞥

佐々木正太

昨秋、上野公園の帝展を一廻り観覽した。始めの程はいち／＼鄭重に見てゐたが、中程からは流し目に其の前をサツサと通つて、おしまいの彫刻の所で少しゆづりを見物した。私は所謂東洋畫といふものを觀て、内心異様の感を催ふした。東洋畫と云へば無論西洋畫に對するところ、我が東半球特有の畫でなくてはならないわけだ。ところが、堂々と立派に掲げられてゐる、どれもこれも殆んど全部のものが、東洋畫らしくないのである。たとへば、特選になつてゐる「水車」を見ても、そうではないか。たゞ技巧の秀麗なることは、實に驚嘆を禁じ難いものがある。一言を以て之を評するなら、殆んど皆、技巧を主としてゐる。技工の進歩は近頃誠に面目一新の觀がある。しかし、此れ等の技術は必ずしも我が畫家を煩はさなくとも、他に幾らその方法があるではないか。これらは繪模様を專業とする人たちに委すのが至當であつて、我が東洋畫家の天職とすべきものではないはず。もつとも、秀畝とか栖鳳とか、その外一二の作品には技巧の裡にも、どこかに我が東洋畫の片鱗が現はれてゐるのを認めないではない。流石に大家と謂はれる底の作者は、まだ、東洋畫の精神を没却してゐないやうである。けれども、これらの先生ですら、今は大分怪しくなつてゐる。此を放任して置くと、いつか

は、眞の東洋畫を滅亡させるやうな時代に到達しないとも限らぬ。私の意見は、古人の糟粕を嘗めるばかりで、新たな製作を忌むと云ふのでは斷じてない。東洋畫も次第に進化して、其の理想とするところに大成し完成しなければならぬのは勿論である。或人が曰ふに、今の所謂東洋畫は、現代の日本畫であつて、之れを東洋畫といふのは可笑しい。現に支那では、南畫が古風を失なはないで、發達してゐる。これが即ち東洋畫の正宗であり本家であつて、帝展の東洋畫は異端である。この評は支那畫家の口から漏れた言葉であつて、我が日本畫家の聞き棄て難い誠ではないか。東洋畫に西洋畫を執り入れて、世界の畫道を統一し、古今未曾有の神品を創作しやうとする努力は、方に敬服すべきである。これまた流石に我日本畫家でなくては、思ひ立ちきれない勇敢な企圖である。其の意氣の旺盛なのは到底他に見ることが出来ないほどである。しかし、私は夙にそれを無理なことだと考へてゐる。何故かといふに、東洋には東洋固有の文明があり、西洋にも亦其の固有の文明がある。そうして、東洋の文明は其の源を印度に發してをり、西洋の文明は其の源を埃及に發してをる。ガンヂス河畔で醸成された人文と、ナイル河畔で醸成された人文は、根本的に創始の時から其の趣を異にしてゐる。隨つて其の發達の経路も雲泥の相違があるのである。印度の大詩人だといふタゴール翁も、いつか言つたやうに、印度には西洋の思想と違つた或ものがある。尤、我が日本には神代よりこのかた、我が瑞穂國特有の精神があり、天文があり、人

文がある。けれども、之れを發達させ進歩させたのは、印度の文明であつた。また次には支那の文明であつた。近世に成つて、盛に西洋の文明を取り入れ、現に其の趨勢は愈々益々高潮に達してゐるが、其の長を取り短を補ふのは至極結構であると同時に、之れに伴ふて來る弊禍も少くない。イヤ、其の弊害は寧ろ、より大なるものがある。そのやうに、我が東洋畫も、一面は進歩してゐるやうに見へるが、他の一面は其の反對に退歩してゐる。退歩なら又挽回して再興することも不可能ではないが、已にも早、變な風に成つて仕舞ひ。殆んど收拾すべからざる状態に陥つてゐるではないか。私の には、同時に催された美術協會の方に、却て日本畫らしい、東洋畫らしいものがあつた。今や諒闇に際してゐるとは申ながら、昭和の御世もはや二年と成つた。時代文明の反影とも云ふべき我が畫道も、昭和の精神に據らなければならぬ。

## 別府たより

徳野眞士

○出發の際は、失禮々々。  
○日本といふ國は何といふ暖かい處でせう、硝子戸越しに太陽の光りを浴びて居るとあつていけぬ。そこらに出て見ると畑の畦に咲き残りの菫の花がある。梅はもうすぐ咲くでせう。椿や山茶花は紅かく咲いてます。

あたゝかき國よ豊後は南の海は靜かに冬日をうけて靜かなる海の面よはる／＼と  
うす紫に消えて果てなし

は、能登半島の陸地が先づ目に付

ないやうである。それよりも、同

ですら、今は大分怪しくなつてゐる。此を放任して置くと、いつか

神代よりこのかた、手が理利、眞有の精神があり、天文があり、人

静かたる海、面、うす紫に消えて果てなし

# 郷里の風味

津田常男

今年(大正十五年)の秋は約十日間郷里に歸省した。私の郷里は金澤である。

歸つて居たのは、十一月の中旬で、躍らかな晩秋の日射がまだ訪れて居るかと思ふと、早くも北陸名物の雫や霰が襲ふやうなことも少くなかつた。

柿が盛だつた。木からその儘で甘い柿、一面に黒い胡麻があつて舌觸りのよい柿。もう一種の柿は最上とか日本一といふ木から取つて幾日か貯へて置くと、自然に甘くなつて皮の下には糜れたやうな肉と滴る様な汁が満ちて居る柿。

これらが、丁度食加減の時であつた。私の家の庭には、澁柿が一本あつた。之は塀に添うて半分は往來へはみ出して居るのである。以前の持主が、態とこの澁柿を繼木したのださうであるが、その爲に近所の悪太郎も決して落しには來ない。餘程の新米ならば、一應は落して見るが、二度とは手を出さない代物である。この柿も熟れる程熟らしてから落して、熱湯でさわすといひ味になる。少し時期が早くてこの柿は味へなかつた。朝鮮に柿があるかと、よく訊かれた。

あるにはあるが、樽柿で餘り旨くない。その代り、朝鮮の林檎と來たらとても比較にならない旨さであることを吹聴して來た。

鷓といふ小鳥も出盛りであつた西伯利亞の空が寒くなると、北の方から日本海を渡つて來るこの鳥

は、能登半島の陸地が先づ目に付くので、一齊にこゝから私の國の方へ飛び込んで來るのださうである。それを、罔で呼び寄せて、網にかゝつた所を捕へるのである。この鳥の羹がなかなか懐しい料理である。大谷瀧石さんが、毎年この鳥を夏目さんに送られたが、夏目さんが亡くなつた年には、偶その粕漬を食つて發病されたといふことで痛く恐縮された話もある。朝鮮に鷓があるかとも訊かれた。朝鮮で珍重し且つ旨いのは鷓で、小鳥も居ないことはないやうであるが、銃獵が本位で、雉や雁の獲物が豊富であるから、鷓などは殆んど問題にならぬことを話した。郷里の方では、雁など今は殆んど手に入らないやうである。

朱塗の文鎮のやうだ、と謂はれた蟹もよく食膳に上つた。之も北陸獨特といつてよい名物である。ここでも亦朝鮮に蟹があるかと來られた。元山の方で大柄な蟹が取れることを知つて居るが、味は悪くはないが、大陸的ともいはずか、毛蟹は甘味が強いが、外見からしても餘り上品ではない。一度京城の料理屋で小型の華奢な身のかつちりした蟹を食つたことがあるが、之は内地から輸入したものと斷られたことがある。それは勿論國の蟹とは異なることなど話した。そして、私にとつては、國の蟹が矢張り本格のものやうに思はれる。

鮎は全く落ちて了つた後であるが、富山から、伯父が鮎の鮎をくれた。之は淺く鹽漬にした鮎を餅と糍で鮎漬にして重せ石を置いて、相當期間をならすのである。この味は、多少腐敗味を伴ふもの

で、慣れない人には鳥渡理解されないやうである。それよりも、同じ富山で出來る鳥賊の黒造りは、眞黒で外觀は餘りいい感じではないが、鹽辛よりも凝つた味のするもので、少し上戸黨には悦ばれ易い。

郷里の蒸菓子も、旨いもの一つであらう。子供時代の記憶よりもだんだん形が小さくなつて來たやうであるが、之は砂糖が高くなつても、菓子の値段は之に應じて上げ難い影響であらう。それに、もう一つは、私が京城で大きな菓子を見慣れて居た所爲もあつたやうである。京城の菓子は、饅に形は大きく、味も上等であるが、菓子として今一息の所、何處か菓子と砂糖との距離が近過ぎるやうな所がないでもない。菓子の味には、黒砂糖の調味をなす所に秘訣があるとか國で聞いたが、果してどんなものか、甘黨の御意見を伺ひたい

(一五、一二、一二記)

山口のぼる

## 町内評判記

- ベニシラ洋行といふのは、黄金町一丁目にある。
- 主人は、神山喜一郎氏、極めて濃厚な紳士である。
- 日蓮を信奉して、その宗教談はなか／＼深遠なところがある。
- 斯うして、おとなしい人かと思ふと、人は見かけに依らぬ。神山さん實は柔道二段の猛者。しかも柔道會の幹事さんだ。
- 同じ店に洪さんといふ番頭さんがゐる。京城鮮人間では、有名な碁の強者。「スルト、碁が一番おハヨですね」といふと、「イ、エ、スケートの方が面白いですね。これには、未だ會で負けたことがありませんからね」。

# 森有禮劇の

## 上演を聞いて

### 幼時の想出話

#### 植村俊二

小山内薫氏により書き下された「森有禮」劇が舊冬十二月左團次によりて歌舞伎座の舞臺に上演せられた。一體先覺者といふものは其思想が餘りに時代を超越してゐる爲め往々世人の誤解を招き、不測の災難に遭遇するものであるが、明治新政府の要路に立ち百年後の日本を達觀して新政策を樹立した人々の中に、時代の犠牲者として森有禮を出したのは、洵に已むを得ないことである。併しそれが恰も憲法發布の當日文部大臣の正服を着け、千載一遇の盛儀に參列せんとする朝、凶刃に罹りて果敢なき最後を遂げたことは、如何にも劇的なる悲壯な場面である。只其刺された動機が最も忌むべき不敬事件といふ名分の下に醸されたので、春風秋雨幾十年空しく冤を雪くに由なかつたのである。

小山内氏の新作脚本は何れの劇評を觀るも頗る評判が宜しい。中内蝶二氏の評判記に依るも故さらに不敬事件を辯護せず根本的に森有禮自身が忠君愛國の魂であつたことを正々堂々と正面より打て出てゐる所に作者の頭の冴を見せて居るやうである。そして其ヒーローに扮する左團次の成功は是亦大した評判である。之は其劇が動きより臺詞で一貫してゐる故で當代俳優中雄辯なることに於て第一人者である優の最適役であつた故で

あらう。

却説私の雜筆は有禮劇評判記の受賞をするのが主眼ではない。之に依つて吾が幼時の想出話を書き綴るのであるが、其前に森有禮の事蹟を少許述ぶる必要がある。子が時代の先驅者として尊敬せらるゝのは先づ廢刀論を主張した事であつた。夫れが戊辰の役漸く過ぎ世間尙ほ血腥き風の吹き凄む最中であつた。次で男女同權論を叫んで當時奴隸視せられたる婦人救済の爲に一道の光明を投げた。併し最も特色ありしは學校生徒の武事教育で小學生徒に木銃を、高等中學生には本銃を擔はしめ、師範學校生には半ば兵營の如き生活をなさしめた、之は眞の廢刀論と矛盾せる觀あるも其實武士なる特殊階級を解體し國民皆兵の實を擧ぐる達識に基いたものであつた。

私は尾張の津島といふ御祭で名高い小さな町に接した片田舎で生れた。村の小學校を出で津島の高等小學校に入學した。當時、森文相の武事教育は徹底し、吾等十歳前後の小國民は木銃を肩にし、中隊大隊教練に熟達して居た當時の教官は西南役に參加し刀痕鮮やかなる杉山軍曹であつた。號令叱咤の際口角泡を飛ばす癖は今尙ほ目前に彷彿してゐる。時に文相縣下教育視察の擧あり。一日吾校生徒は霜月の寒風に曝され木曾川支流の砂原に於て兵式體操を御覽に供したが、出來榮拔群といふので感賞に預り、金一封を頂戴した。後に此名譽を記念すべく當時まだ無かりし制帽の制を設け「森」字の帽章を付することになつた。

翌年縣下全高等小學校を召集し

兵式教練の一大競技會が金城城下の練兵場に催された。吾が小學校に於ても早速洋服の新調に及んだが、驚く勿れ一着八十錢の代物で一同勢揃への扮装は此木綿の制服に草靴ばき、白の辨當袋を左肩より斜に背負ひ、木銃を肩にせる有様で随分滑稽なものであつたらうと思はれる。早朝校庭を出發し行々演習を行ひ、名古屋の宿舎に着いたが、追々繰り込む對手を見れば羅紗服にランドセル、ゲートルに靴ばきといふ凛々しい扮装なので、校長先生頗る狼狽し明日の成績如何と氣遣ひ居たるも例の杉山軍曹之に耳を借さず前祝に満を引いて氣焰當るべからず。

當日の練兵は吾等少年隊に取りては初度の晴舞臺であつた。小さな心臓は高鳴り満身の血は頭に上るかと思へた。凭くて一校一校順次に演技は開始せられたが、雨後の練兵場は到る處に泥濘あり、加ふるに此處彼處に水溜りもあつた。吾校の一隊は一上一下する杉山教官の號令の下に整然として進退した。泥濘のかは、水溜りのかは殊に最後に縦隊行進中の「折敷ッ」は彼の泥濘中に演ぜられ杉山教官にして始めて行はれた當日の一異觀であつた。然るに美服の他校では屢惡路に阻められ、列は兎角に亂れ勝ちであつた。かくて最後の講評に當日第一の月桂冠を贏ち得たのは「森」字の帽章隊であつた。

後年長じて森有禮の傳記を読み其事蹟を知り、我邦思想上、風氣上、政治上の大なる先導者たりしことを知るに及び、一層追慕の念已み難きものがある。子逝いて三十有七年。「森有禮」劇の上演を觀て幼時の追想に耽ると同時に、恰

も地下の恩人の冤を雪ぎ得たる如



# 靈藥

渡邊 かんじ

「なに馬の糞が、起死回生の靈藥ですつて、人を誑らかすのもいゝ加減にして下さい、莫迦くしい」と一蹴されて終へばそれまで...だが實際起死回生の藥であると思ひ切つてゐるMといふ男の話をしなければなりません。

それは一昨年夏のことでありました、Mの一人息子が疫癘に罹つて非常に重態になつて終つたのです、甲の醫者も乙の博士ものぞみない言葉を残して立去つたあとで、Mは小供の病床に泣崩れて終ひました。そして只管神佛の力を頼んでゐたのです。すると突如「馬の糞は疫癘の妙藥だ」とかね／＼亡き父親の言つてゐた言葉が頭に浮んできたのです。小供の命ももう目睫の間に逼つてゐる、是非の判断も手段も何も考へるとまはない。早速馬の糞を拾つてきて汚ない觀念も強い臭氣も忘れて終つたかのように夢中になつて馬の糞を煎じ始めました。そしてその煎劑をわな／＼慄ふ手でやつと病める小供の口からそゝぎ込んだのです。すると不思議／＼その翌日から奇蹟的によくなつて程なく全快して終ひました。

×  
そして私の小供ばかりではありません、従弟のうちの小供も疫癘で死にかけてゐたのをやはり馬の糞療法で助けてやりました。お醫者様が見離したら最後の手段にかならずやつてみるのです「ほんとうですよ」とMは信じ切つた強い語調で話を結ぶのでした。

×  
韓愈の進學解に「牛溲馬勃。敗鼓の皮。俱に收め竝に蓄へて用を待つて遺すなきものは醫師の良也」と書いてあつたと記憶してゐる。

勿論鼻糞だつて萬金丹の藥名を持つてゐる程、それ程何でも藥にならぬものはない筈だから。

も地下の恩人の冤を雪ぎ得たる如き感に打たるゝ次第である。(儒城客舎に於て記す)

## 将棋内所話

石川利夫

○  
歳晚、鐵道の林原さん、ぶらりとやつて来て、本社で四五の棋客と棋を樂しむ。一戦、一戦、また一戦。遂に夜半に至つて『大分おそいやうだ』と、お輿をあげる。時既に午前一時也。

○  
電車通りに出でて、終電を待たども、もとよりソレのあらう筈なく、已むなくテク／＼と、鐵道官舎へ歩を運ぶ。

○  
夜はおそし、風は寒し「イヤ、これは飛んだことになつたワイ」と、心中大に焦燥すれども、如何ともせん術なし。析柄勢よくブツブツと雪を蹴立てつゝ、一臺の自動車疾風の如く、氏の傍を過ぐ。見れば、鐵道の自動車也。

○  
『オーイ、僕だ／＼、鳥渡乗せてくれ』といはんとして 林原さんあわて、口を嚙む。蓋しその晩僚友四五の忘年会あり、君も出席し給へと、いはれたれど、イヤ僕は、別に用事があるとして、ウマクそらした關係あり。今更將棋の歸りだともいひ兼ね、あたら鐵道の自動車を見す／＼やり過してしまふ。邸舎に歸れば、正に二時十分也。林原さんコホン／＼と咳をし乍ら『なるほど、いゝあとは、碌なことはない。チョツ、風邪を引いたかな』。

# 讀んだ ものから

松 本 光

徒然草の中に、

「……いかなる折ぞ、只今人の云ふことも、目に見ゆるものも、わが心のうちも、かゝる事のいつぞやありしが、と覚えて、いつとは思ひいでねども、正しくありし心地のするは、我ばかりかく思ふにや」

この文句を始めて讀んだ時——まだ中學生だったが——私は思はず「オヤ」と目を丸くした。同時に窃に快心の笑を泄した。

俺にもこれとそつくりの氣持がする事がある。俺ばかりかと思つてゐたのに。「我ばかりかく思ふにや」なんて、兼好の奴も遠慮してゐやがる。その遠慮し乍ら不思議がつてゐる氣持まで、俺とそつくりだ。何百年も前の男だけれど兼好法師つて懐しい奴だナア——徒然草なんて厭に小むづかしい本だ、とばかり思つてゐた中學四年生の私は、それ以來すつかり兼好びいきになつて了つた。

皆さんはどうか知ら？、私には、今でも、この兼好法師とおんなじな不思議な氣持にとらはれる事が間々あるんです。

初対面の人、而もそれ迄にどう間違つても顔を見た事なんか無い筈の人、さういふ人と一座してゐる時、ふつと

「オヤ、此人とはどつつかで前に逢つた事があるぞ、おかしいな」

と思ふ。

「その時は、やつぱりこんな部屋だつた。そして今と同じ話題だつた。今度はこんな話題を持ち出すぜ、ホラ、その通りの事を云ふぢやないか」

さうなると、その人の一舉手一投足、一言一句、みんな前にどつかで會つた時の復習だ。どこでだらう？、いや、そんな筈はない。おかしいな、不思議だな、變だな、變だな、……で到頭わからずに仕舞ふ。

始めて見た景色でもさうだ。それまで絶対に未知の土地に足を入れ乍ら、

「ハテナ、これとそつくりの景色を、慥にどつつかで見たぞ」

と、ひよつと思ふ事がある。「あそこに一本松がある。前の時もさうだ。あの畑に人が一人ゐる筈だぜ。ア、居る、居る……」と云ふ様な工合だ。

「俺は此の道を歩き乍ら友人のAの事を考へて來たんだが、この景色を前にどつつかで見た時も、やつぱりAの事、それも今と同じやうな事を考へてゐたつけ。ア、犬が吠える。前ん時も恰度この橋の處で犬が吠えた。……」

夢で見た、つてわけでもあるまいし、變だな、妙だな、おかしいな……と到頭わからずに仕舞ふ。

始めの内、私はひどい神經衰弱になつてゐるぢやあるまいか、と眞面目で心配したもんだ。それが徒然草の此の文句にぶつかつてホツと安心した。いや、兼好だつて神經衰弱だつたかも知れない。だが、いゝ、兎に角お仲間が出來たんだ。而も徒然草の作者吉田兼好と云ふ頼もしいお仲間だ。さうだ、兼好法師だつて安心するが好い、俺もさうなんだヨ。「我ばかりかく

思ふ」んぢやないんだヨ。

數百世を距て、知己に會つた。と云ふと大袈裟だが、何しろ私は嬉しかつた。(すぐ二三の友人に話したら「俺達はそんな變てこりんな氣持のする事なんか無いよ」と變な顔をされたけれど)

が、同時に、ふつと氣味が悪い氣がした。吉田兼好が生きてゐた時代と、私の時代と、何と云ふ變遷だらう。それなのに、その兼好が、私の時々襲はれる變な氣持とそつくりな氣持を感じて、「我ばかりかく思ふにや」なんて不思議がつてゐる、その事がふと妙に氣味が悪くてならなかつた。

併し、こゝまで書いて來て考へた。兼好つてやつぱりえらい奴だ。私がこんな風に原稿用紙に四枚も書いて、それでもまだ説明し足らぬやうに思つてゐる事を、先生はすらくと數行で書いてやがる。

「……いかなる折ぞ、只今人の云ふことも、目に見ゆるものも、わが心のうちも、かゝる事のいつぞやありしが、と覚えて、いつとは思ひいでねども、正しくありし心地のするは、我ばかりかく思ふにや」

## 雑記帳から

山口のぼる

○東拓の下出さん「一度はなつて見たいのは、新聞記者だね。僕が記者になると、そりや天下を驚かすやうな大活動をするがね」。

○鐵道局の鉦鹿さん「文章を書くのに片假名を並べずには居られぬ人がある。僕は英語病患者として皮肉らうと思つたら、片岡さんに一番槍を着けられてしまつた」。

# 五人の生命を

三年生で都合五名が就寝すること  
と定めて居る。悲劇の當日は寒さ

と急に其運びに至らず、極力夫妻  
と男の師範生の三名で四名の患者

「オヤ、此人とはどこかで前に逢つた事があるぞ、おかしいな」

好法師たつて安心するが好い、俺もさうなんだヨ。「我ばかりかく

て皮肉らうと思つたら、片岡さんに一番槍を着けられてしまつた」。

# 五人の生命を失はんとせし話

## 恐ろしき温突

森 六治

大行天皇神去りまし、諒闇第二日、即ち昭和元年十二月廿六日午後十二時頃の出来事、能く新聞記事等で見だが、計らざりき渡鮮以來二十有餘年未だ嘗て斯る苦き經驗を有せざる自分が現在其悲劇に遭遇じ、辛うじて數名の子女を悪魔の手より奪ひ還し、漸く之を救濟せし大活劇を演ぜんとは。いでや此悲活劇の一條を物語り、一は温突使用者の爲めの他山の石とし一は斯る場合に於ける應急措置の最も有効なる方法の御示教を仰がんとす。

思ひ出すだに全身の血潮は逆流し凛然として膚に粟を生ずるを禁じ能はざるものがある。僕の官舎の東南隅に離座敷の様形になつて別棟の温突家がある、随分大きな間で中間を仕切ると丁度廣い二間となる、先代國宗氏は冬期中の居間として利用せるも、僕は温突は餘り好まぬのと此温突は火の廻りが至つて悪く、焚口ばかり熱して室内満面に暖まらないので使用した事もない。子供達も餘り好まないが昨年妹の一人が子女七人を遺して亡くなつたので其内四名の遺児を引受けて同居せる爲め室の不足で冬季は嫌や／＼ながら矢張り、此室に集まる。殊に近來寒氣頓に加つたので其二間の中、焚口の間には娘と十二歳になる姪及下女(鮮人娘)の三名、火の遠い方には甥の師範五年生と其弟の中學

三年生で都合五名が就寢することゝ定めて居る。悲劇の當日は寒さも強く且諒闇中の事であるから一同早く寢に就き、僕等夫妻と一番末の八歳になる姪とは座敷に伏床した、僕は間もなく深い眠に落ちたが妻は未だ眠に入らざる十二時頃、離れの温突へ通ずる廻廊附近にて何事か只ならぬ異様の物音を聞き、妻は驚き直に現場に赴き見るに、下女が眞青な顔して唖れ、只お嬢さんが／＼と喘ぎ／＼聲も絶へ／＼に微かに呼びおるに驚き、室内に至れば娘は全く蠟細工の如くなりて意識なく師範生の甥が漸く室外に抱へ出した處で、僕も妻の大聲に眼を覺し、急ぎ駆付けて下女は冷たい下女部屋へ、娘は座敷に連れ來り應急の手當を施して靜に臥床せしめ置き、其他の子供が心配故再び現場へ馳付け見れば中學生の甥も眼を覺し、頭が痛いと思ふるや顔色蒼白となり酔歩蹠蹠として歩行する能はず、直に次の間に抱へ入れて服薬せしめ、十二歳の姪や如何にと見れば之亦同様に別室に抱き込みて手當を加へしに直に嘔吐は催せしも等しく顔色蒼白となりて生色なし。

斯く一時に四名の窒息者を出した我等夫妻の驚愕と働き、それは人間業とも思はれぬ大活動で、到底口や筆では盡し能はざる者がある。其内娘を残した三名は意識明となり、幼きものはスヤ／＼と安けき眠に就きしが娘のみは僅に意識を回復せるが如きも『姉や／＼』『姉やを助けて／＼』……『押入の中に瓦斯が一ばいたまつたよ』等と囁言の様に同じ事を繰り返すのみ、手を握れば脈なく手足は冷却して顔に生色なく直に醫師をと思へ共お馴染の高井氏は轉居と知り

て急に其運びに至らず、極力夫妻と甥の師範生の三名で四名の患者を見廻り／＼看護に努めしに、漸くにして娘も嘔吐を催して後は氣分回復して顔色少しく血色を帯ぶるに至り一同愁眉を開いた。

而して午前三時頃迄大騒ぎを演ぜし効空しからず、何れも一睡すると同時に全く快復するに至り、再生の喜びを得て翌朝九時頃一同食卓に圍座して其時の追憶談に花を咲かせ安堵の胸を撫で卸したのであつた。

思ふに此原因は温突不完全なるが爲め石炭瓦斯が小破損の箇所より室内に侵入したると室内を密閉して燃料を多く用ひし爲ならん？斯くも大騒ぎに醫師の手も借らず素人の措置で何れも無事なるを得たるは數日前より來宅せる甥の師範生の早々に氣付きし點と妻が未だ眠に入らざりし爲め比較的迅速に手當が出来た爲めで、今若し假りに十分も手當が後れたらんには其の結果や如何。或ひは此再生の喜びは期し得なかつたかも知れぬ思へば思ふ程冷汗を浴びる心地がする。之と云ふのも皆神佛の加護の然らしむる所に外ならずと直に奉燈奉香して感謝默禱したのであつた。

### 儒城の賑ひ

石川利夫

この正月には、京城名士で、儒城温泉へ出かけるもの多く、有賀殖銀頭取、植村博士などの顔も見へた。手近な温陽温泉など、もし宿屋が完備したら、千客萬來疑ひなしだらうに。



# 法廷隨筆

## 微苦笑

伊藤憲朗

### 法學博士

裁判長曰く、被告人は控訴を取  
下げて服罪してはどうだ、法學博  
士ともあるものが甚だ目先が利か  
ないと思ふ、二度調べて見たとこ  
ろでなにもならぬことは自分でよ  
く解る筈だ。

裁判長の言葉に揶揄がある、法  
學博士は彼の綽名であつた。

### 刑事記録中素行調査の一節

……被疑者は幼少のときより  
漢學の初等を修めたるのみにして  
内地語等に精通せず農に従ひたる  
外特記の經歷を有せざるも登記其  
の他民事の事務に通じ居る關係上  
法學博士の綽名あり。

しかしこの法學博士は控訴を取  
下げることを肯じなかつた。

### 法廷構成

裁判をするのに判事、書記、通  
譯、被告人、立會の檢事、それに  
廷丁、これが最小限度の構成であ  
る、そして時に被告人の爲めに辯  
護士又は辯護士にあらざる辯護人  
が付く、又原則として法廷は公開  
であるから傍聽者が這入る、それ  
を取締る警官がある、被告人の爲  
めに戒護の看守——普通二三人で  
あるが、死刑囚其の他法廷暴行の  
虞れあるときには柔道の心得ある  
看守が背後にガンバる、立會警官  
も普通一人で一時間毎に交代する  
ことになつてゐるが、重大事件に

なると何人でも警察から應援が來  
る。

これが典型的の法廷であるが、  
時に證人を調べ鑑定人を喚問する  
尙嚴密に法廷を這入るものを見る  
と、背後から給仕が用達しに來る  
新聞記者が隨時出入する、法律に  
認められざる而かも法廷慣例であ  
る、最近或る法律雜誌で見たとこ  
ろによると陪審法に依る法廷配置  
には新聞記者の座席が傍聽人の最  
先にある、司法省案でも日本辯護  
士協會案でも同様である、尤も今  
日われ／＼のところの法廷では新  
聞記者席は辯護士席と同等の地位  
にあるが、陪審法廷では少し格が  
下るわけだ、話が餘談に外れたが  
兎に角重大事件でもなると新聞記  
者諸君が法廷に這入る。

稀有のことであるが犬が侵入す  
る、辯護士又は傍聽者などの隨伴  
であらう、軒の雀が迷ひ込む、或  
時の事であつた、法廷の中が馬鹿  
に臭い、囚衣の匂ひどころでない  
強烈な異臭である、餘り不思議で  
あるから傍の書記殿に聞いたら、  
田舎者が肌を搔いたのでしやうと  
いふ、これまた蚤か虱の隨伴の場  
合であらうか、田舎者の肌とやら  
は搔けばそんなに臭いものかとい  
ふ、感心したことであつた。

それからこれは空前にして絶後  
の事であらう、薄寒い冬の晝どき  
であつた、或る被告事件の審理中  
戸口の隙から一人の男が頭を出し  
て頻りに叩頭してゐる、戸口に立  
つてゐた警官が中から戸を開けて  
入れた、見ると驚く勿れ、頸から  
ボール紙の札を釣り下げその札に  
曰く、紳士諸君この憐れな乞食を  
救ひ給へ——とある。勿論傍聽に  
來たのではない、角違ひであつた  
らう、這入るや否や戸外に飛び下

つた。

### 死刑の言渡

判官にとつて何が厭だといつて  
死刑の言渡に過ぎるものはない、  
或るものは顔面一時に蒼白、或る  
ものは眞赤、或るものは沈痛堪へ  
難き模様、或るものは呆然自失、  
或るものは怒號咆哮、死刑の言渡  
を受ける被告人の様子は實に種々  
さまざまである。

判官の仕事は地味に違ひないが  
しかしその地味は平凡では爲し得  
ぬ場合がある、敢然と勇氣を振は  
ねばならぬ事が一再でない、死刑  
言渡の如きはその一つである。

その被告人の犯罪が神人共に相  
容れざる態の大犯罪ならば證據の  
動かぬ限り社會の正義に則つて寸  
毫の躊躇を辭せぬが、それが一分  
一厘でも搖ぎのある場合、例へば  
立派な人證、物證があつて尙ほ被  
告人が頑として自白を肯じ得ぬと  
する、もしやといふことは神なら  
ぬ以上當然である。

或る判事は或る被告事件で死刑  
の言渡をしたが、腑に落ちぬ點が  
あつた、懊惱反轉、爾來三年間が  
程朝夕念佛をたゝなかつたといふ  
話がある、判事が人間である以上  
當然の悩みである。

なんといつても死刑は一番厭で  
ある、死刑廢止論といふことは學  
者間にも議論が相當ある、改正刑  
法の中にも死刑の範圍を縮少する  
案があるやうである。

しかし朝鮮の犯罪現狀として死  
刑廢止が行はれ得るか、日々幾多  
の兇暴な犯罪を取扱つてゐる私と  
して充分の疑問を持つてゐる、死  
刑存置といふことは人心安定の止  
むなき要具でないかと考へても見  
る。

如何に生活難とはいへ、人を殺  
していゝわけはあるまいし、況ん  
や全く我欲の充足を目的とするで

判となく女判となく日毎新聞記事  
となつて現はる、殘虐なる犯罪事  
實は法廷内警察を以てゐるので

### 記者の手帖

も普通一人で一時間毎に交代することになつてゐるが、重大事件に

来たのではない、角違ひであつたらう、這入るや否や戸外に飛び下

むなき要具でないかと考へても見

如何に生活難とはいへ、人を殺していゝわけはあるまいし、況んや全く我慾の充足を目的とするに於ておや、どうせ處罰は死刑廢止の今日無期懲役としても命だけは助かるし、などと犯罪が頻繁に行はれぬと保證は出來ぬ。死刑廢止を輕々に唱へる人は朝

### ラヂオ

## 泣言二つ

龜田 正

京城にも放送局が漸く設立された。設備制度等他局の長所を採つただけに申分はあるまいが、唯聴取料が少し高いと思ふ。何れの放送局でも聴取者の大部分は礦石黨である、十五圓か二十圓の設備で樂まうと云ふ者に一箇月二圓の料金は極めて不廉である。朝鮮ではまだラヂオが實用品視されるまでには大分懸隔があるから、料金が一圓位になるまでは加入を待つ人が多からうと思ふ。即ち「暮し向き好いのが家根へ棒を立て」など、此の頃の川柳にもある通り當分は或る階級か、又は物好きな連中の一通り行き渡ると茲に一段落といふことになるであらう。放送局當事者は此邊に御注意あつて、成るべく速く三十錢でも五十錢でも値下げするやうにして欲しい。虫のよい話であるが一年半以上も無料聴取に馴れた者には、僅かでも料金を出すことが何だか馬鹿馬鹿しい氣持のするものである。

從來私は「京城はラヂオに恵まれたる土地」と思つて居つた。即ち空氣が乾燥する爲に受信機に故障の少ないこと、山野に樹木の少

刊となく夕刊となく日毎新聞記事となつて現はる、殘虐なる犯罪事實に社會的考察を忘れてゐるのでなからうか。

それはそうと理屈は兎に角死刑の言渡は泣くほど厭だ。今日も亦死刑記録を抱き歸る裁判官がいやになりたり

いためか空電による雑音が少ないこと、内地、大連、上海、浦鹽等の各局の略中央にあるので、二三球式程度の受信機で以上各局が、容易く聴き得られた事、一週四回の試験放送が實驗者に非常な便利を與へたこと等である。處が京城にも放送局が出來た、これも結構な事であるが、其の使用電波長が三六七米突で、東京と名古屋との中間であるから、相當高級な受信機でも、京城附近では右二局を分離聴取する事は不可能となつた。嗟萬事休すだ。今後は専ら新進JODKの詩に劇に、これら空間に醸さるゝ新興藝術を味はんのみだ

### 記者の手帖

吉田 莊一

○龍山の山十組では、伊藤さんでも、小口さんでも、ほんとにいゝ人だ。訪ねて行くと、屹度、長ツ尻することになる。

○その小口さん、昨年ぶらりと町を歩いてゐると「小口君」と呼ぶ者があるので、ふいとその方を見ると、別れて久しい郷國(長野)の中學の校長さん。「あゝやつぱり君だつたか、なつかしいね」と校長がいふ。「おゝ先生でしたか、これは珍らしい所で……」雙方の臉が熱くなる。

○聞けば校長は、この方面を視察に來てゐるとのこと、その晩大に今昔を談つたさうだが、小口さん曰く「一體長野の人間は、正直で、親切で、涙もろく、その上人なつこい所があるんだね。」

## をりくりに

川上 喜久子

別るれば夜霧のなかに泣かんとすくろかみはやくわが心しる  
嘆きつゝ五更となればうすらひの袖にもむすぶこゝちするかな  
憂き朝よ昨夜のゆめのたなごに殘るとばかりながめられける  
山上の秋清らなりわが袖に揃ひもうべき雲のひとひら  
別れきて雲の影する路をふみ心わびしくしめりぬるかな  
しばらくは涙とならぬわが心頬を硝子戸に寄せつ久しき  
ほのしろき臘月夜よわが君の文だに文字のにじめるを見る  
また逢はん日のたのまれず落つる日を負ひて歸れば淋しかりけり  
いやはてのさびしきことにわが心思ひいたらであふよしもがな  
わがうへも人に問ふなり亂れたる思ひは身よりあふれたるかな  
闇深く迷ふ心となりはてぬまた夢にだに君を見ずして

# 漢詩一つ

堂本貞一

父は漢籍が好きである。私が英語や獨逸語の勉強に餘念のなかつた時でも、傍から頻に漢籍に親しめ、漢籍に親しめと奨められた。

あまりに、此の奨めに耳を藉さないとして叱られたことも度々あつた、それで、已むなく一日の内の一時間内外を之に費すのを常としたものであつたが、當時、眞實の心持ちを白狀すると、これは私にとつて、決して嬉れしい欣ばしいことではなかつた。父の言はれるところには成る程一理あるとは思ひながらも、差し當り、横文字の課程に追はれて辭書と首つびきの最中、ときどき、父の遣り方を怨めしいとまで考へたこともあつた。

しかし、此の父の遣り方のおかげで、後年、自分が幾多の有形無形、直接間接の利益(單に利益とのみ言いきるのはあまりに味いのない申し分ではあるが)を享けたことを感じ、また、現に享けつゝあり、將來に亘つても享くべきことを想ふて、ひそかに父の御恩を有りがたく思つて居るのであるが、只だ、當時、正直のところ、それまでの餘裕もなかつたのであつたが、如何に奨められても平仄を覚えて作詩の門に入らうとはしなかつたが、父の膝下を離れて遠く遊び、東海散士の佳人之奇遇にある所思行ではないが『我所思兮老父身、欲往從之天造屯』去國匆々十

妻葛、姻戚半散半枯骨、談志俱是異鄉人、照心唯有一輪月』の感切なる今日、今更ら、その當時勉めなかつたことを悔いて居る。

大正十五年十一月一日、突如、道事務官に任じ忠清北道財務部長を命ぜらるゝ事となり、當時、上京中であつた私は、匆惶、用務を無理やりに一段落つけて十一月四日東京發歸城の途に就き、何やかにや走馬燈のやうな眼まぐるしい忙がしい日を過して十一月十三日夕刻、清州の住民となつたが俵米の品評會やら道地方豫算の編成やらで半月は夢のやうに消えた。

十一月二十八日、先づ北部三郡をと視察の途に上つた。途上、何とはなく感慨頻りで、昨を偲び來を想い『昨日遞官今牧民、道途喜看沃田新』とおぼつかないが口誦んだりした。二十九日夜、忠州で宴會の席上、郡守から『此の方は忠州の元老だ』とて紹介された老人が『孫のやうな部長殿を迎えて』と繰り返へし繰り返へしサモ欣ばし氣に盃をさゝれ、醉餘、興に乗じ名刺の裏に左の詩に似たもの走り書きして呈上した。

晩秋辭廳驅輕車十里坦途風光佳。囑目驚水害之跡傷心半夜不成眠。翌朝、郡守が轉句を『囑目驚之水害跡』となほして下さつた。

十二月一日、丹陽で明倫會長、明倫會講師、文廟直員の三人が更に筆を加へて  
晩秋辭廳闕山川十里坦途歷々邊。囑目驚之水害跡傷心半夜不成眠。として下さつた。

これを韓主復知事閣下に呈したところが左の詩を添えて轉句の『之』字を『閔』とする方がよからうと教へて下さつた。

瓊章來到知平安周察民情應不聞。夜々廳員同一席審豫算共難眠。丹陽の面長さんはこれに和して、非常豪雨々連月高車忽至頻想感。水害如今近古無憂國憂民似公無と。また、報恩の明倫會長はこれに次して

周詢風俗覽山川到處歡迎滿路邊。但使民生無所憾終宵旅館可安眠と。因みに忠清北道管内は此の夏、稀有の大水害を蒙つたので、今に猶ほ慘害の跡歴々として心を傷ましむるものが多い。

## うわさ雑記

石川利夫

○本町署長の鈴木さんは、腰にサーベルのぶら下がつてゐる人とは思はれない。

○會ふと、『ウム、なか／＼勉強するね、しつかりやり給へ、ウム、ウム』。

○新町病院長の鶴海さん、道樂といふと、將棋一本槍。『少しは指せます』といふと、『ウム、話せるな』と来る。『その方は……』とあとしざりすると『さうか、惜しいことだ、君にして將棋を知らんとは』。

○同じ病院の渡邊完治さん、日本畫は實にうまいもんだ、ゴ當人は本來美術を志したんだが、先生(中學の)から一喝されて、醫術に志す、それでも好きな道は、あきらめられぬ。『一ツ思ひ切つて鮮展に、恥をさらして見るかな』目下渡邊さん畫題考案中。

○渡邊晋博士と夫人とが、高商の横山教授を訪問して、横山夫人に『奥さんに見せるものがある』とて、本誌十一月號『高商だより』をしめす。横山夫人ちうと読み了つて『まああなた、こんなことを……』奥さんのお顔がポツと赤くなりました。

一部のブル階級以外は勿論茶屋の手に懸らず直接入口即ち木戸へ

の屋や澤正でも一人三圓半はとるが敢て驚く事は無い、寄席の色物



東洋博士の侍人之名に於ける所  
思行ではないが『我所思兮老父  
身、欲往從之天造屯』去國勾々十

とどこか左の語を添えて轉句の  
『之』字を『悶』とする方がよからう  
と教へて下さつた。

了つて『まああなた、こんなこと  
を……』奥さんのお顔がポツと赤  
くなりました。

# 芝居

## 今昔ばなし

前田昇

茶屋から座に這入るに福草履と  
號して太い捻り鼻緒の草履を用い  
た。此福草履を穿いて繰り込む所  
に一種の觀劇氣分が味はれたと言  
はれたものだ。豫て附け込んで置  
いた場所に導かれる、菓子と茶を  
持ち込む。序幕が開くと云ふ順序  
だ。今日では開幕は各座共午後三  
時乃至五時だが以前は午前の九時  
か十時だから幕合に辨當を持つて  
來る、午後の二、三時頃に鮎が來る、  
此三種菓子と辨當と鮎とが當時芝  
居の定食で略稱して「カベス」と云  
つた。尙ほ此外に着果物等を提供  
した。但し此分は客の注文に依つ  
てである。

幕になる毎に茶屋の男が「お小  
便は如何」と聞きに來た。いくら  
冷へ性でも三十分や一時間毎に小  
便も出まいがこれが一種の用聞き  
であつた。と同時に當時の劇場は  
前にも述べた通り概して不設備で  
あつた爲め場内の便所は全く不潔  
であつた。夫れ故多く茶屋の客は  
茶屋の便所に行つた。又一部には  
着飾つた小娘などが茶屋の男に手  
を引かれ嫺々として座席の横木の  
上など渡り歩き福草履を穿いて茶  
屋通ひを一種の見得とした様な風  
もあつた。併し此頻繁なる茶屋通  
ひは一ツの運動ともなり又屋外に  
出で新鮮の空氣を吸入する爲め當  
時の運動場も無い不衛生千萬なる  
劇場見物には確かに衛生上有要な  
ものであつたのだ。

一部のブル階級以外は勿論茶屋  
の手に懸らず直接入口即ち木戸へ  
行く。此處に出方(一名留場)と稱  
する男が多數居る。詰り案内係り  
である、此出方にも多くは馴染が  
ある、八五郎とか梅吉とか云ふと  
當人が出て來る、馴染が無ければ  
花番と號して彼等の中に順序があ  
つて當番の者が出る、場所を「平」  
とか「高」とか注文しても中々思ふ  
やうに行かぬ。彼等も茶屋と同じ  
やうに良き場所を買つて置く、而  
してお馴染の客に提供せんとする  
夫れ故花番では決して良好な場所  
を與へない。「何分好い場所は賣  
切れで」などと思はせ振りを云つ  
て「暫時お假りに」と後方のケチな  
場所に入れる。斯く座席の定まら  
ぬ中に既に序幕は開く、氣が氣で  
ない、其中漸く大骨を折つたやう  
な顔をして或る場所に導く、決し  
て上等の場所ではない、斯うした  
場合多くは賣り切れるやうな事は  
なく土間の七や八で見て居て閉場  
前になつても前方の五や六に幾ら  
も空いて居る事が屢々ある。最初  
「暫くお假りに」の場合直ちに紙包  
を彼の袖に投入する事は此場合頗  
る有効の手段であつた。何處の里  
も金次第だが此社會には最も此効  
驗が顯著であつた。

最後に少々下卑るが觀覽料を鳥  
渡比較して紹介しやう。  
日清戦争前までは彼の團、菊、  
左を始め一流所が顔を揃へても先  
づ平土間が二圓五十錢、高土間三  
圓五十錢、棧敷四圓五十錢、外に  
敷物代五十錢と云ふ處が普通の相  
場であつた。一間が五人詰だから  
一人の料金は僅かに平で六十錢、  
高で八十錢、棧敷で一圓と云ふ譯  
だ。今日の歌舞伎座は粒揃ひとな  
ると特等一人十二圓とある、曾我

### 散髪さらい

山口のぼる

○京城高商の鈴木校長くらゐ、  
風姿を構はぬ先生はない。  
○大嫌ひなのは、散髪だと思つ  
て、夫人が「大分お頭が伸びまし  
たね」と警告しても「さうか、も  
う二三日々々」で、いつまでもモ  
ヂヤ〜と伸ばしてゐる。

○或る日女中が「旦那様、一寸  
お様まで……」と呼ぶから、何の  
氣なしに行つて見ると『どうぞこ  
の椅子へ……』とある。『どうした  
んだ』と、どつかと腰を据へ乍ら  
訊くと、『ハイこれから始めます』  
とある。途端にヒョイと氣がつく  
と、女中銀色サンランたる散髪器  
を持つてゐる。『ウム、とう〜俺  
を坊主にするかな』

○爾來、髪が伸びると、いつも  
強制執行だ。校長痛いので、ポロ  
〜涙を流し乍ら『でも、床屋で  
ぼんやり待つてるよりはいい』。  
○話をはかる、志智敬愛氏とい  
ふと、京城でも有名な漢詩人だが  
今度鍾路の裁判所前で、大豊園と  
いふ西洋料理を初める。漢詩人の  
フランス料理は奇抜だが、その實  
志智氏は、長く佛國にゐた、バリ  
〜のハイカラさんなのである。  
○遞信局で、球撞きの第一人者  
は、高松順茂君。百六十點とある。  
その高松さん「甚も將棋も、せめ  
て五十位までに、二三段に進みた  
ら』。

# 徳政を提唱して

## 識者の教を請ふ

小林 藤右衛門

徳政之れは一切の貸借關係を消滅せしむるもので封建時代には或は一般的に或は一藩内を限り屢々行はれたる革命的法律であつて一見頗る亂暴で破壊的蠻法の様なれども決してそふではない。倦怠荒廢せる人心に大なる刺激を與へ覺醒を促がす上に於て最も必要である。換言すれば建設的向上的消極策の上なるものである。

今や世間は上下を通ふして不景氣風に襲はれ、人心は沈衰し各種の事業は停頓萎靡して振はず、景氣の恢復や失敗せる事業の挽回に焦慮し或は從來維持せる信用と地位の破綻を怖れ一意専念其彌縫策に苦心し東奔西走維れ日も足らず爲めに寢食を忘るゝに臻るといふ有様であるから他に向上發展の方途を講究する餘地なく窮餘の結果不知不識自暴自棄に陥り以て累を他に及ぼすにあらざれば竟には社會組織を呪咀する不逞の徒となるものあり。此等は素より薄志弱行の輩にして俱に齒するに足らず斷々乎として擯斥すべきものには相違ないけれども深く其由來する動機と心理状態を研究考慮せば一片同情の價值なきにあらずと惟ふ。

近く天下の公法を犯したる罪囚に對してすら大赦、特赦等の恩典を行はれんとするの秋に當り善良なる多數臣民の一天苦痛とせる債務關係に就て何等かの便法を設け

て怏々煩悶せる人心をして奮起せしめらるゝ事は政府當局者の一考を要する適當の時機ではあるまいかと思考するのである。

隣邦露西亞の革命の如きは餘りに過激に失し極端に流れたる嫌あるも此邊は國狀を斟酌し民心を付度し適宜の方法を設定せば一害を興さずして千利を輸ち得らるゝのである。

私が斯る突飛な問題を提唱したのは決して平地に波亂を起さんか爲めでは毛頭ない。従て多少の理由と根據とあるも限りある貴重の紙面を占領するに忍びず爰に梗概の一端を擲べて識者の誨を請ふのである。

### 兩班の銃獵

吉田 莊一

○警務局の或るヤンバンさん、近ごろ鐵砲を初めて、日曜の來るのを、待ち焦がれてゐる。

○『うまくあたりますかね』と訊くと『あたるとも、君も始め給へ、こんな面白いものはないよ』との御返事。ところが實のところこのヤンバンが腰に雉の二羽もブラ下げて歸つたことは、唯の一度もない。

○『少しは雉の御分配に預りたもので』といふと、『よろしい、この日曜の晚には、諸君に二三羽づゝ分配するにつき、魚や肉は買はんでおき給へ』——大分話は大きい。そこで、その日待つてると、果して各自に二三羽づゝの御配給。

○『どうもおかしいナ』『ウム、これは眉唾だぜ』と、若い茶目連手ん手に貰ひ物を持ち寄つて、羽根をしらべる、尻ツ尾を點檢する。すると果然彈のあとがない。正に打つたものでないことだけが分明。そこで更に調べあげると、この頃の寒氣で、弱つてバツタリ落ちたところを、田舎の鮮人が拾ひ、それを亦た當のヤンバンが、一羽いくらで御買あげと判つて『ナールほど、羽色のわるい筈だ。これは凍死者だ』。

○翌朝役所で『昨日はどうも……時にあの雉には彈痕がありませんね』茶目の一人が、恐る／＼伺ひを立て、見ると、當のヤンバン、濟ましたもの『フーム、數の中だからな、僕の砲聲で、それなり異士へ行つたのもあらうよ』……これには並みぬる茶目連……。

### 雜筆將棋會

辻六段を師範とし、正式にいろはのいから習はうといふ會であります。毎週一回開會、月謝金二圓。寄稿家、廣告家、讀者に限つて、御入會を歓迎いたします。御希望の方は、どうぞハガキで御申込下さい。

昭和二年一月三十日

# 都の誘惑

註釋を入れて置くが、僕は園藝に非常な趣味を持つて居るので、

『畜生ツ、今に見ろツ、其のうち俺も自働車で出勤してやるから』と呟いた事があつたが、由來

なる多數臣民の一大苦痛とせる債務關係に就て何等かの便法を設け

土へ行つたのもあらうよ……これには並みぬる茶目連……」。

# 都の誘惑

堀一知郎

△ 町人と狂雨が寄ると、よく三萬圓程金が欲しいと口癖のやうに云つて居たのだが。十年一日の如く、今以て諦めて居ないのは滑稽である。お氣の毒だが、此二人が金持ちになる時節が來たら、天下に貧乏人はなくなつて了ふだらう。

△ 尤も、僕も矢張り一緒になつて相槌を打つて居た一人には違ひない。が僕は内心金なんか要るものか、入用な文けは、眞面目に働いて居さへすれば、這入つて來るものだ、若し病氣かなんかで、働けなくなつたら、自決して了へば可いんだ、と怂ふ思つてた。

△ 處が、僕が東京に移つてからは拜金主義？にさせられて了つた。好い事か悪い事か、そんなことは別として、心底から金が欲しいと思ひ初めた。五萬圓——そうだ五萬圓欲しいと、怂ふ思ひ初めた。

△ 變心の第一は住宅難から來た。最初僕は懸命になつて格好な空家を探した。そして求むる家の替はりに、多くの邸宅を見た。夫等には、樹木が茂つて居たり、花壇や温室が有つたり、小鳥が囀つたりして居た。

『畜生、俺は恠麼家には住めな  
ゝのかなあ』  
と浩嘆するのだつた。

△ 註釋を入れて置くが、僕は園藝に非常な趣味を持つて居るので、日當の可い庭を見ると、たまらない程の誘惑を感じるのである。が市内で夫れは望まらべき事ではない、否絶望では無いが、是を得る爲めには月収入を全部投じなければ駄目を支けである。

△ 次に、僕は家内の者には薩張りした風をさせて置くことが好きなので、世帯其物のやうにして居る家内なんかに對しては、叱るやうにして迄、反物を買はせて來たものである。尤も夫れは銘仙丈けでお召だとか錦紗などの相談には忘れても應じなかつた。

△ 處が、東京住みとなると、衣類にも革命が來た、もう銘仙主義で高く止まつてばかり居られなくなつた。銀座を歩いたり、芝居を観たり、音樂會に行つたりして、娘と同じやうな年頃の誰かが、錦紗づくめや、シャルムーズだのミラネーゼなんかの、近代的柄合と色彩とで、乙に納つて居るのを見ては、僕丈けは舊態で平氣だとしても、娘の自尊心を傷けたり、娘に怨まれたりし度なくなつて了つた。

△ 僕の向ひの家は、某と云ふ大官の邸である。そして雨降りには、何日も其出勤に自動車を迎へに來るのが習ひとなつて居る。

△ 何日の事であつたか、或雨の朝僕は市電と、飛電と、王電の三つを、雨中乗り繼いで出勤する困難と煩はしさを、此向ふ家の自動車で感ぜさせられながら、

『畜生ッ、今に見ろッ、其のうち俺も自動車で出勤してやるから』と呟いた事があつたが、由來此愚痴を忘れない家内と娘は、雨の朝になると必ず

『今朝は又お向ひに、自動車が來ますよ』と云ひ、そして『それ來ました〜』

と云つて、僕を揶揄ふことを決して怠らなくなつた。

△ 書けば切りがない。常住坐臥、見るもの聞くもの、東京の凡てが「唆り」であり「刺激」であり「誘惑」ならぬものは無い。

『早く五萬圓の金持に成り度いなあ』

蓋し怂ふ思ふのが至當であつて、思はぬ者があつたら間違ひだらう。

△ 『一萬圓だ、一萬圓の基礎があれば、三年後には三萬圓にする事が出来る。其三萬圓は次に五萬圓になる』

僕は怂ふ信じて居るが、併し、

『其一萬圓は千圓から始まる。千圓が三年後に三萬圓になり、五萬圓、一萬圓になる』

と云ふ推算を實行しやうとは決してしない。

△ 僕にして、此一千圓の出發を保護する氣になれば、町人や狂雨の夢想と異り、僕は明に九年か十年目には、遅くも五萬圓のブルに成れるのであるが、惜しいかな、僕は來る月も來る月も、娘の着物を殖したり、一等席での觀劇をやつたり、温泉旅行をやつたりして、埒もなく暮して居る。そして時々自己を省察しながら

『からだか利かぬやうになつたら、矢張り自決かな？』  
と思つたりして居る。



# 大正から 昭和へ

渡邊得司郎

大正も改つて昭和の御代となつた。明治時代の學歴などでは微がはへかけた。大正年間には明治維新のそれに比して餘り大なる變遷を見なかつたが其れでも社會は大分變つた事象にであひ又新しい體驗を経た。歐洲大戰も東京大震災も先帝御治世時代の最も印象深い出來事である。

赤穂の凶變で東海道を四晝夜とかで乗り切つた一番打の寺坂の吉さんも今日の娑婆に飛行便のあるのを聞いては微苦笑を禁じ得ないであらう。饅頭をどうしても食べ物とは合點が行かず赤小豆を食ふ虫だと衆議を決した田吾作さんの屋根にはラジオの柱が突つ立つた。

飛行機や無線は發明界の大物であつてほんの一例に過ぎないが仔細に點檢すると世界の文化は駭々として停止するところを知らない有様である。しかし日本人の獨創的發明なるものが無いのは残念千萬である。日本が相變らず貧乏してをるのも之がためだ。泰西の文化を取り入れてから彼れ此れ五十年になるが日本人の世界的發明なるものを聞かない。これは日本人が先天的に頭腦が劣つて居るからで無くて科學に關する智識に乏しいからである。其の最大原因は全く日本の國字が不便不完全なる爲めであることを痛感するものである。即ち學校教育の大半が字を覺える爲めに費やされ生産的の智識

を啓く餘裕がないのである。とにかくこの國字を整理改善することは昭和の聖代に是非とも決行すべき緊急の大問題である。

## 伊藤春畝公

松田學鷗

春畝公の在韓中に於ける經綸の大策と、風流の逸話は、多くの人の筆に口に傳へられてゐる。併し尙ほ忘れてならぬのは、公が大に小學生徒を愛せられた事である。

公は、屢々京城中の小學生徒を倭城臺の官邸に招かれた。其の日は、天下無雙の大偉人も、人懐かしい好々爺と爲つて、無邪氣なる少年少女を迎へられた。而して先づ「君が代」を合唱させた後、公は極めて平易に、忠君愛國、義勇奉公の道を諄々として説明され、多くの生徒が、大偉人の口より出づる金言を心に銘し、感激の色を面上に現すを見て喜ばれた。斯くて生徒總代の答辭を聽きて式を閉ぢすべてに日章旗一本と、折詰辨當一個づゝを與へ、南山の庭園に同じく逍遙せられたものである。

○ 公の京城を去られてより十八年當時の小學生徒は、既に三十前後の壯者と爲り南山の松柏は舊時の綠を呈してゐる。然し在韓日本少年少女の爲に、帝國臣民の覺悟を説き示められたる公の英姿は仰ぐことが出来ない、噫。

(松田先生著、朝鮮雜記)

蹇々王臣去復還。爲變雲路謁天顏。東瀛幾破風波險。白髮尙侵寒暑艱。出統隣邦扶植政。入參軍國輔匡班。君恩未報傷衰朽。煙霧迷濛海上山。

## 棋客耳打帳

平田久雄

○鐵道局の林原さんと、京南鐵道の立川さんとは、將棋に於て、好敵手である。

○會へば、スグ格闘が始まる。日に依つては立川さんがよく、時とすると林原さんがいい。どつちも我れ少しく有利なりと信じてゐることは御同様。

○立川さんは、酒が好きだが、林原さんの顔を見ると、警戒して飲まぬ。飲まして挑まるゝを恐れてである。「どうも君が來ると、酒がうまうない」。

○ところで、林原さんの秘略に曰く「飲まんからいゝ、警戒するからいゝ、敵が飲むと、差し手が鋭くなつて、とてもいかん。ウゝム今日も飲まん、メめたぞ」。

○因みに、林原さんの手法は精嚴沈着、理づめで出來上つてゐる立川さんの方は、意氣縱横、腕ッ節でグイゝ差しまくつて行く。

○朝鮮公論社では、時々將棋がハツむ。それといふのが社長石森氏が、ちよいとうまいからである。

○ところが、同社には里吉君といふ剛の者がある。相手が社長だから、少し遠慮すればいいのに、この里吉君少しも遜讓を知らぬ。勝負となると、社長も羨まないと、グイゝさしまくる。この腕ッ節の強いのかゝつては、社長頼と氣勢揚らず「オイ、里吉君、その手を、少しどうかせんかい」おツトどつこい、此所でゆるめてたまりますか「どうも君の將棋は、ちと殺伐でいかん」社長負けゝ批評だけは達者也。

## 佐渡の

1 デル氏の淨るり人形に對する讚を批評しようとするのではない。自分が佐渡に居た幼い頃、佐渡

これとても、「鈍馬人形」の表情の間の抜けサ加減にふさはしく、甚だ現代離れのしたものである

る。即ち學校教育の大半が字を覚  
える爲めに費やされ生産的の智識

出統隣邦扶植政入參軍國輔臣班  
君恩未報傷衰朽煙霧迷濛海上山

と殺伐でいかん』社長負けく批  
評だけは達者也。

## 佐渡の

# 鈍馬人形

柄澤四郎

大阪の文樂が焼けた時、詩人大使の名を謳はるゝ駐日佛國大使のポール、クロードル氏が、東京朝日の紙上に、『文樂の淨るりについで』と言ふ一文を發表した。

それは勿論、文樂の人形淨るりの藝術的價値を述べて、其焼失は單に大阪名物を失つた損害だけでなく、世界藝術上の一大損失だ、と云ふ意味を述べたものであつた。

其の一節に次のような言葉があつた。

……生きて居る俳優は、どんなに天りんがあつても、その演ずる想像の劇に無理な要素、何かしら實際の日常のあるものを交へるの、いつも吾々の氣分を邪魔する。俳優は到底假裝に止まるのである。これに反して人形は、所作から取りいれるもの、外には、生命も動作もないのである。それは物語につれて活きる。丁度人の影がすみ返つて、自分のやつたことをすつかり物語り、そしてそれが追憶から次第に現實となるのである。俳優が語るのではない、言葉が動作するのである。人生が靈感の化身となつてゐる……。

成る程、詩人だけに實にうまい所をつかまへて批評して居ると思つた。  
然し自分は、單に詩人大使クロ

ードル氏の淨るり人形に對する讚を批評しようとするのではない。自分が佐渡に居た幼い頃、佐渡名物の鈍馬人形を屢々觀た時の感じが、今に甦つて來た、それは、クロードル氏の人形觀に似通つたものが多いのである。更に言葉を換へるならば、自分は以上のクロードル氏の人形評を讀んで、幼い頃に屢々觀たことのある「鈍馬人形」の感想、印象が今更の如く來た譯である。

「鈍馬人形」と稱する名前が、甚だ變ではあるが、佐渡名物のそれは、人形の顔付の無技巧であり、且つ表情の滑稽味を豊富に帯びて居る點からすると、鈍馬(のろま)と云ふ言葉は至極よくあてはまつて居るのである。手取り早く言へば、甚しく間の抜けた人形芝居の一種である。個々の人形では、單に男女の區別がある位で、老弱の相違すらどうやら判り兼ねるような人形で、ましてや泣くとか、笑ふとかの感情表現なんぞはてんで無茶であるが、馬鹿らしい乍らも觀て居ると、人形の持つて居る滑稽な表情に自ら魅せられてしまふのでもあらうか、現實から次第に追憶に引きこまれてしまふのである。遂には釣り込まれて物語りを傾聴してしまふようになる。

そうなる、もう人形の舞臺面に顯はるゝ動作なんぞは、そうたいした主要條件ではなくなる。唯だ太夫の語る鄙俗ではあるが、何となく情趣の豊かな、そしてローカルカラの濃厚な物語りに、想像と迷想とを展開して行くのである。

その「鈍馬人形」の必須條件として、太夫のうたふ……寧ろ語る多くは、「文彌節」である。

これとても、「鈍馬人形」の表情の間の抜けサ加減にふさはしく、甚だ現代離れのしたものであるが、佐渡の古き情趣をたゞふるに充分で、また古典音楽としての價値もあるものだと言はれて居る。

一體、佐渡は古い所だけに、人々の趣味は却々に古く且つ凝つて居る。一國一郡、人口十六七萬程の所で、大部分が農村であり乍ら能師の家元が、觀世と實生の兩派に分れて二軒もあり、村内で一寸名を知られて居る程の人ならば、能の一さしも舞ひ得ない者はないと言つた所である。そして現實から離れて、各自の迷想趣味とでも言つた風なものに没頭する連中が却々多い。

こうした土地だけに「鈍馬人形」が、流行するのも一理あるように思ふ。アノ鈍馬な、滑稽な人形芝居であるだけに、却つて實際の日常のあるいまはしさを混へず、佐渡人獨特の迷想趣味の氣分を邪魔せず、文彌節などの物語りに顯はるゝ超現世の境地に誘ひ得るのである。

今でも「鈍馬人形」の印象は、近頃よく朝鮮名物を商ふ店屋に地下大將軍の小さな置物が出て居るがあの人形とも面ともつかぬ一種獨特の表情に接して、自分には新らしく甦つて來るのである。

(一五、一二、八日夜)

### 年頭缺禮

昭和二年一月

廣江澤次郎

# 閑談語

井上 収

よく私の家には物乞ひが来る：  
……どこも同じかも知れないが、それが尋常一様の物乞ひでなく、病氣の爲に労働が出来ない、妻子に死なれて内地へ歸る、旅費がないといふ如何にも氣の毒な事情の携帶者であり、時恰も極寒、破れ單衣一枚、足袋もはかず、溝板のやうな下駄を穿いてる。

國許までの旅費は？ときけば五圓か十圓もあれば歸れる。私も大に君子人ぶつた口述を以て『そんななりをして、京城の町に……しかも日本人が慄えあがつてゐては、朝鮮人に對しても耻かしい、早く國へ歸つて、身體を癒して出て來たまへ……』

この物乞は満身感激で歸つた。四、五日して私が外出先から歸ると、出會頭に門口でかの物乞を見たら。女房にきくと『あんまり事情が氣の毒ですから旅費をやりまし』

然し私は、この物乞ひに、多少嫌らぬ點を感じるが、憎惡の念は少しも起らない。それはかの物乞ひに、私の施與を恩に被せやうとさえ思はぬならば。

『あなたのご恩は死んでも忘れません、あなたの方へは足を向けても寐ません』

と何かの時に、涙を流して喜んだ男を四、五人知つてゐる。その時私は、大變にいゝ劇作者となつ

た、と多少の誇りを感じた外に、この人も大變に幸福に恵まれた、と心からその人を祝福した。時が移つて、この人が非常に逆境に立ち、私を恨んでゐると聞いた。何だか寂しい心持を感じたが、これに對して何か辯解がましい態度をとつたり、少しでもその人に惡感を懷くやうな念ひをすることは、自己を過信することだと思つた。

人間は對手から何か頼まれると即座には斷行の出来ない臆病性がある。卑怯な潜在意識？がある。この臆病性が人の交りの間にある間は、反抗、憎惡、怨嗟といふ闇い影から遠離する、といふ譯にはゆかない。

人から頼みを受けた時、安請合は禁物である、頼まれたら何でも引受ける、といふやうな氣持は、義侠など、讚ふべきでない。頼む人は一切を投げ出して居る以上、その總てを引受る準備の確實でない限り、輕卒に引受けるならば、反抗や怨恨や憎惡をも同時に引受ける仕度も出來てゐなくては行かない。

人の頼みを聴く時、その註文通りに引受けて對手を喜ばす快感に浸らうとすることは、引受けた事の成就しなかつた時の氣まずさに想ひ到らぬので、最初に氣まづい思ひを取越して置く勇氣が乏しいからである。

人間は人の噂を聞くのを先天的に喜ぶ、けれども、いつもその噂に出る人が、自分よりも好評であることには耳を傾けない。

誰でも人から讚められるのは嬉

しいことに違ひない、世の寵兒となることにも誰しも不服はないがその次の刹那には必ず反對の立場に居ることを豫期してゐなくてはならない、なぜなれば賞讃や寵兒を獨專する權利を持たないから。選拔試験に首席で入學したものが、最終まで首席を獨專するとはきまらないやうに。

忘恩を責める人は、一かどの道徳家のやうに聞えるが、その人は自分が恩の押賣りをして居ることに氣がつかない。人を責める場合その人に責められる一面はあるにしても、多くの場合は、自分の理想と合はぬのを責める。親が子を叱る場合は、親の心持通りに子はならない爲で、親が子供と同じ理想になれば、叱らずにすむことである。

世渡りには、對手ばかりが目について、自分を見失つてゐる場合がまゝある。

## いろいろ帖

吉田 莊一

○京電では、中屋さんが碁を打つ。ゴルフ程に熱心ではないが、滋味のある、悔り難き手筋だとの評がある。

○武者さんは、室内娯樂は、どつちかといへば、避ける風がある。そのかはり野外運動は、最も熱心だ。そしてそのゴルフでも、テニス(昔の)でも、スケートでも、頭の力の加はつた、無駄のない手法が特色だ。

○同社では、本年採用の社員を境界として、有力な野球團をつくる計畫があるといふ。愈々野球界は、忙しくなるな。

# 改心書

しきはあらず慈幼の政は敢て忽にすべからず』と。又所謂兇歲遺棄

参考條文。經國大典。私カニ官府ニ出入スルハ杖一百云々



だ男を四、五人知つてゐる。その時私は、大變にいゝ劇作者となつ

誰でも人から讃められるのは嬉

る計畫があるといふ。愈々野球界は、忙しくなるな。

# 牧民心書と

## 獨逸憲法

園部 敏

Y氏來訪、文債の履行を請求せらるゝの急なる眞に大晦日の鬼の如く甚しきものあり。故に氏の去るや匆々、書架より獨逸新憲法條文と牧民心書と取りて所謂雜筆をものせんとす。

獨逸新憲法はうれしき規定を多く含むもの、殊に其共同生活に關する規定、官吏法の根本規定の如き光彩陸離として他國の法則の範なりと稱せらるゝもの、牧民心書は巷間周知の李朝純宗時代の洩水丁若鏞の著はすところ、獨逸新憲法の解説をハチエツク、マイスナ上等に求めずして牧民心書の著者の教を聽かんとす。これ亦年の瀬の遺線の一なり。洩水を冒瀆し、且つは雜筆の眞意を解せざる無耻厚顔は我之を知ると雖も然かも恐るゝところなし。

獨逸憲法第一二二條 私生子ニ對シテモ法律ニヨリ其肉體的精神的及社會的ノ發育ニ付嫡出子ニ對スルト同一ノ條件ヲ有セシムベシ  
同第一二二條 少年ハ過役並ニ道徳上精神上又ハ肉體上ノ遺棄ニ對シテ保護セラル國邦公共團體ハ之ニ必要ナル措置ヲナスベシ  
參考條文。續大典。兇歲ノ遺棄小兒ハ人ノ收養スルヲ許シ救済シテ子トナシ云々

牧民心書の著者はこれが立法主旨に就て曰ふ。『凡そ天地の和氣を傷り人心の哀憫を極むるものは未だ幼にして養ふものなきより甚

しきはあらず慈幼の政は敢て忽にすべからず』と。又所謂兇歲遺棄の外『或は遺兒あり多く奸淫者の生むところに係る然れども生物の理其父母の罪を以つて其兒に流すべからず宜しく又收養すべし』と。

獨逸憲法第一一九條 婚姻ハ家族生活及民族ノ増殖ノ基礎ナルヲ以ツテ憲法ノ特別ノ保護ヲ受ク  
參考條文。經國大典。士族ノ女年三十三近ク貧ニシテ未ダ嫁セザルハ本曹啓聞シ資財ヲ量給セヨ云々

牧民心書の著者は婚姻の國法上の特別の保護は、就中『勸婚の政は列聖の遺法』であつて必ずしも獨逸國法のモノポリーにあらざることを述べ、而して其立法理由として『夫れ天地の間壹辭して宣びざる者未だ男女の時を過ぐるより甚しきものあらず豈冷淡たるべけんや』と曰ひ、更に之が具體的の程度として地方長官をして其管内の『男年二十五女二十以上を選び其父母親屬及び財産の據るべき者あらば督して之を爲せ慢者は罪あり其絶えて親族なき者は有徳者を選びて媒酌をなさしめ匹を求めて之をなし官より錢若くは布若干を出し以つて之を助け袍帽靴籠黒衣の屬は官より借し或は貧富交濟せしめ或は兩窮相合せしむ』ることを其職務となさしめんとして居る。

而して此官營婚姻媒介制度は單に若き男女の婚姻の媒介を目的とするのみならず、進んで『鰥寡を取りて之を和合せしむる所謂合獨の政』をもなさしむべしと説いて居る。

獨逸憲法第一三〇條 官吏ハ全團體ノ使用人ニシテ一黨派ノ使用人ニ非ズ

參考條文。經國大典。私カニ官府ニ出入スルハ杖一百云々  
牧民心書の著者は其立法主旨を演繹し、官吏の探るべき態度に就て教へて曰ふ『大凡官府の中宜しく肅々清たるべし内外の別を嚴にし公私の界を明かにし宜しく雷の如く霜の如くなるべし權門勢家には厚く仕ふべからず』と。

獨逸憲法第一二九條 官吏ノ任命ハ法律ニ別段ノ定アル場合ノ外終身トス官吏ハ法律ノ定ムル條件及手續ニ依ルニ非ザレバ一時其職ヲ免ゼラレ休職又ハ退職ヲ命ゼラレ又ハ少額ノ俸給ヲ受クル他ノ官職ニ轉ゼラルコトナシ

牧民心書の著者は獨逸官吏法の原則の完璧を稱揚し其地位の保護厚き獨逸官吏を羨望し、かゝる官吏法の原則を採用せざる國の『官吏は必らず遞はる有り、官は恃むべきものならんや、諺に曰はずや官員の生活は雇工の生活なりと、朝に昇り暮に黜けられ以つて依靠すべからざる』ものとなし、而してかゝる國の官吏は『官吏生活を以つて送旅となし官を棄つる蹤の如く曠として餘戀なき』の心境を養成すべく、かりそめにも『官を認めて家となし久しく享けんと意欲し一朝上司檄を飛ばし邸家に報あれば驚惶して措を失ひ妻子顧みて涙を垂れ吏奴の竊み見て譏笑し官を失ふの外其失ふところ更に多き』の憾を遺さざらんことにつとめよと悲觀的に官吏生活觀を説いて居る。

年頭缺禮  
昭和二年一月  
今村 鞞

# 財産差押を喰ふの記

工藤武城

京城に來て間もない或る冬の事である。

旭町二丁目の、此も熊本の出身なる田畑君の經營せる不知火館の廣間で、肥後國人の小集會を催した。

扱て彌々開宴となるや、例に因て席次の座採めが始まる。肥後では殊に此風習が猛烈だ。お年の順に、京城在住の年數を標準で、いや小供の數の順序に、中々に定まらない。猛しいのになると、御維新前の食祿の石高の上下で等と、流石神風連の産地丈に、突飛な建議案も提出される。

斯くて此開着は何時果つべしとも見えない。お腹は段々に減つて来る。時しもあれや、誰が發議したとも記憶せぬが、差押を喰つた度數に因て席次を定めてはどうかと、奇想天外の提議をしたものがあ

る。此は妙案と計りに、方々から賛成の拍手が湧く。

『困つた事を極めたものだ』とし、ぐく、席を立てて、床柱を後に悠々と座に着いた偉漢がある。

誰やらんと打見やれば、こはそも如何に、今は世に時めき玉ふ憲政内閣の副總理、内務大臣兼遞信大臣の安達謙藏君で、差押を喰つた度數無量と云ふ事で、今夕の席次としては、押しも押されぬ第一席の資格は充分であると自信

して居る。

『夫では失禮します』

と第二席に着いたのは、目下日本のマンチエスターたる大阪の實業界の重鎮、信託會社長、當時東洋拓殖會社重役理事、林市藏君大學を出て三年間、官途についたもの、盡く差押へられて、一度も俸給袋に對面した事がない、四十幾回と云ふ剛の者である。

第三席はF君、次はS君(皆目下京城在住の紳士なるが故に特に實名を憚る)と、順々におとなしく、其度數に應じて着席する。

茲に憐を留めたのは拙者である悄然としてたつた一人取残されて手持無沙汰なること夥しい。

村の壯士芝居で、憔悴した病人の着て居る蒲團や、破れた疊、さては鍋釜迄卦印する、折袍を携へた高利貸や執達吏のトラゲデーでは、度々差押のシトンを見た事はあるが、本物の無鹽を體驗した事がない。残念ながら今夕は暗涙を飲んで此屈辱を受くるより他に致方は無い。

如何にも口惜しそうちに、暗然として末座に扣へて居る吾輩の姿を氣の毒をうに、つくく眺めて居た、唯一回差押を喰つたのみと云ふので、隣席に居たO學士は、

『何、工藤サン、ソナナに切齒することも、扼腕することもありませんよ、臥薪嘗膽、此鬱憤を忘れさへしなければ、異時他日、必ず雪辱する機會がありますよ。まー、氣を廣くして、一杯おあがりなさい』

と、盃をさして優しく慰めて呉れた。

※ ※ ※

春風秋雨、幾年か過ぎた。

110

遂に此雪辱の時期が到來した。第二回の洋行を終つて、旅塵も未だ拂はない、さる日の事である。

非常に度の高い近眼鏡をかけた背の高い男と、見るからに人相の下賤な三人の男が面會に來た。

『何か御用ですか?』

『私は執達吏です。差押に参りました。此三人が債權者です』

(以下次號)

聞くがまゝ

山口のぼる

○南山町の片山病院に、原稿をお願に行く。院長「僕に書けといふのか」イエ、奥さんに、お願したいんです「さうか、僕は筆を持つのが嫌ひでね」そこで、奥さんに勸めて頂きたいんです「フン、それならワケはない、よし僕がさういふよ」メめたと思つて「では左様なら」と歸りかけると、院長「だが……」と兩手で頭を抱へて「一寸待つてくれ、俺が女房にお取次するんだな、ウーム、ちよつと話し悪いな」

○警官練習所の藤井國兄さん、常の年なら、十日頃までに、四斗樽一丁見事にカラン／＼になるのである。然るに、今年は諒闇中とあつて、飲友更に來らず、主人「静かなお正月だな」と、背伸びをする、奥さん更に動せず「これからいつもコンナ嚴肅なお正月をしたらうございますね」

○京畿道の關口、白石兩課長、それに信田龍山、原西大門、藤井警官練習所など、出逢ふとスグ將棋を初める。中で強いのは原西大門。片ツ端からコロリ／＼と倒すので、天狗一同相顧みて「これはおかし、妙な日だね」

## 動物學上より

つた、騙物とは云ひながら此の類の齒の性質を語るにはよい話である。

からだそふである。此の様にポツリポツリと粒になつて出るのは大

第一席の資格は充分であると自信

春風秋雨、幾年か過ぎた。

おかし、妙な日だね」

# 動物學上より

## 見たる兔

吉田雄次郎

### 兎の齒

人間その他一般の獸類には門齒犬齒、臼齒の三種あるが、兎には犬齒がなく其の部分が隙いて居る門齒は此類に屬する動物の特徴で動物學上兎、鼠、栗鼠などを齧齒類と云ふのも之れから來て居る、即ち門齒は上下二本づゝあつて噛合せて噛み合ふのである、又人間や一般の獸類の齒は珪瑯質が齒實の全面を被ふて居るが、兎の門齒は珪瑯質が前面丈にあるのみである、珪瑯質は鋼鐵に等しき程の硬度を有つて居るもので、動物體中最も硬いものである、齒質は其の割合にしては脆く堅い物を噛ぢれば先の方が次第に欠けて前面の珪瑯質が残るから齒が益々鋭くなる譯である、此類の動物が時々食物にもならぬ様な木片などを噛ぢるのは全く齒を磨くためで武士が刀を錆びさせぬ様に注意するのと同様な意味である、又一般の動物の齒は一旦成長し終れば其の後は欠けても折れても再び元の如く癒ゆる事はないが、齧齒類の門齒は欠ければ又元の如く成長するので試みに相手の齒を抜き去ると一方は際限なく伸びるのである、曾て東京の淺草で見せ物に『兎角』の實物を見せると云つて香具師が人を呼んで居るので這入つて見ると上顎の門齒を抜きとつたため下顎の門齒が際限なく上に伸び上唇を破つて少し先きを出して居つたのであ

つた、騙物とは云ひながら此の類の齒の性質を語るにはよい話である。

### 兎の足

前脚は後脚の三分の二程しかない、故に山へ上る事は頗る輕快で此小動物の得意とする所であるが之に反して山を下る事は最も困難とする所であるから一直線に下る事は滅多になく必ず横へされる、兎狩に綱を上の方に張つて谷間から追ひ上げるのも此の習性を利用するのである、兎の足を化粧用の刷毛に使ふ事は人のよく知る所である。

### 兎の習性

野兎は甚だ怯懦で佇立するかと思へば驅けて見たり、ちつとも落着いて居る事はない、眠る時も伸び／＼と四足を伸ばす様な事はなく蹲つて居る、食物は硬い果實や草根木皮を噛つて居る、穴居とは云へ狐や貉の穴と違つて地中に深く掘るのではなく只木の根等の僅かに窪んだ所に潜んで居るのみである、併し小屋飼ひなどすると牝兎は床下に隧道を作り乾草などを咬へ込んで鳥の巢形に見事な褥を作り自分で立派な分婉の準備をする事も屢々見受くる事である。

### 兎の肛門と糞

最後に甚だ尾籠な話ではあるが俗に兎の肛門は年に一つ宛増える」と云ふ説であるが、之れは勿論觀察の粗漏から起つた誤謬で全く肛門の稍前兩側にある一種の臭氣ある瓦斯を發する肛門線を見て云つたものであるふ、肛門線は老兎程深くなるから、斯様に誤らるゝのも無理のない事である、次ぎは糞であるが某博士の著に兎糞録と云ふのがある、書いてある事が兎の糞の様に大粒で丸糞見た様である

からだそふである。此の様にポツリポツリと粒になつて出るのは大腸が豆の莢の様處々に縊れがあつて、糞が其の仕切りの中に這入つて固つたからである、兎糞には磷酸窒素質を多量に含んで居るから農作物の肥料には頗る有効である外ポルト液成分を含んで居る、此のポルト液は他の動物にはない一種の傳染病豫防液で、之がため兎には蚤や虱がたつ事がない、望月砂と云ふ漢藥は兎の糞である。

### お生憎さま

平田久雄

○裁判所の方でも、時分柄スケートが中々盛んだ。  
○中でも一番うまいのは山口(信正)判事さんだ。隠然として、斯道の師範と仰がれてゐる。  
○この間コンなことがあつた。特に名前を秘しておくが、その人が同好の連中と、例の京電スケートで、盛んにやつてゐると、見事に顛倒して、あつといふ間に鮮人の焼芋車の下にスベリ込む。スルトその鮮人悠然として車の下を覗き込んで「旦那、お生憎様だ、焼芋はもう賣れ切れてしまつたよ！」  
○本町開教院の坊さん達が、大和町の政務總監邸に、寒行に行つて、盛んに大聲を立てゝゐると、玄關子ヌツと現はれて「此處は、寺ではないよ」それは判つてゐます、この宣傳ビラを讀んで下さい」そしてスタ／＼と戻つて來ると、玄關子二三町追ひすがつて「どうも御苦勞様です、これを……」一封の紙包を渡す「イヤ御殊勝なこと……アナタこそ御苦勞様」ヒュー／＼寒風の吹く中で、目出度妥協成立。



# 藤井先生

江原善槌

『神農も嘗めてびつくり唐辛』とは川柳の諧謔的警句であるが餘韻蕩々の諷刺がある。百草を嘗めて醫藥を教へた人命の救主も西歐思潮の輸入で草根木皮の牛溲馬渤のとさんざんけなされたが、どうやら此の節擡頭してうろ／＼世の中に出るやうになつた。京城大學では藥草の研究室が出来るとの噂がある、漢法醫藥も亦多幸なる哉、今日迄歡迎された礦物性醫藥は硬化して人體に有害毒素を遺留すとの事である。併しどちらにしても今日は藥物治療法は強弩の末だ、今更大學が草根木皮の研究とは時代思潮に逆行だ、余は藥物の研究より寧ろ治療上の研究が先驅をなさねばならぬと思ふ。見よ京童は諷ふて云ふじやないか『博士が殖へて病人が減らない』と、なんと穿つた警句ではないか。目醒めぬ刀主者流は此の重誦を三復すべきである。成る程今日の醫學は病理は進んだが治療が進まないのは議論にあらずして事實である。病人は醫師の玩弄物であるか、先般自分の娘も某齒科醫學校の玩弄物になつた結果今日は重患に陥つた、大學病院をはじめ各種の公私立病院は治療上の成績が面白くないと云ふのは畢竟藥物治療のみに偏するからではないか、病床に呻吟する患者は多額の費用と苦痛を犠牲にして博士號獲得の提燈持をやるのは馬鹿々々しい。見よやれ靈術治療の神秘治療のと神佛を擔つぎ出

すのは畢竟醫藥の權威が地に墜ちた證左である。京城にも種々なる妖術魔法が出没して病人を五里霧中に彷徨せしめて居る。所が這般來鮮した萬病一原論『死より生へ』の著者藤井玄對先生は氣焰虹を吐いて醫學界の革命を提唱された。

先生曰く『今日の醫學では的確に病氣を治療し得る保障は困難である、何となれば今日の醫學は學理は進歩して居るが治療は遅々として牛歩の如くである、余が研究せる治療法は其効果が的確にして實に驚嘆に値するものがある、而して其の治療法は一の治療器の使用にして手觸るれば手を治し頭觸るれば頭を治し腹と足と内外何病を問はず璇機の觸るゝ所忽ち病根を絶滅しなければ止まぬのである、之を名づけて藤井式壓戟治療法と稱して居る』と、此の機械は既に日英獨佛米の特許を得て、先生が獨特の治療は何人も追隨を允さぬのである、余が實驗する所では慢性急性どちらでも効力があるが、就中急性症には即効があつた、小兒の百日咳、頭痛、腹膜の如きものは二三回の治療で回春の即効があつた。余が風邪で發音に苦みしが一回の施術で發音どころか大聲を發し而かも之を繼續することが出來た。其の效果の偉大なるには更に詠嘆せざるを得なかつたのである。一日同志相會し先生が歡迎の宴を張つて其の治療法の説明と實驗を見聞したが、其の治療法は頗る簡單にして多くの時間と手数を省くのは特色であつた。席上に在つた吟友魯石は先づ筆を採つて。草蛇を奔らした『神農遺業已陳々。壓戟方成喜革新。萬病一原論斷好璇機觸處忽回春』と、而かもこれ決して過賞でない。次で余も亦毫

を呵した『金液銀丹難斷根。先生不治奈元々。出蛇走癩真奇術。萬病說來歸一原』と。そも／＼先生は總督の治療を兼ねて來診、一般患者の難病をも治療したが患者は皆先生を仰いで今扁鵲と云ふて其の回春の悦を呈した。先生は客冬十一月二日東京神田の養正閣に向けて馬首を回した。知らず先生再び來るや否。

## ◇醫界雜誌帳

石川利夫

○旭町の今本醫院長が、何に感じてか髪を伸ばし始めた。

○御同業の口悪屋曰く、髪を伸ばしてゐると、ころんでも痛くないからな。……註に曰く今本先生目下熱心にスケートをやつてゐる。サテは轉ばぬ先の長髪といふ譯か。

○醫家のスケートは、大流行である。中でも師範格なのは、一番ケ瀬醫院長。見事に大滑走を試みては『諸君、こゝまでおいで』。

○それに次ぐのが、植村醫院長この人は濃厚な人だが、運動といふと、何んでも好きだ。そして、スグにその骨法を會得するといふ徳な性分。

○話は、變るが、中村健吉氏(耳鼻)が尺八がうまい。それは病院をやめても、優にこれで食ひ得る程の妙境に到つてゐる。それと雁行するのが、酒井婦人病院長。これも中々あざやかといふ評がある。

○凝り性の衣笠婦人病院長、新年から雜書雜讀をやめて、何か専門的研究を始めらしい。サテは博士號でも狙つてゐるか。イヤ今更らそんな稚氣のある衣笠氏でもあるまい。

# 雜 筆 案 內

京城旭町一ノ六  
**今本醫院**  
院長 今本義胤

京城本町二ノ二  
**一番ヶ瀬醫院**  
院長 一番ヶ瀬慶次郎

京城明治町二ノ七五  
**利根川齒科**  
院長 利根川清治郎

京城明治町二ノ七七  
**中島醫院**  
院長 中島貞信

京城北米倉町九四  
**工藤醫院**  
院長 工藤武城

京城永樂町二ノ八七  
**酒井醫院**  
院長 酒井一郎

京城吉野町一丁目  
**木村醫院**  
院長 木村文三郎

京城永樂町二ノ七六  
**木戸齒科醫院**  
院長 木戸虎藏

京城旭町二ノ八  
**瀬戸醫院**  
院長 瀬戸 潔

慶尙南道進永  
**大口醫院**  
院長 大口壽香

は馬鹿々々しい。見よそれ靈術治療の神秘治療のと神佛を擔つぎ出

遊機觸處忽回春」と。而かもこれ決して過賞でない。次で余も亦毫

あるまゝ。

京城西四軒町

# 南山莊

電話本局 一五二三番  
三五八五番

表装、表具

# 山本幽谷堂

京城府元町二ノ五三  
取次電話龍山四八七

西洋料理  
支那料理

東京へお出での節はどうぞお立寄りください

東京芝區新櫻田町一七

(衆議院のスク近くであります)

# 泰明軒

ゴム印  
諸印章  
篆刻

(昭和日付ゴム  
回轉印各種)

諸官衙御用

# 武田大正堂

京城本町二ノ三九

御用の節は京城雜筆社山本  
宛御一報願上ます

櫻ぼし 鹽乾魚 其他  
するめ かまぼこ

# 太田種次郎商店

京城本町三ノ二七

京城支店 田中守寛



大崎八段主幹

月刊將棋  
專門雜誌 **新棋戰**

(一冊定價金二十五錢)

東京市日本橋區彌段町一ノ四

發行所 **新棋戰社**

京城鍾路一丁目

**濱洋服店**

電話光化門二四四

人生の幸福は健康より

健康それは參精の服用によつて解決し  
ます明日と云わず今日から而して人生  
の幸に向つて

(定價内用二十五瓦入壹圓五拾錢)

京城本町二丁目

總督府參  
精發賣元 **貴生堂藥品店**

電話本局一三八  
振替京城七六一

高級 **京洙**

(新柄見本到著)

京城本町三丁目

● **まらぎ屋**  
電話本三〇六八  
振京五八三

六段 辻繁之助

**將棋教授所**

(京城若草町若草湯隣)

# 雜筆案内

辯護士

高橋章之助

京城仁寺洞一三六

茶及び茶器

青々園茶舗

京城本町二ノ九〇

辯護士

中島長作

京城黄金町三ノ六〇

菓子、パン

木村屋

京城明治町二ノ七二

辯護士

榎本隆

京城明治町二ノ一〇五

貿易商

ベニシラ洋行

京城黄金町二ノ六五

辯護士

切山篤太郎

京城黄金町一ノ八三

高級印刷

大和商會印刷所

京城觀水洞一三五

辯護士

宮崎毅

京城黄金町三ノ三三四

易

岡村介石

京城明治町二ノ二

度洋向の

て懐しかるべき半島の地に歸る朝  
鮮の學生に圍まれて私も遂に連絡

が妙に増して來た。雜踏の巷！目  
映いばかりの灯！輝く若い女の

# 渡鮮前の

## 一週間

山口 泉

思ひ出は薄亂れる佛國寺新羅の  
舊都を訪れし頃

櫻の花が散りかけた頃になるともう私の渡鮮の日も目の前に迫つてゐた。十七箇年の長い學生生活を終へてホツトする間もなく生れたから廿五年の間ずつと住み慣れた東京の土を離れて唯一人朝鮮に赴任するといふことは私の一家にとつて否私一人にとつて實にエポックメイキングなことであつた。然し乍ら朝鮮の土地は私にとつて決して未知の國ではなかつた。

大地震、續いて起るかの風評……それから生れた惨ましい出来事の數々、こうした事件が若い學生であつた私に朝鮮を知るの動機を作つた。それ迄の私は朝鮮に對しては一般の内地人と同様に無頓着であつた。教科書の一隅にポツポツ出でゐる事柄以外別に之といつた知識も、好奇心すらも持つてゐなかつた。

地震後少しく秩序の恢復した後で、私は信州の田舎へ勉強に行くといふ口實の下に壁の崩れ落ちて柱の傾き危く焼失を免れた家を飛び出して避難民の群に交つて信越線を迂回して見知らぬ西の國々を汽車に揺られてとうとう下關の棧橋迄來た。偶々東都遊學中であつて、親兄弟に安心を與ふべく且は一時的誤解から生れた不安を避け

て懐しかるべき半島の地に歸る朝鮮の學生に圍まれて私も遂に連絡船上の人となつてしまつた。

「おい、君も大丈夫だつたのか」と流暢な江戸ツ子辯で互ひに無事を喜び合ふ學生達を眺め、あの當時の恐ろしい不安の中を脱し得た彼等に對し私は唯濟まない様な氣がした。船の中で知り合つて一晩中氣の毒な彼等の境遇を涙の中に聞いた私は釜山に着いた時はもう既に大體の朝鮮人の人々の境遇を知り得、朝鮮の人々に深い同情を寄せてゐる私となつてゐた。慶州の古い藝術の香をかき、ついで京城迄來てかの中學生の一人を西大門外に訪ねてその案内で市街を一巡し釜山上陸後五日間にして半島を去つてから最後の學生生活の二年は私にとつて朝鮮は忘るべからざるものゝ一となつてゐた。話が朝鮮のことに觸れるや私は眞剣になつて語るのだつた。そして折ある毎にかの朝鮮の若い人々の心持を傳へて内地人の朝鮮に對する理解を促さしめんとした。

然し自分が學校を出るや直に官吏として朝鮮に來ようとは夢にも思はなかつた。不思議な運命の下に私が京城に赴任することに決つてからといふものは東京を離れて遠國に旅立つといふことにロマンティックめいた想像を加味して多少心に輝きを持つてゐた。

どうせ廿五年も住んで別段よいこともなかつた東京だ、之れから先も同じだらう。之が一轉機で自分の新生涯は朝鮮で始まるのだ位に思つてゐたところ赴任する日の一週間位前になるとそろ／＼斷末魔的に東京に惹きつけられて執着

が妙に増して來た。雑踏の巷！目映いばかりの灯！輝く若い女の群！友と飲むコーヒーの一杯にも東京の別れ難さがあつた。

朝鮮！朝鮮！自分はどう／＼朝鮮に行く身となつたのだ。往來の鮮魚の看板にもチラ／＼と目を惹かれ始めた。

朝鮮の人が國で別れて以來久々でその友に會はうと丁度新宿迄來たところ運悪く京王電車に轢かれて死んだといふ小さな新聞記事も叮嚀に讀んで妙に同情してみたりした。飴を賣り歩く朝鮮の子供にも幾らかの金を手にもたせて「叔父さんはこれからお前のお國の御厄介になるんだよ」と心の中でつぶやいてもみた。

出發する四五日前の夕刊に明日の會として小さく「朝鮮問題講演會」夕七時より……上野自治會館とあるのが目についた。急に行つてみる氣になつて翌日新調の背廣を着て出かけた。

花散つて間もなく、漸く春めき立つたばかりの上野の森の夕は人影稀に、青い瓦斯燈が若い葉をもつた梢を照してゐるのも心細かつた。自治會館の入口も會のあるのにも似合はずひつそりしてゐた。「最近朝鮮問題講演會」と大書され兩側に「朝鮮問題は問題中の大問題である、殊に近來幾多の大問題が朝鮮内外に爆發してゐる、而も誰一人かゝる問題中の大問題を問題にするものがない、茲に我等は憤然と起ち叫ぶ、來り聽け！最近朝鮮の大問題を！」とあり尙辯士の顔觸れが書かれてあつて、李某、布施某、朴某、K氏、山根女史、などがあつた。入口の學生から切





の形式的な點ばかりでなく人物そのものが實に立派である」と述べ、

その青年が最後に「私は朝鮮人ですがそれでもいいですか？」とき

く。すると主婦の顔色はガラリと變つて「一寸お待ち下さい、主人と相談して参りますから」といつて一旦内に入りさして出て来て「まことにお氣の毒ですが何ですか先程先約があつたんださうです」とか云つてことわられる。そして幾度か探し歩いて結局滅茶に高い室代を出して下宿しなければならぬ身となつた。こうした時、たま／＼山根氏が同居を依頼された。その時その人は矢張り最後に「私は朝鮮人ですがそれでもいいですか？」ときかれた。山根氏夫妻は立どころに答へた「宜しいですとも」そうして現在その青年は山根氏の處に同居してゐるのださうである。

之等の話を私は始めから終り迄心惹かれて熱心に聞いた。もし之を大勢の内地人の前で講演されたのであつたら！悲しい哉こゝでは内地人といつては極僅かなもの殆んど朝鮮の學生の集りの様なものである。

最後に布施氏の宮三面について  
の悉しい経過が述べられそれ以後  
半中止を受け、終ると學生達の飛  
入りの演説、然も前のK氏の演説  
を罵倒するもの多く或は涕涙し或  
は卓をたゝいて攻撃した。或者は  
内地人の自分等を蔑視するの態度  
殊に極つまらぬ低級の内地人迄に  
冷遇さるゝを悲しんだ。私は夢中  
になつて彼等の言を聞いて胸中涙  
なきを得なかつた。十一時頃閉會  
となり朝鮮の學生の中に交つて廣  
小路の方へ下りた。

一般内地人の朝鮮に對する考を  
正しくしてゆかなければならない  
少くとも之れから渡鮮する運命に  
ある自分にはこうする責任があ  
る。厭に緊張し過ぎてつひうつか  
り上野驛のガード下の溝に足を踏  
み外して新調の洋服を汚して痛い  
思ひをした。

その翌日の夕刻であつた。私の  
二十年近く住んだ場末の町を私が  
知己友人に別れの挨拶を述べに廻

# 秋 冬 雜 詠

## 岩 淵 山 與 水

船はなるゝほどに山の霧はれ  
野の秋風吹きもたるゝ樹のある  
秋風吹きそめし村の人々になれ  
月がさし込んで来る疊のおもちや  
鉢の菊をさかせて煙草賣つてゐる  
庭木さやかに秋の灯をともし  
道の稻胸まで立ち匂ふ  
泣かされて歸り来る掌草の實  
手を打ちて呼ぶ母屋までの草木もみづる  
何か手にさげて行く人の夕靄にかくれてしも  
あさ家のかけを走りて行く子  
植込みな枯れし中に立ち  
きものにつけて来た草の實の二三人が茶店  
の座をしめる  
道のべ家の庭からつまむ赤い唐がらし  
刈り込まれ庭木にぎやかに立ち  
久郎を送る  
秋夜の立ちならぶ人々のうしろに立ち  
生徒の一人は後れ行く霜朝の川水流れ

つてゐた時偶々汚い貧民長屋の路  
次に人が一杯たかつてゐる。何か  
と思つて私はその中に入つてみた。  
「朝鮮人をどうかしてしまへ  
つて？何をいふんだ、朝鮮人だ  
つて同じ人間だ、生意氣なこと  
をいふと承知しないぞ！」

一人の朝鮮の人らしい中年の男  
が長屋のかみさんを二三人相手に  
して怒鳴つてゐるところだつた。  
どうも様子を見ると長屋のかみさ  
んの蔭口がその男の耳に入つたも  
のらしい。私は一つ飛び出してか  
みさん連に意見を云つてやらうか  
と思つたがまあ／＼と思つてみて  
ゐる中どうやらけりがついてその  
男がスゴ／＼と横丁の奥へ引込ん  
で行つた。やれ／＼此處にも朝鮮  
問題がある。こう思つて私は苦々  
しい心持になり妙に沈んだ心持に  
なつて家に歸つた。自分の朝鮮赴  
任がいくらか意義ある様に思へた。

私が櫻と桃が一緒に咲き揃ひ未  
だ冷々とした空気に包まれてゐる京  
城の都に着いたのはそれから一週  
間ばかり後の朝のことであつた。

### 石油罐物語

石川利夫

○工藤武城さんの病院から、若  
い男が二人で、石油罐を盗んで逃  
げんとする。

○院長發見「オイ／＼、鳥渡待  
て」だん／＼訊いて見ると、某校  
の苦學生。そこで、ランプ二基と  
石油一罐とをめぐんで、「つまら  
ん眞似はよせよ、困つたらまた來  
い」。

○去年の暮、一人の鐵道の制服  
をつけた青年來訪。「先生、私は  
先年の……併しお蔭で學校は出ま  
して、今は斯うやつて、無事に暮  
してゐます。今日は先生に御安心  
して頂かうと存じまして……」黙  
つて聽いてゐた院長、ひとりでに  
涙が流れる。青年も泣く。看護婦  
も泣く……。まさに一場の悲喜劇  
であつたといふことだ。

# 不眠症

片岡喜三郎

不眠症同志が二人連れで、信川の温泉に行つた。尤も不眠症と云つても別段名醫の診察をうけた譯ではなく、血圧が高いとか頭が痛いとか神経衰弱とかいろいろものを連關させた自己診断の不眠症である。

温泉の第一夜は寢床が變つたし枕が硬い上に男同志の珍奇な寢物語りに夜は更けた。お互に先に眠つては不眠症に對して申譯がないのか眼が芽えて眠付かれない。とうとう夜が明けてしまつた。

次の晩はいかな不眠症でもきのふの徹夜の一件があるから話もそこ〜に眠に付いた。併し熟睡期間はどの位あつたらう。そこへら邊でバタ〜廊下を通る音も聞えたり、向ふの往來をブウ〜自動車が行き過ぎたのも知つてゐる。

殊に最も顯著な事實は不眠症を以て自任してゐるお隣の相棒は素晴らしい勢で軒を立て、熟睡してゐる様子である。この位眠れたら不眠症でもなからうと思ひながら、頗る非音楽的なグウグルー、グルーグーと云ふ響を聞きながらうつらうつらと眠るでもなく覺めるでもなく、夢現の境を辿つてゐる内また夜が明けてしまつた。

相棒はあれほど軒を鳴して眠つてゐたに拘らず、頗る睡眠不足そうな表情をして眼をこすりながら不眠症の全責任でも負はしたいやうにいさゝか不平らしい顔付である。

「おい、君位よく眠る奴はないね寝たかと思つたらもう眠つてゐる。不眠症なんてうそだ」

「そうですか、あなたこそよく眠てましたぞ。よくあんなに眠られると思ひました」

「馬鹿云へ、おれは眠られん。時々眼をさまして君の方を見ると君はいつもよく眠てゐる。腹が立つてね」

「僕はまた時々眼がさめて見るとあなたはいつもグウ〜軒をかいて眠つてゐる。そのグウ〜たるやだ」

「おれがそんなに軒をかいたかね、そいつはちつとは眠たのかも知れん。併し君は全くよく眠る男だ」

「僕はまた自分でそんなによく眠たやうに思ひませんな、第一今朝は頭が重くてボーツとしてゐる。睡眠不足の證據だ」

「いや、頭の方ならこつちだ、こつちは重いどころじやない、痛い。首筋から天邊にかけてツキ〜する、全く眠れんせいだよ」

二人はお互に眠つたことにしたくないらしい。そんなにお互に眠つてしまつたんでは自稱不眠症に對しても氣恥しい次第だし、温泉に來た目的もなくなるといふ氣がする。けれども一面よく眠つたと云はれると決して悪い氣持ちはしない。自分でこそ眠れないと感じてゐるがよそから見れば人並以上に眠れると云ふことになれば不眠症も廢業出來るわけである。そこでお互に「君はよく眠る」「いやあなたこそ」と睡眠のなすりつこをやりつゝも淡い快感を覺えるらし。

「じゃ君はおれが二度便所に起

きたのを知つてゐるかい」

「そいつは知りませんな」

「それ見ろ、君のよく眠るのは美ましいよ」

「そうなるよあなたのグウ〜もうらめしくなるね」

「何は兎もあれ、お互は不眠症だ不眠症だと云ひながらも人並かも知れんね」

「これが人並だとなると何も頭を痛がつたり、氣をくさしたりする必要はなくなるじやありませんか」

「そうかも知れん、何だか急に氣分が晴々として來たやうだ」

「随分現金ですね、時に七番のお客の軒を聞きましたか」

「あゝつは特別だね、あれには敵はない。一晚中同一の筆法でやらからすからね、ありや慥かに不眠症以前の民だ」

「不眠症の資格はゼロだがあの細君が亦實によく眠る女だね」

「君、よくそんなことを知つてゐるね、變だぜ」

「だつてあの子供がまた夜通しクスン〜やつて泣いてるが細君は一向眼をさました様子はな

いじやないか、氣樂なものさ」

「女はみんなあんなだ。女の不眠症つてないからね」

「そこで不眠症も大體形がついたから湯に行かう」

「うん」

二人は手拭をさげて風呂に行く風呂ではべん〜腹の比較研究が始まる。かうしたことが一週間ほど続いたが不眠症はいくらかよくなつたやうな氣がする。

年頭缺禮 井上 收

つて、率土の濱王臣にあらざるは

して、中世的封建諸侯が漸次に統



不眠症の至責任でも負はしたくやうにいさゝか不平らしい顔付である。

「じゃ君はおれが二度便所に起

年頭缺禮 井上 收

# 「クニ」といふ語の意味

佐藤七太郎

「クニ」といふ意味を表現するのには様々の語がある様である、我國では「クニ」といひ、漢字では國、邦、州などがあり、西洋ではポリテ、カントリ、ランド、ステート(エタ、スタートも同じ)等がある、そして其各々が多少違つた意味を持つて居る所に、時代の變遷の現はれて居る所が面白い。

古代ギリシヤでは、市府が一つの「クニ」であつた。従つてポリテの「クニ」の意味には、政治の意味もあつたのであるが、「クニ」といふ意味に土地と云ふ考が少なかつた様である。ギリシヤ全體としては國土の意味よりも民族の意味が、旺盛であつたのである。

ローマの古代も、市府を「クニ」と考へる思想であつたが、四方を征服するに及んで、其思想が變つた。ローマは「クニ」として他の「クニ」に對立するといふ考ではなくして、世界全一の政治圏とする考、即ち世界帝國の思想となつたのである。此考からローマの支配以外の地方を蠻民扱ひにした様である、此思想は支那の王道の「天下」といふ思想によく似てゐる。支那では古代に於て國境の考がなく、普天の下王土にあらざるはなしの考へで五服八域等其服屬關係の厚薄を表示して居つたのであるが、他の「クニ」と對立するといふ考はなかつたのである。人民に就いていふても、其全部が王臣であ

つて、率土の濱王臣にあらざるはなしと云ふて居る。

王化の及ばざる所、所謂化外の民で、東夷北狄南蠻西戎等と稱した、王化の及ぶ範圍は時代によりて廣狹があり厚薄があつても、決して支那の外に之に對立する「クニ」といふものがあるとは考へなかつたのである。天に二日なく地に二王なしといふのが王道の思想で隣國を認めると云ふのは後世の覇道の思想と考へたのである。

此點は寧ろ東西思想の類似と稱するよりも、ローマの世界帝國の思想は、歴山大王の東征及び其後のローマ領域の擴大其他の關係から、東西兩人種の接觸に伴ひ、東洋の思想が其時の時勢の必要から漸次西洋に影響した様に思はるゝ節が多いのである。

歐洲中世に於て西ローマ帝國の滅亡の後に、當時北方に居つた所謂蠻族が、大移動をやつて、一定の土地に土着して、各々「クニ」を建てる様になつてからも、其當時漸次發達しつゝあつたローマ法王の權力と結び付いて、世界統一の思想は相當に旺盛であつたが、一方に於て各民族間の勢力の争ひや、經濟上社會上の諸種の關係から自然に封建制度の發達を來たす様になつた。此時代に於ては「クニ」といふ意味に、土地といふ考が多分に含まれる様になつたのである。ランド、カントリー等土地、領地、田舎等を意味する語が「クニ」の意味に用ゐられたのは、社會の發達の上より見て、頗る自然的なる成行きといふべきであらう。

其後各地方「クニ」を建てた民族が、其各々の特質と周圍の事情とによつて、其行き方に趣の差異があるが、歐洲全體の風潮と

して、中世的封建諸侯が漸次に統一され、中央集權化されて、所謂近世的の民族國家をなすに至つたのである。之を夫の古代の市府の「クニ」なり、又其反對の傾向を辿つた所の世界帝國の思想なりに比較する時、そこに非常に大なる差異があることは何人も之を認むるに難くないであらう。

現今歐洲に存在する各國家は、其近世の民族的國家に遷る時期の前後、各民族の特性、統一の順序方法、民族國家として、純粹なりや否や(民族的に)等によつて同じく近世的といふても其間に種々の面白い特色が現はれて居る。殊に十八世紀以來天賦人權説や、自由平等思想の影響と、立憲制を採用した順序、其程度に於て、各民族に特有の色彩が頗る濃厚に現はれて居るのである。

私共は學校に於て國家の要素は主權、領土、人民の三つであつて、主權は無限最高圓滿の權力であると教べられた。然るに當時獨逸聯邦や北米合衆國のスタート又はステートの意味を了解するに頗る苦んだものである。

又此頃世界大戰の結果として主權の觀念が何うしても從來の論理では解し兼ねる多くの事例を見出すのである。或國家は財政權なり軍隊統率權なりが他の國の干渉を受けて自國の意の如くならない國がある。又自國の領土にあらすして委任統治によりて支配する土地人民がある。斯くの如きは私共の從來教へられた主權なり領土なりの觀念とはどうしても兩立し得ないものである。之れは要するに「事實」先づあつて之を説明するに「學理」を生ずるのであつて、事實は學問の如何に拘はらず、時の勢な

り必要なりに依つて生ずるものであるからであらう。言を換へて云へば、古き學說や觀念の如何に拘はらず世の現實は其從來の基礎の上に必要や勢によつて刻々に變化するからであると思はれる。特に學說方面に於ても一方に國家を全體社會最高文化社會とするの考へがあるかと思へば、他方には國家も一の目的團體であるから萬能ではない、其活動は成員の生存發達幸福の目的以外に出づべきものでないとする學說もある。

吾々は我が「クニ」を解するに當つて徒らに西洋なり支那なりの思想其儘を受け容るゝ必要はない。此建國の根本と其歴史とを研究宣明して、外國の思想なり制度なりが我れに當てはまる部分は大に採用すべきであるが、我國の特色にして到底外國の思想なり學問なりによつて説明し得ないものをも強いて外國の事例學說にあてはめて

曲解するが如きは大に慎むべきことであるとおもふ。吾々は吾々の立場を獨自の方によりて明かにすべきであると思ふ。

要するに「クニ」と云ふ語の現はす意味は、時代により所によりて差異があるのであるから、一方には時勢の大勢の赴く所を玩味して、之を適宜に取捨すべきであつて、外國の歴史なり、沿革なりを其儘我れに當てはむべきではないと思ふ。吾々は吾々の基礎の上に世界の大勢に順應すべき、思想なり、學問なりを建設すべきであると思ふ。

### 年頭缺禮

昭和二年一月

京城日日新聞社

森次郎

## 秋

橋の灯に垢かく舟や雁渡る

新水甕の匏吹かるゝ鶏頭かな

田絶壁の渚傳ひや蔦紅葉

如戸を練れば月を映して桶の水

水清津沖にて

冠帽峰の雪の白さよ今朝の秋

月に出てたまゝ門を閉しけり

松長旅の留守預りや菊いちぢり

汀次々に來る水汲女鶏頭花

女網戸外して又の暑さや鶏頭花

針箱のからび鬼灯鳴らしけり

### くさぐさ集

吉田莊一

○眞鍋覆審法院長といふと、華族で、男爵様だが、一向物に頓着せん先生で、例の七ツ下りの、古マントなどを一着の、ヒョイ／＼本町あたりの夜店を冷かすのである。

○この間も、管内巡察とあつて某地へ行くと、院長兼華族様といふので、官民多勢御出迎へ。すると、中の一人が奇聲を發して『ヒヤア、あれが男爵様か、あの人ならおら知るとるだべ、この間京城へ行つて、おら夜店を冷やかしてゐると、あの人も一所に冷かしてゐただべ、あの人ならおら知るとるだ』。

○東洋畫の名物三戸萬象君、歳末東萊へ出かける。依頼者が多く、大に筆を揮つたのはいゝが、飲む方も盛んに能率が上るので、いよ／＼歸城となると、差引ゼロ。東萊はどうでしたと訊くと『つまり三遍湯に入りましたよ』。

○中樞院の江原さん、國漢學の造詣が深く、一方からは仙風脱俗の士である。先年同郷の田中政友會總裁を訪ふと、總裁そわ／＼、江原さんのいふことが、一向耳に入らんやうである。江原さん一膝乗り出して『大丈夫かな、それで天下が取れるかな』。

○西本願寺清谷布教師の近什

元朝

元日や何はななくとも南無阿彌陀

歳暮

大正歲除十五年七千餘萬涙潸然。勿嗟昭和改元號新帝英明蓋世賢。

に感服せしめられた、秀吉をして

書き記しあるところに、君臣同和

# 葉隠から

## 木塚常三

當地本町二丁目郁文堂主人中村郁一氏は未だ年若くて僕が郷里の小學校長であつた時分、當時まで寫本として諸家に斷片的に藏されし葉隠の散逸せんことを憂ひ、東奔西走、苦心慘憺の結果、漸くにして其大部分を集め、編纂刊行され、又た約十年前、増補再版されし程、奇特な實際的の愛書家である。

元來、葉隠は封建時代、武士の心掛を説く修養書なれば其本を實見せざる間は、武振つた事のみ書き記るしある如くに想はるゝも、新渡戸稻造氏の叙文に「予は武士道の極は基督教と接近せりと信ず」とある如く、仲々に物の哀を知る文句多く、四民皆兵にて、舉國盡く武士とも爲れる今日、其職業の何たるを問はず、國民全體に此種の修業、極めて必要なる可しとは中村氏と同感である。

昨年十一月月中旬より僕は腸チブスに罹つて入院し十二月二十一日退院したが熱さめて後、中村氏が京城雜筆、十二月號に散々不満を並べ居られたる中に、葉隠の文句を引用し居たるを見て僕は「人は何時も元氣であらねばならぬ病氣などは氣一ツで直る」との様な葉隠の文句を聯想し、歸宅後、直に葉隠を引出して見た。

初めは病後の元氣を引立つる積りであつたが、讀み行く中に、段々と興味を増し、先づ第一に

豊太閤の人物評論

に感服せしめられた、秀吉をして今日の世に生れしめ、天下取たらず、人物評論記者たらしめたならば、必らずや、洛陽の紙價を高からしめたるならん、と思はしめた。

太閤秀吉公へ御伽の衆尋ねられけるは、當時天下を取り申す技量ある大名御座候かと、太閤答へ給ひて、天下を取る事は大氣、勇氣、智慧なければならず、此三つを兼たる大名は一人もなし又小者には二者兼ねたる者三人あり、上杉家の直江山城守、是は大氣、勇氣あれども智慧かけ毛利家の小早川隆景、是は大氣、智慧あれども勇氣かけ、龍造寺家の鍋島飛騨守、是は勇氣、智慧あれども大氣なし、大名の中には、是程の者見當らず。

とあり、石田三成と謀つて徳川を亡さんとした直江山城守に智慧缺ぐと誰か思はんや、碧蹄館の戦ひに大勇を現はした小早川隆景に誰か勇氣缺ぐと思はんや、然かも秀吉の見るところ、斯の如し、若し當時御伽の衆にて、其は何故にて候やと尋ねたらんには、凡人即ち今日にて言へば、多數讀者を肯背せしむるに足る、秀吉の評論は蓋し味へば味ふほど興味の盡きざるものありしならん。

大氣と云ふは大慈悲

の儀なり、廣く大なること限りなし、上古三國の聖衆を、今日まで崇め奉るも、慈悲の廣く至る所なり、何事も君父の爲め、又は諸人の爲め、子孫の爲めとす可し、是れ大慈悲なり、慈悲より出づる智勇が眞のもの也、と葉隠の他の部分に記しあり、豊太閤が、自分等の主人を大氣缺くと評されたればとて、何の遠慮もなく、明らかに

書き記しあるところに、君臣同和同攻の氣風現はれて、床かしく頼母しき程、限りなく見ゆ。斯く隔りなく、上下意志の疏通し居たるには、抑も故あり。

釋迦も孔子も楠も信玄も

終に龍造寺、鍋島に被官(奉公)かけられ候儀、之なく候得ば當家の風には叶ひ申さず候、龍造寺、鍋島は無雙の御家にて候、餘所の學問無用にて候と、葉隠の先輩は喝破し、自分等の主君に奉公專一の義を鼓吹し、兼ねて君は諫言を容れ、臣は諫言を奉るを以て、君臣の第一義と爲し、此義君臣の間に徹底し居たれば也。

日本國中、佛教盛に行はれ、徳川の時代となりて、又た盛に儒教を奨励したる結果、較もすれば、

釋迦と孔子を大將に

孟子を副將として日本に攻め來らば、之に對する決心如何、との愚問答さへ現はれたる當時に於て、釋迦も孔子も楠も信玄も當家に仕へたる事なければ、餘所の學問無用にて候と喝破したるは、近世の語を借りて言へば、所謂學問の獨立を嚴然と明白に宣言したるものにして、此語は爾來佐賀藩のモツト一と爲りしのみならず之を傳へ聞きたる日本全國の高僧知識、碩學鴻儒は其識見の高邁に敬服したりと云ふ。

後年、明治の御代と爲り、歐米文明心醉熱流行し、搗て加へて、條約改正促進の一手段として、夜會舞踏など盛んに行はれ、服裝のみか出来る事なら、眼色まで碧くしたいと、人種改良説さへ、論議せらるゝ時に當り

大隈侯が學問の獨立

を唱へ敢然早稻田大學の前身を創設されたるは、其淵源するところ



恐らく此語に基が、少なくも葉隠主義の下に生長したる大隈侯の心裡に、此語が、當時特に大なる刺戟を與へたるに相違なからん。雜筆らしくもなき蕪文を此上、長く書き綴りては誠に恐入ります。が、僕が此文を草するに至りたる動機は尙ほ他に二三あり。

貴紙本年正月號土居寛申氏の「加藤清正の眞劍味」の中に一度水を落せば肥後の平野は畑と爲り、一度水を注げば水田と爲る、水利の便、極まる状態を見ては、肥後米の聲價高き所以決して偶然でない事が判る。とあるよりして、葉隠に在る成富兵庫を聯想した。佐賀先哲遺墨集に據れば

成富兵庫頭茂安は鍋島直茂の參謀にして征韓に従軍し、又た水利及び築城防備の術に精通し、現時佐賀の水利は主として兵庫の遺業なり、又た肥後の加藤清正に招かれて、同國の築城水利をも企劃せり、寛永十一年歿す。齡七十五、明治四十四年、大演習の際、從四位を贈らる。

とあり、成富兵庫が水利の術に長じたるは、從來の經驗にも依ることながら、征韓の際に得たる知識も亦た多かる可し、朝鮮の現在水利事業を見るに、多くは狀堤式にして、河川を大仕掛けに利用したる工事なきが如し、然るに成富兵庫の水利工事は其分水點に於て象の鼻、天狗の鼻と名付くる堅固なる石垣工事を起し、如何なる大雨にも壞はれず、又た干雨に拘らず一定の水量を佐賀市内及び蒙利區域に送る仕掛と爲しあり、土居氏の文に「明治の工學博士が洛中某寺の柱にある風穴を塞いで大事の柱を白蟻に喰はして仕舞つた話もある」とあるが、成富兵庫も後人の或は無用の出遮張り口を利かん事を慮ばかり、象の鼻の所の數枚下の大石に態々「此石動かす可らず」と刻みて置いた、案の丈、小利口なる明治の工學博士が此の象の鼻を改築せんとした、刻文を見たれども構はず、其大石を動かして、自分の設計を施したが改善でなくて、大改悪と爲つた、市民と農民との嘲笑、憤怒は激しくなつた、博士殿は面目を失ひ、縣は巨費を投じて、復舊工事を施すの不得已に至つた。

奉口人と奉公人  
葉隠を讀んで今日良き感じのするのは同書には武士を指して大概殆ど奉公人と呼んで居る事であるツイ最近までホウコウ人と云へば下男、下女、バンノウ、小僧の意味に用ひられて居たが、近年に至つては社會奉仕と云ふ言葉が流行し、上は總理大臣より、下は小商店、一個人に至るまで、喜んで此言葉を用ゆる様になつた、奉口と奉公とは發音全く同じく、奉仕も亦た同じ意味だ、奉公の苦は、近來の總理大臣が在職中に病死したり、内務大臣が病氣したりする事にも、察せらるゝが、午前九時出勤、午後四時退けと云ふ様な普通官吏や會社、銀行員と違ひ、特に此嚴寒に、夜遅く迄、一般の商店又は個人の家で勤むる奉口人の苦は、察するに餘りある。葉隠は斯る人々の爲めに、懇切に其心得を説いて居る。

奉公は今日一日するとさへ思へば、如何様な事にもせらるゝなり、一日の仕事ならば、如何なる事も堪へ忍ぶべし、翌日も亦、一日と思ひ、其翌日も亦一日と思ひ、同様に、常に、一

日一日と心得べし、斯れば、奉公を全くする事を得るもの也。と僕が今、此語を引用するは、若かりし時、聖書の馬太傳第六章に野の百合花は如何にして長つかを思へソロモンの榮華の極みの時にだも其装ひ此花の一つに及ざりま(中略)爾曹先づ神の國と其義しきを求めよ、然れば此等のものは、皆な爾曹に與へらるべし、此故に明日の事を憂ひ慮ふ勿れ、明日は明日の事を思ひわづらへ、一日の苦勞は一日に足れり。

右の其日暮しで可なりと云ふ様な言葉を見て、基督もツマラヌ事と言ふと思ひ詰めた疑が、今日まで解けざりしが、葉隠を讀み居る中に、迷雲一時に晴れた心持するに至つた。(昭和二年正月三日記)

人のうわさ

吉田莊一

○總督府醫院内の粹人といふと、やつぱり志賀院長と、高楠婦人科長とが雙璧だといふ評がある。

○院長の端唄、都々乙と來ると、實に濫いもんだ。何處でドウして修業したのかと、誰でも驚く。

○高楠先生と來ると、コワ色がうまい。澤正、梅幸、菊五郎、口を衝いて出る。しかも迫眞の妙！これが有名な高楠順次郎(倫理學の泰斗)先生の令息と、どうして思へやう。矛盾！矛盾！

○鐵道圖書館の林靖一さん、この寒いのに、ズボンに夏服だ。どうしたんですと訊くと、『エライ所を見られたね、何分この正月は暑いので』。

をする數日前の事で城内は何となく緊張氣分である、奉票慘落後ま

と百年以上の壽命がある譯だ、六百萬噸の半分は滿洲地内及び大

寺の柱にある風穴を塞いで大事の柱を白蟻に喰はして仕舞つた話も

も亦、一日と思ひ、其翌日も亦一日と思ひ、同様に、常に、一

所を見られたね、何分この正月は暑いので。

# 南満洲

## 素通りの記

井上賢太郎

一度鴨綠江を渡つて安奉線に這入ると何よりも先きに鐵道線路が劃然と整備して居るのが直ぐに眼に着く、線路の良く固まつて居るのは甲羅を経て居るせいであらうが、築堤の芝が宛然鉄でも入れたやうに美しい、割バラスの粒の揃つたのが一箇宛積み重ねた様に一粒だも忽諸にしない盛り方は流石に感服の外はない、驛舎は極寒向きと國際關係とで金の掛かつて居る事は鮮鐵の比でないやうだ、鐵橋の袂に荻舎と稱する砲臺様のコンクリート小屋が設備してあるのは破壊防禦の萬一に備へる掩護装置であるとは動亂常なき大國に於ける鐵道施設としては全く厄介な事だが併し已むを得ない事と思はれる、改收札は列車内で済まして仕舞つて驛の方は出入御勝手となつて居るのは時間と人物との經濟鐵道側及び旅客共に便利な事である。

本溪湖を過ぎる頃から段々と山が見へなくなつて萬目荒涼、一望曠濶、目の届く限りの大平野が開展される、そして粟と高粱の刈跡には放飼の豚群が淋しく餌をあさつて居る、是れに冬は麥夏は稻が育つものなら滿洲の富源も増大し日本の人口問題や食糧問題も自ら解決するのではないだらうかと思はれる。

奉天に着いたのは客年十一月九日の午後で恰も張上將軍が北京入

をする數日前の事で城内は何となく緊張気分である、奉票慘落後まだ間のない時だから何なく物騒な感じがした。

城内に吉順孫房と云つて洋館四階建のデパートメントストアを張つて居る奉天の三越がある、素見に一寸覗いて見た、緞子一匹の商賣に番頭が五六人も寄りたかつて大騒ぎをする、其他のデパートにも大勢の店員がゴロ／＼して居つて客の數よりも其方が多い位いだあれでも商賣になるかと思はれる併しそれが所謂大國式だらうと肯けば不思議はない、歸りかけに出口迄で送り出して有難うと御愛嬌を蒔く處は流石に如才がない。

奉天の郊外一里計り距れたところに所謂清朝二代の祖太宗文皇帝を祀る北陵がある、雨中自働車を驅つて拜觀の榮を得た、寢殿の屋根瓦には金を交ぜてあると云ふが全く見るも眩ゆき金色燦たる光を放つて居る、名古屋の城は銃鉾だけが金だがこれはそれよりもうわ手だ。寢殿は廿餘丈の牆壁を以て圍まれ外苑は丁々空を摩する數丈の老松生繁り正門より思隆門に向ふ石疊の兩側には苔むした石造の人像や動物が立並んで居て二百餘年の昔を偲ばせる、中にも皇帝が在りし世の愛馬に型りし一對の石馬が目に着く、此處は三十七八年の役我軍が夜襲を試み林中呷尺を辨せず敵味方入亂れて一騎打の混戦となり我聯隊長は終に捕虜となつた戦跡だと聞いた。

十三日の朝撫順炭礦を訪れた、礦長は會て兼二浦の三菱製鐵所長であつた理事梅野實氏である、舊坑の埋藏豫想炭量は十億噸で一日の採炭量は二萬噸、爰一二年間の採炭量は六百萬噸であるからザツ

と百年以上の壽命がある譯だ、六百萬噸の中半分は滿洲地内及び大連港のバンカーに消費され残る三百萬噸が内地に出て行くのであるまだ幾程でも掘れるがそう出されては内地炭が嚇されると云ふから無已採炭を制限して居るのだと梅野理事は不満らしい氣焔を吐かれた、第一露天堀は現に二百五十尺下がつて居て一日七千噸を採掘して居る、今後三十年間に一億二千萬噸を出す、そして三十年後には七百五十尺迄下がると云ふことである、そして現在の炭礦事務所や社宅の下は全部炭層になつて居るから遠からず之等の建物は取毀はされる筈である、大山堅坑は一千二百三十四呎下がつて居る、一日の出炭量が八千噸だと云ふから素晴らしい、モンド瓦斯を造つて發電燃料に供給し副産物としてタール、硫安等を製出して居る、其外新なる試みとしてオキルセールの設備がある、之れは炭層に挟まつて居る頁岩から低濕乾に依つて重油を採る方法である、現在は一、五十噸の頁岩を處理して居るが成績良好であるので來年からは一日百噸を處理する計畫だと云ふ。何處迄も化學の力を應用して居る處は流石に滿鐵だ、頁岩の埋藏量は五百萬噸で五パーセントの重油を得ると云ふ、海軍とは既に約束が出来て居ると云ふから此試みが成功すれば外國に仰ぐ必要はないと云ふ話である。

大連旅順も素通りしたが鐵道、諸建設物、旅順要塞及び市街計畫等は實に偉大なもので露國が極東に進出せんとした、永遠の大計畫があり／＼と讀まれる、幾萬の生靈を犠牲にして此大計畫を我有にした帝國陸海軍の威力を感謝せず

には居られない。  
鞍山店の製鐵所も車中から瞥見したが壯大なものだ、湯岡子温泉は商賣上の必要から一寸訪れて見

たが、之れは五十萬圓の株式會社で其半分は滿鐵が株主だと云ふ、何と云つても南滿洲は滿鐵王國の天下たる事を痛感させる。

# 何を以て

## 第一とする

丹羽清次郎

古往今來、洋の東西、人の黑白を問はずして根本的國是とし基礎的觀念として取るべきものは、倫理的思念である。人として尊ぶべく、生き甲斐ある所以のものは其の道念の發展と其の發展に依れる活動である。

特に總ての點に於て新生命を開き、新時代を造るべき、朝鮮にあり、其の同胞を指導して内地人と共に大日本なる大國家を經營し、競争の激甚なる世界的舞臺に立たしめんとするには、先づ人として道を行ひ、民としての教へに習はしめねばならぬ。此立場よりする時は、朝鮮に於て最大急務とせらるゝ、水利、殖産、産米事業も第二の事業であつて、最急最要のもののは鮮人の教養である。然も此の教育は決して知的のものでなく、道義信念の教養であらねばならぬかく云はば或は之れは迂遠にして決して火急なる政治經濟的必要に應ずる能はざるものと考ふる人々もあらんが、決して然らざるものである。我等は之を其の最も著しき證據をデンマークに於て見る。

デンマークが四五十年以來めき

くとして國民として擡頭し、現今の如き産業に於て教育に於てうらやむべき發展をなしつつあるは彼等が興國の傑士グロントウイツの啓發指導に依り、其の當時の疲弊、困迫の憐むべき情態に直面しながらも、尙神を畏れ人を愛することを第一要事とし、此の基礎の上に立つて知識を擴め、勤勉に忠直に大に産業に勵み勉めたのである。そうして僅かに數十年にして最も信用すべく、最も純良なる農業物を製造し、輸出し得たのである。現今國民養成の上で大勢力ある國民高等學校は實に斯の如き方針に依つて建てられ又進みつつある。之れを以てすれば吾人は實物的に國家個人教育の大方針としては何處迄も第一のもの、敬神愛國、正義仁愛を第一として進んで行かねばならぬ。特に朝鮮に於て然りとす。

### ある日の歌

廣江澤次郎

諒闇の元旦

しめやかに諒闇の春迎へけり

神去りまし、葉山思ひつ

宮様を敬念

異國より歸る路急ぐ日の御子を

思ひ參らせ袖絞りけり

赤子の衷情

人知れず目に珠の露宿しけり

大内山を偲びまつりて

### 圍碁聞取書

吉田莊一

○小杉謹八氏は、やつぱり熱心に碁の稽古をしてゐる。おそはつた手法をシツカリと守り、ぢりぢりと羽翼をひろげて行くところ、與し易からざる敵である。

○今のところ、小杉氏を壓倒する實力を有つてゐるのは、やはり殖銀の有賀さん、ちつとも稽古したものでないが、天稟の讀破力と不撓の闘氣で、何んでもカンでも敵を壓伏する。

○京電の中屋さん、商銀の和田さん、民間では中堅どころのウチ手である。

○韓相龍さんは、強くない。併し少し熱心にやると、三四目はスグ上るだらう。

○目下赤岩とかいふ三段の師匠が來て、紳縉におしへてゐる。京城の先生達とは、ダイブ實力が違ふらしい。

○橋本豊太郎氏も、中屋、和田兩氏位には行くらしい。以前、習つた碁である。氏はその碁の力で目下將棋をやつてゐる。辻六段が師範である。そしてモウ大分研きがかゝつて來た。

○天日氏も碁をやる、末森氏もやる、醫界にもへボ碁組は太分多い。併し大粒な人は、ぞん外少い。

○相變らず碁の盛んなのは、京城俱樂部である。暖かい日曜などと來ると、二三十名は吃度あつまる。概して司法官側の人は、成績が良いといふ噂だ。イヤよく考へるといふ評判だ。

○教育家側では、元町の片岡喜三郎氏など、強い方だ。新聞社では京日が盛んにやつてゐる。

りよろしくない、といふやうな注意を受つたのであつたが、冒工執

◎私もさうは思ふ。しかし何と



# 病児の枕頭 に黙座して

平野俊郎

◎近頃京城には、誤診問題が流行して、患者がお医者さんに、損害賠償の訴訟を起した、などといふ新聞記事を時々散見するやうである。お医者さんも神様でない以上、タマには誤診することもあるだらうから、さういふお医者さんに廻り合はしたのが、不運だと諦めた方が、何だか世間體もいゝやうに思はれる。

◎しかしながら、さて翻つて、誤診された方の立場になつて見ると、正當の手當さへしてゐれば、かうも脆い死方はしなかつたらうと思ふと、その當座は、世の中さへ恨みたいのが人情なだけ、お医者さんを、仇敵か何んぞのやうに思ひ込むのも無理はないことだらう。

◎さういへば、私もスズヂのことに、お医者さんの誤診——といふよりも輕率な判断で、愛子を一入無くするところだつた、とその時のイキサツを思ひ出すと、實際身内がゾク／＼するやうな氣持ちがする。

◎私の長男義郎が、昨年の秋、猖紅熱に冒されたときだつた。外に子供が大勢なので、之れは大變だと思ふと、寸時も家に置かず、スグ市内の某病院に入院したのであつた。

◎入院後、二三の人達から、此の病院は、よろしくない。ウンとボヤれる上に、病人のためにも餘

りよろしくない、といふやうな注意を受けたのであつたが、猖紅熱と診断されたときが、丁度日曜だつたので、總督府病院に、入院する手續きも出來ず、己むを得ず、其病院に入院したといふ事情であつた。しかし、人からさういふ注意を受けたからといつて、直ちに病院を變へる譯にも行かなくて心ならずもそのままにしたのであつた。

◎スルと二三日して病室のドアを軽く開けるものがあるので、フト入口の方を見ると、青い顔をした私の長女が起つてゐるではないか。私は驚いて飛んで出た。そして、こんな隔離室などにどうして來たんだ、といふと、今日急に三十九度位の熱が出たのだといふ。

◎私はモウ打ちのめされたやうな氣がした。又たやられたかな、と思ふと、眼の先が眞ッ暗になつて、倒れさうだつた。スグ診察室へ連れて行つて、院長に診て貰ふと、テツキリ感染したんだといふ兎も角、長男と同室に入院させるやうな準備をするからといふことであつた。

◎しかし、虫が知らずとでもいふのか、眞正患者である長男と一しよの室に入れて、二十六時間後の發疹症候を待つといふことが、私にはどうも不安に思はれてならなかつた。長女も、猖紅熱ではないやうに思ふ、としきりに私に訴へた。

◎だが院長は、既に眞正患者が出た後だから、確定すべき症候があらうと無からうと、兎も角、入院させて、後の子供達のために警戒をすることが順序だといふことであつた。

◎私もさうは思ふ。しかし何といふことなしに、長女の發熱が、猖紅熱ではない、といふ氣がしてどうしても院長の言葉に服することが出來なかつた。

◎そこで私は、斷乎としていつた。二十六時間すれば、眞正であるかどうかといふことが、的確に判然するものならば、家に連れて歸つて、他の子供と隔離し、その結果を待ちませう——。

◎そして連れ歸つたのであつたところがどうであらう。翌日の午前中には、モウ外に出て、他家の子供たちと、遊び廻つて居るではないか。安心はしたものの、若し院長の指圖どほり、長男と同じ室にでも入院させてゐたら、今頃はどうなつてゐるか分らない、と思ふと、實際死んだ子供が生き返つたやうな、喜びを感じずにはゐられなかつた。

◎幸にして長男も、其後経過がよく、遂に全快することが出來たので、今は平氣で座談の一話題にも出來るのであるが、アノ時は、もう私自身が、生きた氣持はしなかつたのであつた。

◎それは兎も角、病中受持ちの先生(日の出校)が、毎日の如く朝に夕に尋ねて呉れて、経過を氣遣つて呉られたのには何とも云へぬ嬉しさがコミ上げて、常に心が熱くなるのであつた。それに向ひ合せの關係から、平素特別に可愛がつて貰つてゐる土生先生は、發病當時の如き涙を浮べて心配して下すつた。それもこれも、師弟の温い情愛からだと思ふと、私はその有難さを、泌々と感ぜずには居られなかつた。

◎それから長男は、漸やく登校し得るやうになつた。スルと腕白

盛りの頭はない友達共が、心から喜んで呉れて何くれと心切に勞はつてくれた模様で、學校から歸つて其様を目をしばたきながら

話す長男の顔を見てみると、私も押へ難い感謝の涙に、かきくれたのであつた。私の長男は日の出校の四年生だ。

# 鮮脱上人

小水眞二

「らしく」といふことは、人々の恒に、口にする言葉だが、又可成り言ひ古した言葉のようである、そうして此言葉は、極めて簡單だが、さて奥行となると仲々むづかしい。

殊に現代のように見榮坊の多い宣傳づきな人の住む社會では、一層此「らしく」の生活が出来にくいのである。然し乍らこの「らしく」の生活が影をかくし、「らしくない」生活が増上してくればくる程この人の世の生活が不自然となつてくるのである。

笠置の山のありし日の鮮脱上人の生活は全くこの「らしく」の生活の體験者であつたと思ふ。鮮脱上人は嗜好物としては、野菜の中でも大根蕪を大變に好まれたようである。そこで上人の御膳にはいつも大根や蕪が上つてゐたのである。所が上人は膳に向はるる毎に、あゝ大根様はをいしい、蕪様が有難い、といつて御飯を頂戴せらるるのであつた。

上人の感謝生活を知らぬものはたから見てゐると、氣でもちがつてゐられるのではなからうかとさへ思はれたのも、無理のないことである。

或時のこと御側で給仕をしてゐ

た小僧がこのことを聞いて怪しいと思つたのである。

「御師匠、ものは丁寧にいふにこしたことはありませんまいが大根や蕪に様をつけるのはおかしいでは御座いませんか」

其時上人は感激に充ちた眼に涙を湛えながら聲やはらかに、

「おまへはまだ小供だから、むづかしいことを云つてもわかるまいが、様といふことは、「それ相應」「らしく」といふことである、御主人様といへば御主人らしく、奥様といへば奥様らしくするといふことじや、おまへも見る通り、大根や蕪を見ても、何れも、大根は大根らしく、蕪は蕪らしく、其處に何等の不平もなく、極く素直に、別に人參の赤きを羨やまず、さりとして午

莠の黒きを欲せず自分の天分を守つて、羨らるるのみならず其土人に喰はれてそれでも何の不平等もいつてゐない、然るにこの俺は出家でありながら出家の生活が出来ないのだ、全く大根蕪にも劣つた奴だ……」

この小話の中に上人の尊い人格の光が活躍してゐる、吾々が共に

住んでゐる社會の人々が、事々物々に感謝の心をもち、各人相互の胸に「らしく」の自覺が芽生えてくれれば、現在住んでゐるこの社會はもつと明く、もつと淨く、もつと住み心地よいものになると思ふ。

## 人さま

吉田莊一

○寄稿家の〇さん、正月二日の朝早く、今ま三中井の福箱を買つて戻るところだ、一ツ此處で開けて見やうと、内容點檢に及ぶ。内からサラサ蒲團地裏表、紋ちりめん六尺、ネル切れ六尺、木綿一反、繻縵襪一切れ、子供の胸あて一ツ〇さんスツカリ顔の造作をくづして「ウーム、これで五圓とは安い、おまけに嬢の腰巻まで付いてらあ」。

○南大門通五の菓子商岡村悅藏さん、京城同業間での名物男で、義太がうまい。人の二三人寄るとスグ文句をつけて一席やるといふ癖がある。友人の一人聴き終つて「あ、くたびれた、友達につき合といふ奴も、中々骨だテ」以來岡村さん、一切義太を口にせず、どうしたと聞かれるれば「僕の人生觀も、頃に一變してね」。

○京畿道の安藤警察部長、この頃ヒドク碁に擬つてゐる。「ウーム、この手だな」と、ポーンと一ツ卓を叩くから、何事ならんと覗いて見ると、先生碁經を讀んでゐる。それにも増して熱の高いのは、白石保安課長、日曜といふと、炬燵にあたつて、盤をふとんの上に安置し、碁經と首ツ引きで「ナルホド、これは趣味がある、フーム、この手で一ツ關口君をやつてやるかな、フーム、これは奇想天外！碁經は實に愉快ぢやのう」。

## 年頭缺禮

昭和二年正月

京城南大門外

野田源五郎

これらの類がこゝにいふ『忘れられた日鮮關係』の一つなのであ

或時のこと御側で給仕をしてゐる。

野田源五郎

この手で一ツ關口君をやつてやるかな、フーム、これは奇想天外！基經は實に愉快ぢやのう。

# 忘れられた日鮮關係

中村 榮 孝

○ 京城雜筆社から初めて尋ねて來られたのは、京城へ來て間もない去年の七月であつたと思ふ。どこかの宴會でうはさが出たからとかいふことであつた。とにかく雜誌を讀むことだけを約束してお別れした。その後毎月讀者であればいいものど心得てゐると、何か書かぬかといふ勧誘、ついでは督促となり、とうとう年末になつて膝詰談判となつた。

一體雜誌の寄稿といふことに對しては凡そ三つの氣分がある。一には絶対に書きたくないもの、二にはどうでもいゝもの、三には書きたいものだ。また雜誌社の方からしても、人によつて絶対書いて貰ひたくないのと、どうでもいゝのと、書いて貰ひたいのとあるだらう。しかし相手は同じでも、或る時期或る事柄を境目にして色々遷りかはりのあるのは勿論だ。この間を奔走する記者諸君は媒酌人のやうなもので、さぞ骨の折れることだらうと御同情にたへない。

○ この頃の自分の氣分はどうでもいゝ方だ。しかしどちらかといへば或る時期までは何も書きたくない。ところが雜誌に寄稿した経験などはるくはないので、戀らしい戀を知らなかつた處女が縁談を持ちかけられたやうに、有耶無耶の内承諾してしまつた。これは隨

分大膽なことだつた。隨筆で而も短篇を主義にする「雜筆」に、われ／＼のやうなものを書いては迷惑にならないだらうか。警句の一つもと思つても、根つから浮ばない平生は中々へ理窟を捏ねる頭だがこんな時にはさつぱり役に立たない、約束の日もせまつたので、仕方なく自分の畠の所感でお目見えの御挨拶に代へる事にする。

○ 朝鮮から支那へ奉る進貢品としても重要な地位を占めてゐて、従つて朝鮮工藝品として一つの特色を持つてゐた螺鈿の製法が日本から傳はつたことや、内地みやげの一つとして珍重されたりする楊扇が、その本を尋ねて見れば日本から傳はつてそのために昔の圓扇が殆んど廢れてしまつたことや、煙草が日本から傳はつて僅かな年數で國民的の習慣に喫煙が加はつたものであることや、列擧して見ると、今では極く普通になつてゐる朝鮮の器物や習慣などの中に内地オリヂン内地傳來のものが少なくない。そしてそのオリヂンや傳來は忘れられたものが多い。

これと同じやうなことが内地の方にも決して少くないだらう。手近い例でいへば唐津焼、伊萬里焼などといつて一寸朝鮮のことなどは聯想し相もない焼物が、その始め朝鮮陶土、朝鮮陶工等によつて生み出されたのが多い。

これらの類がこゝにいふ「忘れられた日鮮關係」の一つなのである。そしてこれらは過去から現在へ連続してゐて現實的に興味を起すものである。而もそれらは皆文化的方面の關係なのである。文化的關係がいかに根強くいかに永續的なまたいかになたらかな融合を齎すものであるかを思へば愈々面白味が深くなる。

○ 近頃舊對馬藩主宗伯爵家の好意と總督府の盡力とによつて、從來深く秘められてゐた對州藩の日鮮關係史料が世に出されることになつた。これはわれ／＼歴史家のこの上ない多幸であつて最も欣快に堪へない所なのである。これによつて先に朝鮮側の記録や史籍などの史料によつて片頼りに研究されてゐた歴史が、或は確證を得ることになつたり補正されたりすることが少くないだらうと思ふ。其一例を擧げて見るならば、「受職人」といふものゝ事もこの新しい史料によつて明かにされた所が少くない。

この「受職人」といふのは、對馬と朝鮮との間に締結された條約の中にも見えてゐるが、從來明瞭な概念をこれについて持つてゐる人は恐らくあるまい。室町時代の頃は、朝鮮の漂流民や倭寇に捕へられて來た朝鮮人をその本國まで護送した謝禮として朝鮮から官職を貰ひ受け、毎年朝鮮へ入朝して多分の御下賜品（米や大豆その他麻布綿布などの）を頂戴しにやつて來る便宜を有してゐた日本人をいふのである。いづれも九州の北海岸の諸地方や五島壹岐對馬などの島々の住民が多かつた。そして秀吉の朝鮮征伐の頃になると、漂流



民護送者の外に、朝鮮側のために間諜をやつて功を立てた者や、捕獲を送り還した者などが含まれて来た。而もこの頃は主として對馬人だけだつたやうだ。

宗家の記録の中には「受職人」の授けられた職牒(今でいへば辭令)の現物をはじめ、「受職人」の名前を列記した名簿のやうなものさへある。大概司猛、司直、司果などといふやうな軍職が與へられ、中には堂上の高官もあつた。

これらは近來李朝實録によつて略々明かにされてゐるが、まだ徹底した解釋を下し難かつたし、また特に注意も拂はれなかつたのである。それは江戸時代の中頃以來「受職人」の關係は絶えてしまつた爲めその事が忘れられてしまつてゐたからである。

この類がこゝにいふ「忘れられた日鮮關係」の一つである。これは事實はたゞ過去にあるだけで、現在には少しも交渉のないことではあるが、昔の密接な政治的關係を思ふと中々興味の深いことだ。とかくこのやうな政治的方面の關係は、そのことが絶えると全く忘れられ勝であるが、これを頭の中に再現して見たり、また現代の事情と較べて見たりすることは面白いことだらう。

その他所謂「忘れられた日鮮關係」は、經濟的方面にも中々多い釜山の「倭館」といふと、今では大して興味を起す人もないが、江戸時代に「倭館」を中心にして行はれてゐた日鮮貿易を思ひかへして見れば、經濟史上の一大問題になるのである。

また今對馬といふと、左程のところとも思はないが、その財政は

# 映心發語

石井龍史

鮮人部落

禮讓のこゝろとほしき鮮人を睨みつけしがふとさびしかり  
日鮮の融和を説きてひじりめくさかしら人を我が忌みにけり  
敵對をするならしると捨て鉢に睨み返へして見るもかなしや  
さながらに敵地に入りし心地すと齋藤總督に吾が言はむかも  
むらがるる白衣の中に我れ一人日本の着物着てさびしかも

新年

幼なき日我がよろこびしこゝろもち吾子とくらべて世のすゝ  
みたる  
なごましく我が箸取れば妻もまた面晴れやかに飯盛りにつけり  
新年のこゝろなごましく唯々として兒が言ふまゝに馬となり  
たり

一種獨特で、江戸時代封建制の下にあつて變態的なものであつた。それは朝鮮との貿易關係を考へて初めて納得出来るものなのだ。しかし今では全く忘れられた貌である。

これらの「忘れられた日鮮關係」は、たゞ歴史家の興味にばかり委ねておくべきものではなからう。歴史は繰返すといふ、強ち繰返さぬまでも類同は認めねばならない現代を理解し、將來を卜しようとする大志を抱くのも亦これに注意を忘れてはならない。歴史家の研究もこれを念頭においてまた別途の興趣をそゝられ、且その使命の一面を果すことにもなるだらう。(昭和二年一月)

## 壁に靠れて

山口のぼる

○石井龍史さんといふと、京城では相當知られた詩人である。  
○市山さんの短歌雜誌などでは氏は花形の一人である。

○警察官だといふのに、鳥渡面喰ひ乍ら、氏を東大門署に訪ねると「誰にお聞きでした、それはどうも……」鄭尊な、おとなしい人である。

○すつかり感心してしまつた、氏は留置場の冷たい壁に凭れながら、しづかに詩を思ひ、歌を思ふ人である。近詠に

捕 縄

ポケットの捕縄まさぐり沁々と  
かなしきわざを我がするものか  
紙 薦

高々と空に伸び切る紙薦のかけ  
ま日の昃ればか黒くは見ゆ

彼の平安朝に於ける大學者であつた三善清行の朝廷に對する勅文

も推古の朝に匹敵するものとすれども、大正の甲戌年正月に書つた

また今對馬といふと、左程のこと  
ころとも思はないが、その財政は

高々と空に伸び切る紙鳶のかけ  
ま日の長ればか黒くは見ゆ

## 識緯説から見た

# 丁卯の年

岩本善文

今年は一の卯の歳である。

歴史は循環するものであるとは古から言ひ習はされ、殊に秦漢以後陰に陽に支那思想界の潜勢力であつたと見做される識緯の説では千支の循環には極めて微細な注意を拂ひ、辛酉革命、甲子革命などと云つて、此の歳には吃度何か國家に重大事件があるとして居る、そして千支の一循六十年を一元とし、二六十二元、三七二十一元等が歴史の大なる區切りで、殊に三十一元は歴史上、國家の存亡興廢が此の期間に於て總決算が出來上つて了ふと力説して居る、今の科學思想から考へると、それは只『迷信』の一語に葬り去らるべき、荒唐無稽な説のやうであるが、財界の景氣不景氣が十年にして一循するといふ、恐慌周律に關し、經濟學者は未だに正確な判斷を下し得ない今日、識緯の年廻り説にも、何かの神秘が包藏されて居るやうな氣がする。

勿論上代に於て人智の極致が集合せられたと信じた支那文明の所産物である此識緯の説は、今日我がが相對性原理や其他の新學說に好奇の眼を向けるやうな、批判的な態度でなく、もし信賴的な、少し眞面目な態度で古の人は之を迎へたであらう、寧ろ其當時に在つては我々が今日化學の實驗に接し、天體の運行を信するやうにそれに全幅の信據を置いたかも知れない。

彼の平安朝に於ける大學者であつた三善清行の朝廷に對する勘文にも、此識緯の説は絶對の原理であるかのやうに書かれて居る、即ち此勘文は神武天皇即位の辛酉から二十六回目の辛酉の前年に上申せられ、翌年の辛酉には菅原道眞筑紫に左遷せられ、年號を延喜と改元せられた、歷史上可成重大な事件が、必然的か將た人爲的か分らないが、兎に角此辛酉の年に勃發されたのである。

此の辛酉革命、甲子革命の説は古の歴史家の殆んど金科玉條としたところで、我神武天皇の即位紀元も推古天皇の辛酉から、二十一元千二百六十年を逆推したものであると見られ、又朝鮮の新羅の朴赫居世の即位も甲子の歳に當り、之れは新羅が百濟を亡ぼして半島統一の基を拓いた、西曆六百六十四年の甲子から十二元七百二十年を逆算したものである、又最も不可思議なのは、耶蘇紀元元年が神武天皇の即位と同じ、辛酉の年である、只六百六十年十一元の差がある。

識緯の説では二十一元千二百六十年を一節とする、神武天皇から一節の終りが推古天皇の時代で、聖德太子の攝政時代、佛教思想の傳來と蘇我氏の横暴とに依る混沌たる國歩艱難の時代で、内人心の動搖と外交の難局とは、此時を以て頂點とする、そして其後の六十年に於て大化の新政を迎へた。

明治の維新は、神武天皇から四十二元、二千五百二十年目で、その辛酉は文久元年、公武合體和宮降下といふ徳川氏の終末を意味し甲子には蛤御門の變、長州征伐があり、丁卯は慶應三年で明くれば明治元年である、二節の終りが恰

も推古の朝に匹敵するものとすれば、大正の御代は齊明天智の大化新政に當り、蘇我氏と徳川氏、聖德太子と明治天皇、仲大兄皇子と攝政宮殿下、といふ第一節と二節との對照が出て来る。

斯うなると識緯の説にも神秘はある。

そこで、丁卯の年が歴史上何うであつたかを調べて見るのも興味あることであらう。

丁卯の歳も面白い廻り合せである、それは我國の農業に最も關係の深い年である、垂仁天皇の丁卯西曆七年には、天皇諸國に命じて池溝を造らしめ其數八百といふ、大々的に産米の増殖が圖られた、其後百二十年後の丁卯は景行天皇の朝で、此の年には田部を定め屯倉を置かれたとある、農業の初期的施設の完成を意味するのである朝鮮の産米増殖も多分今年丁卯の歳を以て、大々的に進展するであらう。

又丁卯の歳は朝鮮に非常な關係がある、百濟の使者が始めて我國に來朝したのが、西曆二百四十七年の丁卯の年である、此時神功皇后は譽田別太子、武内宿禰以下の百官と共に其使者を引見せられ、『先生望むところの國人今参りけり、痛しい哉、先皇の喪に遭はざること』と百官皆涕泣したといふ劇的シーンが演出せられた、それ以來百濟は我國の屬邦として、朝廷の厚き保護を蒙つた。

凡そ或國家が或國家に雌伏するには、必ずそれが血腥い戰鬪攻伐の後であるのが普通であるが、百濟の服屬は決してさうでなかつた寧ろ親の膝元を離れた息子が久しぶりに歸つて來たやうな、哀憐に富んだ場面が現出された、これは

面白い歴史の考察であるが、こゝには之れに論及する餘裕がない。

西暦三百六十七年の丁卯には五代相世の權臣武内宿禰薨じ、同四百八十七年の丁卯には、紀大磐宿禰が任那に據りて反した、宿禰は高句麗と内通して、朝鮮王となることを企てた形跡がある、上古我朝鮮統治の威信は此の時から失墮せられた、幸にして百濟東城王は之を亡ぼして事なきを得たのである、同五百四十七年の丁卯には百濟新羅相攻伐し、百濟聖明王は我國に援兵を求めたが、我朝廷は之に甚だ冷淡な態度を執り、終に百濟は新羅の爲に大敗して聖明王は匹夫の爲に其首級を擧げられた、これが殆んど我朝鮮統治の最後の失態であつた。

又丁卯の年は外交問題に大なる關係がある、西暦六百七年の丁卯には、小野妹子が隋に遣はされた之を我國外交の始めとする、同じく六百六十七年の丁卯には耽羅朝貢し、同七百二十七年の丁卯には勃海の使者始めて入朝した。丁卯は又帝都の移轉に關係があ

る、西暦六百六十七年の丁卯には天智天皇大津に遷都して、所謂國家中興の基礎を定められ、桓武天皇平城遷都の詔を發せられたのが、西暦七百八十七年の丁卯である。

丁卯は藤原氏の爲にも因縁が淺くない、右大臣橘氏が薨じて藤原良房右大臣となつたのが、藤原氏全盛の發端であつて、それが西暦八百九十七年の丁卯である。同九百六十七年の丁卯には藤原實頼關白にして攝政を兼ね、藤原氏爾後攝政關白に任じた、同千〇二十七年の丁卯には法成寺入道道長薨じて、藤原氏の勢は十六夜の月の如く缺け始めた。そして同千〇八十七年の丁卯には源義家清原武衡を亡ぼして、武門武士の擡頭となり藤原氏の勢ひ全く地に落ちた。

其後近世に於ては、徳川五代將軍綱吉が生類憐みの禁令を發したのが、西暦千六百八十七年の丁卯同千八百〇七年の丁卯には西蝦夷地を公收し、若年寄堀田正敦等蝦夷地を巡視した、露人漸く東漸して我蝦夷に冠したのも此年である。

### 人蔘の話

松田學鷗

◎人蔘の本場といへば、今は開城に限られてゐるが、昔は全羅道錦山であつたらしい。今でも朝鮮の老人には、錦山の方が効能が可いと云ふてゐる者さへある。

◎人蔘は紅蔘と白蔘の二種がある、前者は價高く、後者は廉、而して紅蔘は専ら支那に輸出さるゝ支那では古來萬能の靈藥として珍重する。

◎尤も日本でも昔は大に珍重したものである。徳川八代將軍吉宗の時には、朝鮮より種を取り寄せて、初め下野の今市に栽ゑ、それより所々に作つた。此の人蔘栽培の事を司つたのは、有名なる本草の大家にして、藥學の著述多き、田村元雄である。彼れは尙ほ關東奥羽の諸方を跋渉して、野生の人蔘を搜求した。

◎現に内地にて産する處は、尾張、出雲、信濃等で、品質の良きを、宇都宮、會津とする。何にせよ、人蔘は朝鮮の名によつて、全く占領せられてゐる。(朝鮮雜記)

それから千八百六十七年の丁卯が慶應三年に當り、明治天皇踐祚、山内豐信大政奉還を勸告し、徳川氏の大政奉還となり、王政復古の大令が降下した、そして其次の丁卯が大正十六年の今年である。

斯う繰り返して見ると、丁卯の年も可成に重要な歴史を所有して居る、そして如何なる形に依りて今年はそれが繰返されるか、年頭に斯うしたことを考へて見るのも面白いと思ふ。(一五、一二、九)

### 合財ふくろ

吉田莊一

◎鮮満開拓の橋本(豊太郎氏)さん「殖銀の野田君は、俳句がうまいね、加藤(高明)さんが死んで首相の椅子が若槻さんに廻つた時『雪と見て手近き宿にとまりけり』これが即興だ、ナントうまいぢやないか」橋本さんほめる。

◎その橋本さんの娛樂といふのが大したものだ。曰くテニス、ゴルフ、ボート、撞球、諺、將棋、圍碁。そしてそのあい間々に、悠々參禪とある。一ツは體格の立派なセイもあらう。

◎元老古城(梅溪)さんが、昨年末來病んでゐる。一日も早く本復されんことを祈る。

◎小林(藤右衛門)さんの原稿はめづらしからう。あの齡で、あの忙しさで……本社同人は、深く感謝してゐる。

◎久米さん中々やる……金剛山電鐵ではいよゝ七百萬圓の増資を決定し、線路の大延長を圖ると共に、長安寺に一大地所を買収し、金剛大遊園をつくるといふ……。

◎内地では久米さん、朝鮮では進辰馬さん、金剛紹介の二大元勳である。

謂廻天の力を與へ、既に破産に瀕

之を書替へ、赤裸々なる無一文の



支那では古來萬能の靈藥として珍重する。

よ 人夢は朝鮮の名によつて 全 占領せられてゐる。(朝鮮雜記)

進辰馬さん、金剛紹介の二大元勳である。

# 愛語

鈴木文助

山口君が来て京城雜筆の正月號に載せたアナタの『旦那と縁起』と云ふ一文はなか／＼評判がよいから二月號にもぜひ何か書いて呉れと云ふ。うまいことを言ふて人をおだてあげるのに君はなか／＼妙を得てゐる。

勿論お世辭でもなんでも人によく言はれたり、譽められたりして悪い氣のする奴もあるまい。彼の獨逸のカイゼルですら國民から批評されるよりも譽められる方がよつぽど嬉しいと云ふてゐた。曹洞宗の開祖道元禪師は此人を譽めることを愛語と云ふてゐる。曰く『愛語といふは衆生を見るに、先づ慈愛の心を發し、顧愛の言語を施すなり。慈念衆生猶如赤子の懷ひを貯へて言語するは愛語なり、徳あるは讚むべし、徳なきは憐むべし、怨敵を降伏し、君子を和睦ならしむること愛語を根本とするなり、面ひて愛語を聞くは面を喜ばしめ、心を楽しくす。面はずして愛語を聞くは肝に銘じ魂に銘す。愛語能く廻天の力あることを學すべきなり』と。實際うまいことを云ふたものだ。

此道元禪師の言葉に感銘したものか下ウかしらぬが、私の知つてゐる某銀行の支配人は蔭で人を譽め讃へて殆ど人の悪いことを言はぬ人がある。そうして此支配人殿は蔭で人を譽めそやすことにより時々人に所

謂廻天の力を與へ、既に破産に瀕して神經衰弱にかゝつてゐた人を感奮興起せしめ、六七年の間に忽ち元の資産に回復することを得せしめたと云ふ實例がある。

其話は則ちコウだ。或る人が友人の保證となつて其愛語家の銀行から拾數萬圓かの金を借りてゐた、所が大正三年頃の不景氣のドン底の時に木材業を營んでゐた友人がすつかり損をしてしもうて再び立つことが出来ないまでに瘡痍を受け、一時ドコか姿を隠くしてしもうた。

此姿を隠くした人の保證となつてゐた某氏は某銀行に對して辨償の義務を負はねばならず、又之をやつた所で其資産は負債の半額に達せず、はて下ウしたものであらふかと辨償の義務を逃れることに苦心算段してゐた。

そうして彼れはろく／＼ご飯もたべず、青くなつて殆ど半病人の有様となり神經衰弱に罹つてしもふたのである。

之を聞き知つた其銀行の支配人殿は例の通り蔭で大に其神經衰弱殿の人格を譽め讃へ初めた。

所がいつ誰が之を知らしむるともなく其人格稱讚のことが本人の耳に這入り、自己の人格がそれ程まで彼の銀行の支配人等を動かしてゐるかと思ふて忽ち大に感奮するところが、更らに自分は現在保證の義務を免れやうとした淺ましい心を起したことを大に愧ぢて自己の胸を拳を固めて之を打ち天地に向つて眞に慚愧する心となつたのである。

そこで早速彼れは其銀行に行つて友人の負債の義務を果す爲めには自分の資産全部を提供する旨を申出で不足の分は手形やなんか

之を書替へ、赤裸々なる無一文の人となつて新規時直しと出掛けたのである。

勿論銀行でもそれ程までにした人をムザ／＼見殺しにすることも出来ず、多少の應援をして商買をさしてあつたが彼れの意氣が全く別人の如く生れ變り奮闘能く窮境を貫いて行く様は銀行の人々をも遂に感激せしむるまでになつた。

そうしてゐるうちに折よく大正七八年の好景氣に遭遇し、すつかり元の資産以上の實力を有するまでに回復してしもうた。此等は確かにこの愛語よく廻天の力あることを證する一の實例と云ふべきである。

私共もこれから人を批評することをやめて、政策だらふとお世辭だらふと何んでもかまわぬから、面と向ふても譽め、蔭に於いても之を譽めて、絶對他人の悪口を言はぬ様にしたいものと思ふが、併しこの事に就いては誰も私の爲めに保證して呉れる人はあるまい。

## 鮎の繪の話

平田久雄

○工藤武城氏の夫人が、鮎を書くことに妙を得てゐることは、知人間でも評判だが、この間こんな滑稽なことがあつた。

○内地にゐる池田といふ舊友が統と一所に、手紙を送つて來たから、近ごろグツト腕をあげた工藤さん「來たな」といひつゝ、開けて見ると「夫人の鮎を所望する、君も書くなら何か紙切れに書いて來い」工藤先生ポーンと手紙を投出して「ウーン、こいつが／＼」。

# 浮田秀家

## おぼね書

### 永樂町人

○ 浮田秀家は、文祿役の總帥であつて、朝鮮とは、因縁が深い。ところが、彼の祖先を洗つて見ると百濟の王子天日槍であつて、その血は、韓族から出てゐるのである。

○ 備前平野には、朝鮮の移住民が多い。天日槍の詳しい事情は判らぬが、その移住といふことは、決して珍らしいことではない。多分多くの從屬を伴ふて、邑久、兒島地方に移り住んだものであらう。

○ 浮田氏は、初め邑久郡和田に住んで、和田氏と稱し、後兒島郡三宅に移つて、三宅氏と稱してゐたその武將として、初めて名を著したのは、曾祖父能家である。

○ しかし、備前、備中の兩國、並に播磨を斬り從へ、雄を中國に唱へたのは、父の直家である。これは餘程の膽略家であつたらしい。

○ 秀家の生母は、美作高田の城主三浦貞勝の娘である。三浦氏亡び娘は從者と共に、備中に潜伏してゐた。直家は、その姿色あるを聞き、搜つて、強ゐて入れて室としたのである。今岡山市内蓮高寺にある俗に所謂『おせん様の墓』といふのが、その人である。

おせん様は、餘程美貌の人であつたらしく、備東志などによる

○ 秀吉誅光秀、執天下之兵權、而後召直家後室、而爲家妾。

○ 秀吉らしい仕事の一節がある。秀吉らしい仕事であつて、いろ／＼の地方誌から、彼(秀吉)のタネのあがつて來るのは、苦笑を禁じ得ない。斯ういふ事情からであらう、秀家は幼少の時から、秀吉の特別の眷寵に浴し、八郎の幼名を、特に秀家と改めたこと、前田氏からその室を迎へたことなど、いぢ／＼秀吉の指金から出てゐる。

○ これは後のことであるが、淺野家所藏の古書にも『太閤様御煩ひの内被爲仰置候おぼえ』と題するものゝ中に『秀家は、幼少より自分の撫育するところなれば、秀頼とは義兄弟の縁あり、宜しく五奉行、五大老の間に立ちて、私心を挟まずして……云々といふ一節がある。太閤の心持が判るであらう。

○ 文祿元年、歳二十、外征の總帥として、朝鮮に押出した。彼れは、殊に小西行長と親しかつた。行長の父は、小西壽徳といひ、泉州堺の老舗である。然るに備前福岡の商人阿部善定といふものがあつてその手代源六を、商用のため、しば／＼堺に使はした。源六は、何日しか壽徳と相知り、遂にその子彌九郎を養ふて、子とするに至つた。これが小西行長である。源六は、岡山市下ノ町に移つて、魚屋九郎右衛門といひ、呉服を商つてゐたから、行長は、呉服屋の倅である。

○ 秀家は、つねに太閤に大阪、伏

見に従遊し、亦た久しく外征に従つたりして、その藩政を見なかつたから(尤も、彼は樂天家で、派手者で、砵々政を見るやうな人間ではなかつたかも知れぬ)おもて

○ 向きは、大に紊亂し、老臣の間に内訌が絶へなかつた。即ち初めは、長船紀伊守といふのが、政柄を専らにし、後には中村次郎兵衛といふのが、專擅至らざるなかつた。殊に重臣間に、日蓮、耶蘇の宗派争ひあり、その對時は頗る慘烈を極めたものゝやうである。戸川達安、花房職之、岡越前などは、烈しい日蓮信者であり、明石掃部、紀伊次郎兵衛などは、熱烈火の如き耶蘇信者である。關ヶ原の時、この耶蘇信者の多くは、秀家に從つて、西軍に從屬したが、日蓮信者の重臣二百餘名は、悉く東軍に屬してゐる。これは、前年中村次郎兵衛排擊事件につき、秀家の勘氣を蒙り、一時藩籍を離れてゐたためである。斯ういふ邊から察しても、人のいゝ秀家は、決して大藩の重石として、十分の賞祿を有つた人でなかつたことが判る。

○ 中村次郎兵衛といふのは、秀家夫人に從つて、加賀(前田家)から來つたものであり、備前の古書には、いづれも壁臣、内幸などと書いてゐる。可なりの才子であつたらしく、築城、河川計畫などには相當の事蹟を残してゐる。後には命が危ぶくなつて、夫人の指金で加州へ逐轉した。

○ 關ヶ原敗戦の日、彼は將士皆散じ、僅に近臣黒田勘十郎、進藤三右衛門と共に、江州路をさして落ちた。白樫村の土民五郎右衛門がすつくと槍を擬し、將に彼を一刺

せんとした。我れは、備前中納言であるとな乗ると、『おいたわし

へ、彼のために哀を乞ふた。直に談可久能て監査され、次へでし

せんとした。我れは、備前中納言であるとな乗ると、「おいたわしうござる」とて、槍を地に投じ、導いて我家に至り、數日圍まうて後、竹輿を以て、守つて大阪に送つた。

秀家は、島津氏を頼つて、薩州に走つた。大隅の國大隅郡牛根郷といふに、蟄居し、成元と名乗り、休復亦たは久福と號し、兩三年を送つた。島津忠恒伏見に家康に見

### 編輯後記

#### 一 記者

○一月十九日、本社で將棋の小集をやつた。辻六段を聘し、いろいろのいから新規蒔き直しに、習はうといふ譯である。盛會であつた。

○それから引つゞき、毎水曜々々に、同じ會をつゞけてやつてゐる。今後もつゞけるつもりである。寄稿家、讀者の御同好は、どうぞ水曜の午後六時から御貴臨を願ひたい。(月謝一圓)

○碁の方も、然るべき師範を得て、これと同じやうに、毎週小集を開きたいと思つてゐる。その中實行の運びに至るであらう。

○一月號の原稿のあと廻しになつたのが、二十篇ほどあり、そのため二月號は、早くメ切つた。その煽りを喰つて、また三月號へ廻すのが、五六篇出來た。どうぞ十二月(十月の)以後御惠投のお方は三月號まで、御辛抱を乞ふ。

○本號の中、足立丈次郎氏の「麻雀禮讚」は、社員がお訪ねした時、あゝいふお話が出たので、で

へ、彼のために哀を乞ふた。直に駿河久能に檻送され、次いで八丈嶋に流された。これは慶長十一年四月のことである。

八丈の配所には、その子孫九郎小平次を初め、浮田次兵衛、田口太郎兵衛、寺尾久七、小平次の乳母あい以下六名が、従うた。餘程の長壽であつて、明暦元年十二月まで達者でゐた。壽八十有三。

は鉛筆でもスグ……とお願ひして無理にその場で書いてもらつた。藝者の名前などの散見するのは、そのためである。

○印刷所を變更し、活字が變つたために、何んだかおかしい體裁になつた。困つたなど、社中で頭を掻いた。併し次號を見て、下さい。きつと、御満足の行くやう工夫を凝らします。

#### 原稿に就て

- 一、本誌メ切りは、毎月十日になつてゐますが出來るならば、五六日頃までに、お送り願ひたり存じます。
- 二、原稿は、なるべく十四字詰、百行以内にお願ひしたいと存じます。
- 三、どんなにお忙しい方でも、一箇月一篇くらいは、机に向つて、御感想をおつゞりになること、悪趣味ではないと存じます。
- 四、御願ひしたら、どうか奮つて御執筆下さいますやうに……。

#### 雑筆編輯部

#### 「心の宿」

大浦貫道師の隨筆及び講演筆記をあつめたものである。氏の快筆、快辯、快論は、世既に定評がある。本書は「心の主人公」以下五篇を蒐集したもので、これを一讀すると、まのあたり師の執辯に接するの概がある(定價一圓三十錢)

京城南米倉町一三五  
發行所 心の友社

細工の御用は  
徳力へ  
電本三九三九

全日銀金  
地金ノ御用  
京城明治町  
徳力本店出張所  
電本二〇八八

昭和二年一月廿八日印刷  
昭和二年二月一日發行  
(一部定價金四十五錢)  
發行所 京府和泉町一七〇  
印刷所 大和商會印刷所  
印刷人 石川利夫  
編輯人 松本武正



金剛煎餅金剛山  
金剛羊羹金剛饅頭

金剛山產松實松花應用菓

# 金剛飴

龜屋商店

京 城 本 町  
二 丁 目

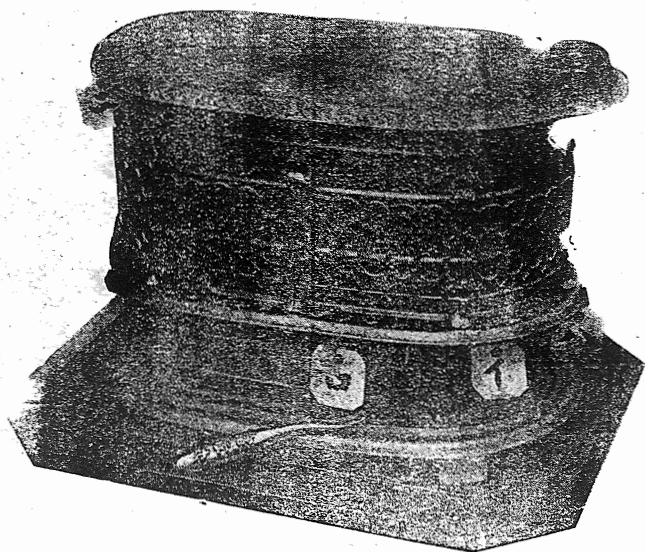
電 話 二 七 十 七 番  
本 局 四 七 五 番

金剛柏子 (松の實の鹽炒り)  
金剛柏子菓 (朝の鮮實の松菓子式)  
金剛おこし  
金剛しるこ

# 富永式特許暖爐

歐米風の  
生活様式から  
我等の文化生活に  
ピッタリ適合して  
遺憾なき迄  
改造された  
眞に

革命的暖房具  
富永式暖爐



## 五大特長

- 其一 燃料の一大節約  
一冬期中煉炭二噸乃至噸半
- 其二 絶へて灰塵飛散の患なし
- 其三 一般炊事に利用して尤も輕便なり  
飯炊きでも燒肴でも
- 其四 毫も火災を起すの虞なし  
イクラ焚いても煙筒灼熱せず
- 其五 煙突掃除を繰返すの要尠なし

組合事務所 京城長谷川町

朝鮮商工株式會社

京城出張所

電話本二三三二 同一六九

發賣所

青々園茶舗

京城本町二丁目

電話本一一二二番

朝鮮商工株式會社

本社 鎮南浦三和町

支店 京城長谷川町

大崎八段主幹

將棋大講座

全券十二冊、每月一券配本  
先拂十一圓、半年分五圓半

東京京橋區三十間堀三

發行所 文化生活研究所

京城雜筆 (第九十六號)

大正十三年一月二十九日第三種郵便物認可  
昭和二年二月一日發行(每月一回一日發行)